





山 岳

第三十四年第一號



# 山岳第三十四年第一號目次

冬の新高山群

早稻田大學體育會山岳部 一頁

ナンダコート日記補遺

立教大學山岳部 四

黒部奥山と奥山廻り役(三一完)

中 島 正文 七

木曾駒縦走に關する報告

谷 本 光 典 二五

一九三八年度米國隊のK2遠征報告

吉 澤 一郎 譯 二四

ヒマラヤ探檢史の一齣

望 月 達 夫 譯 一三

圖書紹介

一 登山家の思ひ出(尾崎喜八譯)

島 田 巽 一八

『山の憶ひ出』(木暮理太郎著)

黒 田 孝 雄 一五

## 圖 版

|  |       |    |
|--|-------|----|
| 北山中腹より見たる主山及びP <sub>1</sub> P <sub>2</sub> | 早大山岳部 | 一  |
| 新高駐在所附近から見た主山及東山                           | 〃     | 三  |
| P <sub>1</sub> の尾根の登攀(主山中央稜より)             | 〃     | 三  |
| ベイス・キャンプ附近                                 | 立大山岳部 | 四八 |
| 第一キャンプ                                     | 〃     | 四九 |
| 第三キャンプ上の氷塔を捲く                              | 〃     | 四九 |
| 移轉後の第四キャンプ                                 | 〃     | 五〇 |
| 三州測圖籍                                      | 〇     | 五〇 |
| 古代度々争論記                                    | 〇     | 五〇 |
| 山廻役御用勤方覺帳                                  | 〇     | 五〇 |
| 新川郡御縮山之圖                                   | 〇     | 五〇 |
| 空木岳を下る本隊                                   | 谷本光典  | 三六 |
| 木曾殿越の朝                                     | 〃     | 三六 |

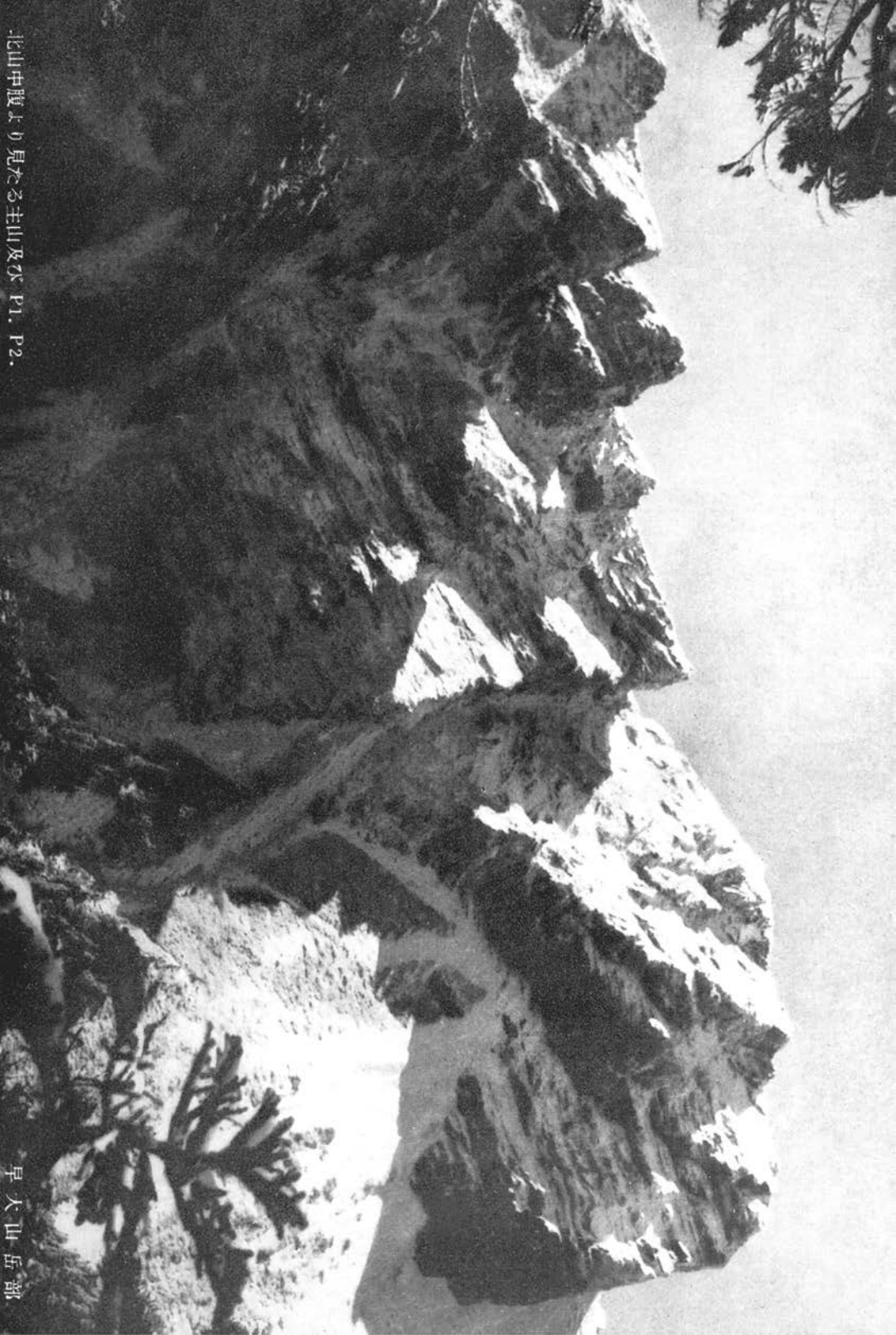
|                    |    |
|--------------------|----|
| K <sub>2</sub> の南面 | 一四 |
| K <sub>2</sub> の西面 | 一五 |
| ナイン・シン及びキントゥップ     | 一六 |
| キシエン・シン            | 一七 |

## 挿 圖

|                      |    |
|----------------------|----|
| 新高山群略圖(二葉)           | 四  |
| 上奥山盜伐小屋概念圖           | 九  |
| 八人用冬期天幕設計圖           | 一三 |
| K <sub>2</sub> 附近概念圖 | 一四 |
| 〃                    | 一五 |

## 附 録

「山岳」第三十三年總目次



北山中腹より見たる主山及び P1. P2.

早大山岳部





## 冬の新高山群

早稻田大學體育會山岳部

は し が き

手がかり、足がかりを知り盡した北アルプスの山々、其處には回顧的な興味と道場としての價值より他には我我には意義が見出し得ない様に思はれる。勿論諸先輩の登つたルートは現在でも我々にイーディーであるとは限らないが、然し、そこにパイオニヤーと同じやうな熱意を注ぐ事は無理ではあるまいか。對象とする山々が現在の我々の持つ技術を十分に要求するとしなにと拘らず氣候、風土、習慣の異なる未知のもの魅力は此の上なく我我を引きつける。次に又二十名近くの數多い隊員の一月月に互る團體生活はどんな結果を示すであらうかと云ふ事も、此處數年間我々が興味を持続けて來た問題の良い試金石ともなり得ると思はれた。一月と云ふ期間は決して長い期間ではない。然し今の我々の環境では是が精一杯であらう。

以上の様な種々の理由から我々は此の臺灣遠征が最も目的に近いものと考へ、是を撰んだ次第であつた。

隊員 先發隊・理工學部學生・吉阪隆正、杉本義信。

本隊・隊長理工學部學生・尾關正二、理工學部學生・桑島光雄、關根吉郎、宮川重雄、笠原茂雄、竹内孝、

政治經濟學部學生・鈴木正俊、遠藤享、百瀬孝、大井忠一、高等師範部學生・伊藤久行、専門部學生・加

計明吉、宮崎二郎、高橋章、港叶、海老原博、山崎三良、第一高等學院學生・前川浩一、東濱義男。

### 一、準備から出發

昭和十三年三月、穂高のテントの中で臺灣はどうかと言つた話題が出て、四月學校が始つたら調べて見ようといふことになつた。山に登る者にとつて、ひとつの試練である遠征登山を何處に行ふかと云ふ興味は誰しもが抱いてゐるのだ。

内地の山、殊に北アルプスの様に常々親しんでゐる山々とは別個の味を持つた、山容を異にする新高山群が一度問題にされると、その新鮮な魅力が直に我々を虜にしてしまつた。然し行くからには出来るだけの多人數で行きたい。若し可能であれば全部員でゞもと思つて、其の具體案を練り始めたのは既に秋であつた。十月の秋山を終へて歸京すると十二月の出發はもう間近になつてゐた。

入蕃許可の件、蕃人人夫の事、それよりも最初に心配しなければならぬ筈の費用の件があつた。我々學生はどうも費用の事は考へないで色々な計畫を立て、仕舞ふ様だ。小人數の山行ならこれは問題でない。然し部の計畫となつて遠征の形式を取る様になると、最も重要な問題となる。

食糧の揀定、及びパツキングの方法、器具其の他の運送、臺灣でのスケヂュール等の問題が夫々重要な性質を帯びて頭を悩ませた。殊に事變の折、大陸に近い臺灣は我々の認識を必要としてゐた。

十二月十七日、吉阪、杉本の二名先發隊として出發する。役所が年末より休暇となるので其の前に諸般打合せの爲、一週間の間隔を本隊との間に置いたのだが、向ふでは土曜、日曜が重なつて一日の暇も無く動かなければ

ならない。

先發隊を送つてしまふと、最早身體の一部分が向ふに行つた様な氣がして落着きが出て來た。然し第一學院の者は學期末の試験を控へて苦しい日を送らねばならなかつた。

十二月廿四日、十九時東京驛に集合する。中島部長を初め先輩、在京部員から激勵の辭を受けて、校歌の合唱、皆の顔付きも平常の山行とは違ふ様だ、汽車が動き出してからも興奮はなか／＼褪めない。無理もないこころ、二ヶ月多忙極まる日を過してやつと今日の出發となつたのだ。小さいながらも遠征の出發迄の苦勞が改めて感ぜられる。

十二月廿五日、神戸驛から港までルックサックを脊負つて歩いたので一と汗かいてしまつた。同行して來た仲間の灘波と愈々別れなければならない。此の山行の生みの親とでも云ふ彼と同行出來ないのは何としても残念な事であつた。早朝隊員の竹内に電報が來て、親族の不幸の爲に急に歸らねばならぬ事になつた。此所迄來て會計係の彼を歸す事は隊に取つても大きな損失であるけれども、竹内自身としてはどんなに残念だつたらう。

富士丸の綺麗なデッキを銀靴で踏む事は氣がひけた。チーク材の間のピツチが堀れる位であつた。ポイーに船中ではその靴で歩かぬ様との注意を受ける。

瀬戸内海の航海は楽しいものであつた。海を渡つて山へ行く事が切實に感ぜられた。

十二月廿八日、十時頃から次第に基隆沖の島々が雨の中に煙つて見えて來た。小さい島々だが巖丈に岩が切り立つてゐる。東海岸の山脈がずつと延びて島々を作つてゐるのであらう。灰色の空から雨が横なぐりに降つて來た。北部は雨期だと聞いてゐたが、果してその通りである。岩壁に着く前に水上警察に呼ばれた、寫眞撮影、氣

象觀測が問題となる。その他登山を宣傳する様なパンフレットを持参しなかつたかとか、全然豫期してゐなかつた質問をかけられた。

上陸のごたくしてゐる内に先發隊からの手紙が手に入つた。總て圓滑に進行してゐる由、三十分もすれば會へるのだが、少しでも早く安心させる爲に手紙を呉れたのだ。船中へわざ／＼基隆の校友の出迎ひを受けた。

岸壁に先發の杉本が見える。元本學園配屬將校の粟飯原先生が郵船の二階迄來てゐられるとの事で早速郵船に行く。驛から道路を越すと郵船ビルであつたが雨の道を裸足でベタベタ歩いてゐる車夫達の姿が目についた。

種々有益な注意を受けて紹介状等を戴いたが汽車の時間も迫つてゐるので、早々に別れて十三時三十分の汽車に乗り込む。

やつと落着いて先發の二人に此の一週間の事を聞いた。何から先に言つてよいのか迷つてゐる様子であつたが、二人共本隊と落合へた事の喜びで一杯になつてゐた。

臺北の驛では多くの校友、新聞社等の出迎ひを受けた。

直ちに臺灣神社に向ひ、旅館に入つたのは十六時過ぎであつた。晝飯を十分に食べてゐないので頗る空腹を感じて臺灣名物の燒米粉ビシを食ふ。多くの臺灣紀行で名前だけはお馴染になつてゐたので、些か臺灣氣分を味ひ始めて來た。夜、内務部長の鈴木氏をお訪ねして有益な助言を戴いた。

## 二、臺北から八通關

十二月廿九日、軍司令部、憲兵隊に了解を求めに廻る、地圖等も好意によつて入手する事が出來たし、寫眞

撮影の許可も戴けた。校友の花香氏は山に關する重要な注意を與へて下さつた。臺灣では登山界の第一線に活躍されるのは花香氏の様に、主に相當な年輩の方々が多いと聞いた。若し、此の年頃の方の對象とする山が臺灣の山であつて、我々若い者に取つての對象にはなり得なかつたならばどうであらう。相當に調査をして可成りの確信を持つて臺灣迄來たのにも拘らず軽い不安の氣は拂ひ盡せなかつた。

十二月卅日、七時五十分、水裡坑に着く。昨夜臺北で乗つた時には成程臺灣の汽車は暖房設備は不要だと感心したのだが、二時三時となると寒くて寝られるどころではなかつた。

フオームには先發隊の手配で四十數個の荷が積み上げられてあつた。驛前から百米許りの所に臺車の出發所があつた。人相の餘り良くない襤褸を着た本島人の、臺車の親分と思はれるのに交渉をして、結局十五臺に荷物と我々が乗る事になつた。荷の配分を終り出發したのは十時であつた。少し行くと直ぐに材木の積んだのに出會ふ。單線の爲に降りてよけなければならぬ。此が再三再四續くので非常にまだるっこしい。

濁水溪に沿つて進んで行く。廣い河原である。次第に芭蕉が多くなつてくる。澄んだ青空に緑の大きな葉が突出つてゐる。而も其れが見渡す限りあるので、つくつくと棘が丘一面に生えた様に見えた。

那坑で晝食をしてゐると蕃人の夫婦が下からやつて來た。美しい赤い蕃布で體を覆ひ、蕃刀を腰にさげて黒い小さな仔豚を一匹首に紐を着けて連れてゐる。女の方は赤坊を脊負つてゐた。何れも裸足であるが、何となくきりつとして上品な所があつた。

和社を過ぎる頃から陳有蘭溪の谷も次第に深くなつて來て日も沈み始めた。對岸の斜面に楠梓<sup>ナツヅ</sup>脚萬<sup>カクマン</sup>の蕃人の燒畑をしてゐるのが目に入る。夕暮の迫つた空に二・三十米とも思はれる赤い焰を上げて燃えてる様は中々の壯觀

であつた。

十八時過ぎ、水裡坑から三十八杆の道に約八時間を費して臺車の終點である東埔に到着した。此處から温泉迄は十六町の山道で、今迄少しも歩かないのに馬鹿に疲れた様な気がするので蕃人に二度往復して貰つて、我々は空身で温泉に行つた。駐在所に立寄ると忘年會かで宴會の最中であつたが、親切に山莊に案内して呉れた。温泉の匂が鼻を突いた。この山莊は警察官の療養所で、駐在所に頼んで一般の人は泊めて貰ふのである。

全員が温泉につかり食事を終へたのは二十二時を過ぎてゐた。新聞社に通信を送らねばならぬ者は寢不足と馴れぬ事なので中々筆は進まない。それでもどうやらでつち上げて寢たのは客時を過ぎてゐた。

十二月卅一日、七時に人夫に來る様にと約束して置いたのだが寢不足の爲、がや／＼言ふ蕃人の聲に目を覺す迄寢過してしまつた。その上臺車の發着所から三分の一許りの荷が到着してゐないので輸送係の杉本は、人夫を連れて朝飯も食はずに飛んで行つた。三十人からの蕃人人夫が集つてゐた。駐在所から警官が來て何くれとなく指圖をして呉れる、大分女も混つてゐたし、その中には未だやつと十歳位と思はれる小さな子供もゐた。昨日顔を見知つてゐる者は丁寧に頭を下げて挨拶をした。年を取つた女の蕃人には眞鍮か何か金色をした腕輪をはめて、煙管を無造作に髪に差してゐる姿も見受けられたが、半数程は地下足袋を穿いてゐた。

警官は蕃人の荷を一々持つてみて重量を平均し、細々した所まで心配して下さつた。女でも相當な荷である。子供でも四、五貫はあらうと思はれた。昨日一寸見た様に肩で擔ぎ、その上藤で編んだ一本を頭の上で支へてゐた。九時二十分頃三十六名の蕃人人夫は用意が出來て直ぐ前に懸つてゐる大きな長い釣橋を渡つて行つた。橋の袂で吉阪が、持つて行つた荷を一々記しており、鈴木もアイモの撮影に忙しかつた。

我々も直に後から出發した。懸橋を渡り等高線に沿つたよい道路であつた。陳有蘭溪の斷崖の中腹に造られてゐて、河原からは百米はあらうかと思はれた。東埔から二軒と道標のある北仙峽と云ふ、大きな斷崖の傍に亭のある所に出た。良い風景であつて下方に蕃舎が二軒許り見える。對岸の山は壯大であつて牙え切つた空に、山の色迄コバルト色に霞んで見える。暑いので上半身裸體になつて歩いてゐる者もあつた。

榮々の駐在所に着いたのは十一時五十分であつた。用意されたお茶で晝食をすませた。此所からは新高西山が眞正面に見える。主山より約四百米低い三五〇〇米の西山は頂迄森林に覆はれてゐて、最近に雪が降つたとの事だがそれらしい跡はない。臺北以來の不安が亦濃くなつて來た。

對關を出て間もなく蕃人達の叫ぶ聲が溪間に木霊して響いて來た。今朝東埔を出る時に聞いた非常に單調なヨデルの様なものである。姿は見えないが最早八通關に荷を置いて歸つて來たのに違ひなかつた。

果して遠くの方に元氣よく一列になつて下つて來る姿が見えた。一人々々丁寧に挨拶して行く。東埔では半分位地下足袋を穿いてゐたのに今は殆ど裸足で歩いてゐた。

十六時半東埔から十五軒の觀高に着いた。此處は群大社からの路の落合ふ所で今迄あつた大木は無くカヤトの尾根であつて四方に眺望の利く處であつた。此所から主山が見える筈であるのに午後からまいて來た霧の爲に上部は隠されて望は斷たれてしまつた。然し東方は残雪を點々と残したマボラス山や、その左には秀姑巒山の雄大な姿に接する事が出來た。觀高を出て、桃源橋、曙橋と云ふ小さい橋を渡り崖の中腹に帶の様につけられた道を行く。八通關の陰となつてゐるので臺灣梅にサルオガセ等が澤山着いてゐる。崖の路を行くと急に左に入りカヤトの茂つた牧場の様な感じのする廣々とした八通關に出た。直ぐ目の下には幾棟にもなつた駐在所があつた。

十八時に駐在所に着く。その前には登山者の爲の宿舍があり、その中の四室が我々に當てられてあつた。先づ駐在所に挨拶に行く。古木部長を始め大いに歓迎して下さる。宿舍に歸つて荷の整理をしてゐると風呂に入つて下さいと勧められた。二八三〇米の高處で風呂とは驚いたが駐在所の方々には、年中居られるのだから風呂も無くてはならぬであらう。山の中とは思はれない食事をすませてゆつくりと安心した氣分で温い布団に入つた。

### 三、新高主山へ

昭和十四年一月一日、小ルックサククの輕装に九時出發する。相變らず好い天氣である。我々十九名と、最後まで使ふ契約の人夫五名、枯草の斜面についた路を一行になつて行く。幾分肌寒い程で霜柱が立ち、歩く度にさくさく音を立てた道は老濃溪に沿つた緩い上りだ。谷の深いには驚かされた。ぐつと刳つた様で谷底は見えない。唯松や栂が遙か下へ續いてゐる許りである。その谷に沿つて路は縁附けられてゐる。

二十分ばかり歩くと谷を立籠めた霧が動き始めた。その内に霧がさつと晴れ渡つて、澄んだ紺碧の空に紛ふ方なき主山が姿を現はした。灰色がかつた岩塊に水成岩特有の層を横に走らせて雪を戴いて白く、前面に二三本の並行な稜線を形造つてゐた。豫想してゐたより遙に美しく立派であつた。右の方は主山で切れてゐたが、左の方は幾つかの小ピークが續きそれが黒く大きな東山のピラミツドで、手前の森林に接續して老濃溪へ落ちてゐた。

臺北以來頭をもたげてゐた不安は一度に飛んでしまつた。あの主山の鋭く切れた岩壁だけでも遙々臺灣迄來た



甲斐を全然無くす事はあるまいと思はれた。双眼鏡で覗いて見ると、尾根は何れも極めて急に見えた。而もその間に美事な層が横に走つてゐるのであつた。水成岩の層は多年我々に取つて多大の魅力であつた。然し乍ら今日まで我々は穂高でも剣でも此の様な山容に接する事は出来なかつたのだ。

九時四十分に新高駐在所に着いた。八通關から約三軒である。黒い岩肌の岩稜が東山の頂から押し迫つて來てゐる。我々の登高慾を咬るに十分であつた。

駐在所には松が玄關に釘付けにしてあり日章旗も立てかけられてあつたが、人は誰も居ない様で靜かであつた。二羽の鶏がクツクツと喉の中で鳴き乍ら玄關の側の地面を突いてゐた。

水の無くなつた老濃溪の澤に入つて道は大分急になつて、ジグザグを切つて登る様な所も出て來た。臺灣梅の思ふ存分成長した大木が空を覆ひ、その幹の間から主山が朝の光に輝いてゐた。東山は眞上にある。東山より主山に續く大岩壁を左に見ながら一步毎に高くなつて行くのが感ぜられる。十一時長命水で晝食にする。此のあたりから眺めるとどの尾根も非常に傾斜が強い様に思はれる。水成岩の岩は登攀の對象としてどんな岩質であらう。今迄とは反對の心配を始めねばならなかつた。

長命水を出ると間もなく梅の大木は姿を消して這松、石楠花等の灌木地帯に入つた。十二時一二、四七六尺の富士標高に出た。がらがらの大きなカール状になつた斜面にジグザグの道が附けてある。岩に厚いフェルグラがついてゐる。雪が溶けてから凍つたのであらう、風陰になる道にはザク／＼と氷塊が溜つてきらきらしてゐた。

相當な強風で稍ともすれば體も飛びさうになる程であるが、北回歸線の風は自ら異つてゐる様であつた。然しジグザグが終つて肩に出ると急に風は止んでしまつた。尾根に登ると西の方へ、臺南州との州境となつてをり西山

へ向ふ路がある。西側は非常な急傾斜ではあるが、岩の細片とそれに依る砂のガラ／＼の連続であつて全然登攀の對象にはなり得ないと思はれた。

十二時五十分全員揃つて頂上に立つた。

在京の灘波、小林に託された日章旗を振つて萬歳を叫び、次に大陸の將兵の爲に默禱を捧げた。これで目的の一部は達する事が出来た。然しこれから愈々我々の本來の仕事をしなければならぬのである。

「大日本帝國最高峯新高山絶頂海拔三九五〇米」と書いた標があり、岩陰には立派な避難小屋があつた。非常に良く晴れた日で雲の片鱗が所々に浮んでゐるのみである。南には南山が間近に迫つてゐて其の北壁は物凄い尾根が聳立してゐて何處をどう登ればよいのか見當もつかない様に見えた。その左には幾重もの山波とその後から關山が三角形の頭を見せてゐた。

東には主山と高さを競ふ東山が一杆の近くに呼應して北面の鋭い斷崖に南面の緩い傾斜の草原がよい對照をなしてゐた。大地から盛り上つた秀姑巒山、マボラス山と続く中央大山脈は東山の左に北に限りなく延びて、眞白に雪を被つた次高山で終つてゐる。

何れを向いても何等遮る物は無かつた。少しく岩場の偵察をやつたが、此處から見える所は主山から東山への北壁と南山の北壁であつて、豫想して來た主山から南山に續く東壁や北山には岩場らしいものは見當らなかつた。

一時間半程頂上に居て十四時十分下山し始めた。登りに風の強かつたジグザグの路は相變らず強風であつたが富士標高迄駆け下りるとばつたり風は止んでしまつた。仰ぎ見た主山の北壁は全く素晴らしかつた。

下りは二時間足らずで八通關に着いた。夕食後明日からの行動の協議をする。その結果明二日は休養日として荷の分配整理に費して三日から行動を起す事にしてパーティーの編成は次の様になつた。

### 第一 隊

リーダー 大井忠一、宮川重雄

隊員 前川浩一、海老原博、東濱義雄、宮崎二郎

人夫 パイソ・タケルルン、アンバス・タケンタハイヤン

八通關より南駐在所に一泊して大水窟山、秀姑巒山、マボラス山、丹大山、東郡東大山を縦走して郡大溪より八通關に十二日に歸着する。

### 第二 隊

吉阪隆正、桑島光雄、山崎三良の三名とラロ、タケスモーラン

南山を経て南玉山の縦走と南山の岩場偵察

### 第三 隊

尾關正二、關根吉郎、笠原茂雄、鈴木正俊、杉本義信、百瀬孝、高橋章、伊藤久行、遠藤亨、港叶の十名、其の他人夫ギヤン・タケリヨリヨン、ワオロ・タケンタハヤン

新高駐在所を根據地として主山、東山の北面の登攀

明日は休養なのと今日の征服で誰も樂しさうに在京の部員や戦場の先輩に寄せ書等をしてたりして疲れを休めた。

一月二日、考へて見れば東京を立つてから汽車、汽船と臺灣へ来てからも毎日仕事で追はれ、昨日で一つの目的も終つたのだから今日を休養として良い時分であつた。

風は少し強いが良い天気である。昨日迄國立公園調査隊の人々も居たが、八通關も今日は我々だけになつた。五人のブヌン人夫を連れて来て荷の分配を始める。何しろ食糧三十五個、器具十二個、合計四十七個の荷が八通關に来てゐる。其を食糧係と器具係が指揮して昨夜定めたパーティーに適する様に分配しなければならない。テントを使用するのは第一隊と第二隊だけである。雪中幕營の用意もして来たのだが今年の天候では全然不用になつた。始めの計畫では登攀隊も勿論テントを使用する筈であつたので、部屋にあるだけのテントを持つて来たのである。第一隊と第二隊とは適當なのを選んでゐる。第三隊はザイルとかハーケン、カラピナの登攀用具を揃へた。

食糧は出發前には便宜の爲五パーティーに分けて、それを規準にして朝鮮遠征の時の分類を参考に細目に涉る表を作り、それによつて荷造りをして来たのであつたが、こちらに来て隊の編成をすっかり變へてしまつたのでそのまゝと云ふわけには行かなかつた。

一通り仕事が終わつて室で雑談してゐると特高課の者ですがと云つて、一人の私服の警官が名刺を出した。

「皆さん寫眞を撮るさうですが、軍司令部の許可證をお持ちですか。」

「持つてゐます。」と、鈴木が周章てゝ出さうとした。

「高雄州の特別區域を知つてゐますか。主山から南は高雄州ですから。」

鈴木は臺北で貰つて来た許可證を出した。

「結構です。唯百米以下は絶対に撮らないで下さい。」

と付け加へて出て行つた。兼ねてから臺灣の山は此の様な點でうるさいとは思つてゐたものゝ、是程とは思ひも及ばなかつた。然し事變下であれば當然の事であらう。登攀の傍ら簡単な氣象觀測もやる豫定であつたが、臺北で全部不許可になつてしまつた。

撮影した寫眞も東京の憲兵隊で檢閲を受ける事になつてゐた。もう何本か東京へフィルムを送つたが、尙はつきりと注意させる爲にもう一度その旨を東京の新聞社に打電した。それは八通關の駐在所から電話で電報を打つ事が出来た。

午後は何もする事が無いので各自思ひ／＼の事をやつてゐた。宿舍の前の廣場でコリントゲームをしたり、風を避けて晝寢をしたり、美しい空に三千米の太陽は暖かつた。一昨年 of 朝鮮の寒さとは何と云ふ違ひ方だと感心しないではゐられなかつた。

#### 四、第三隊 新高駐在所を根據地として

一月四日 尾關、關根、百瀬は東山へ偵察

笠原、杉本、伊藤は主山へ偵察

鈴木、港、遠藤は北山へ

一月五日 關根、百瀬東山北東稜登攀

高橋、港、主山北稜登攀

一月八日 杉本、伊藤PⅠリッヂ登攀

尾關、笠原、鈴木主山中央稜登攀

一月十日 大井、宮川PⅠリッヂ登攀

尾關、宮崎、東濱PⅠ、PⅡ間のルンゼ登攀

一月三日 朝此處へ来てから初めて霧が立籠つてゐたが、陽が昇つて出發の頃にはすつかり晴れてしまつた。

南玉山隊とマボラス山隊が出發する。これから一週間以上お別れだ。荷も相當に重い、四人と八人は西と東に別れて元氣よく出發して行つた。鈴木と港は相變らず撮影に忙しい。ヤツホーの聲は暫くの間聞えてゐた。我々第三隊は今日中に新高駐在所迄行けば良いので、ゆつくりと晝飯をすませて出發する。出發を前にして駐在所の古木部長に計畫の大體を報告する。山の中にある間は何から何まで警察官の世話を焼かせるわけだ。

新高駐在所は實に良い所である。駐在所を圍む臺灣榭や松の大木はがつしりと充實して生えてゐる。目の前には東山の岩壁が聳えてゐるが此の岩壁は東北を向いてゐる爲に、朝一寸陽が當る丈で一日中殆ど蔭になつてゐる。東山の續きの岩壁には白い瀧が凍つて懸つてゐた。

爐の切つてある二間續きの六疊が我々に當てられてあつた。

夜此の駐在所の國吉さんにお茶を飲みながら色々話を聞いた。國吉さんは凡そ我々が持つ警察官の概念から遙にかけ離れた人で、ぼつぼつと語られる話の面白さに夜の更けるのも氣がつかなかつた。

一月四日 今日偵察に行く、主山に登つた時に大體の見當は附けたのだが、東山附近は是非近くから見ると要があつた。尾關、關根、百瀬はギヤンを連れて東山へ、笠原、杉本、伊藤は主山へ、鈴木、港、遠藤は北山へ

撮影に、高橋とラホは八通關へ荷を取りに夫々出發する。

今日は絶対に登攀はやらぬ事にしてザイルも持つて行かなかつた。

對象になる東山の尾根はどうやら二本である。それが頂上の附近で一緒になつてゐるらしい事は、駐在所から望遠鏡で覗いて見當はつてゐたのだが、それ以上はどうすることも出来なかつた。

能高越標高を越し澤を渡つて間もなく駐在所から三十分ばかりで東山の東肩に通つてゐるルンゼの入口に出た。是を登つて見るより他に方法も無いので笠原達と別れて登ることにする。谷川岳のマチガ澤の入口に似て大きな岩が積み重つてゐた。上に行くに従つて思つたより急になりガサ／＼の岩になつて来る。處々に青い瀧が懸つてゐる。全然日のさゝない澤の中の爲であらう。ギャンは地下足袋を穿いて輕快に動く。蕃人は一體に無口であるがこんな時も一言も口をきかないで黙々として来る。左側は上迄續いてゐるらしく可成りの急傾斜で瘦尾根らしく、チムニーにチョックストーンが挟つて空がすけて見えてゐる。右側は可成りの急傾斜であるが上迄續いてゐるらしく、二・三本木の生えてゐる肩から尾根に出られさうである。これ以上はルンゼも急でザイル無しでは登れさうもないので下りにかゝつた。途中山羊の道に出る。ギャンが竹の棒を拾つて「槍」と言つた。大分古くなつてゐるが山羊を追つて來た蕃人が投げたものに違ひなかつた。見つめてゐたが思ひ出した様に「アブナイ。」と言つて側へ投げた。到る所に山羊の黒い糞が堆高く岩の上に積つてゐた。

十二時十五分、下の道に出た。早過るので長命水迄登つてよく眺める。三ヶ所程殆ど垂直の所がある。其處がキーポイントになるのではないかと思はれた。

駐在所に歸つて玄關前のベンチに腰掛けて東山を眺めて暫くすると、主山、北山兩パーティーも歸つて來た。

笠原達の一行は富士標高から東にトラヴァスして主山から東山に続く一つ目のコルに出るルンゼを登つて偵察して來た。主山の稜及びPⅠ、PⅡの稜も尾根が簡單であり比較的容易に登れさうであるし、雪がコンクリートして落石の危険を少くしてゐたさうであつた、北山は灌木殊にヘビノボラズや新高ビヤクシンの爲頂上が目の前なのに残念ながら引き返して來たのだつた。然し北山側からの東山の觀察は非常に得る所があつた。誰も緊張してゐる明日の登攀を前にして頭が冴えてよく寝られない。方々で寝返りを打つてゐる。

一月五日 昨夜迄の快晴に引きかへて、今日は大分雲があり老濃溪を霧が埋めてゐる。若し今日天候が崩れたら登攀は、三、四日は遅れねばならない。不安にならないでは居られなかつた。今迄餘り良い天氣が続いたから、今日あたりから悪化するのかも知れない。然し降つたら降つた時と覺悟を定めて出發する事にする。

關根、百瀬は東山へ、高橋、港は主山北稜へ、尾關、鈴木、笠原は撮影をかねて主山中央稜へ、伊藤、杉本、遠藤は人夫二人連れて東山へサボートに夫々出發する。

尾關等は富士標高で霧の晴れるのを待つたが西風を受けて霧は大きく流れ、後から後から襲つて來る。これでは撮影は不可と見切をつけて主山―東山―駐在所と云ふ様に行く事に計畫を變更して主山北稜に向ふ高橋等と別れて主山に向つた。

高橋、港は富士標高からガリーを東にトラヴァスして主山北稜の下端に取附いたのが十一時。互に先頭を交代しながら霧の中を登る。岩が柔である爲ブレイング・ピンに困難を感じたが三時間足らずで頂上に達する事が出來案外に容易な登攀であつた。

尾關等は十二時主山頂上で杉本等に追ひ付いた。直に杉本達は出發する。避難小屋に萬一に供へて食糧其の他



を置いて東山へ行く。東山への尾根は大きな這松や處々に岩場がありその間を縫つて山羊の道がついてゐる美しい尾根であつた。東山の登りは此の附近には珍らしいサウンドロックの氣持の良い岩登りであつたが頂上附近になるとアンサウンドになつて來た。

頂上で人夫達に會ふ。關根達はもう登つて直に此方に來るさうだ。ホツと安心した。萬一の事、之は仲間に対して誰しもが持つ不安だ。何か胸に蟬りがある。やがて先頭に關根、百瀬が後に続く。杉本等が護る様に近づいて來た。關根等の顔にも喜びが溢れてゐる。お互の成功を祝し合つたが二人の興奮は中々去りさうにもない。

東山のもう一つ東よりのピークに出る。下からトーチカの様に見えるドーム形の岩は圓い薄い岩板であつた。

頂上は廣い草原で四千米近くの頂上とは思はれない程のんびりした所であつた。此所にテントを張つて毎日蕃人に水を運ばせたらと考へたりした。焚火をして二回目の晝飯を食ふ。遠く尖山、大水窟の山々が眺められた。

良い氣持に體を暖めて、ガラ／＼なガリーを下り、降る可く昨日關根と偵察したルンゼの原頭に立つた。降り口は却々險惡で樹木を利用してザイルをかけて下つた。人の下つた事のない澤はともすると岩雪崩を起しさうであつた。下降に正味二時間、東山から三時間を費してしまつた。早く歸る筈であつたのに駐在所に着いた時は主山を廻つたパーティーの方が先に歸つて來てゐた。

此の日の百瀬の日記から東山東北稜の模様を抜萃してみやう。

八時四十分ルンゼの都合に着いた。昨日來た地點迄は四十分位で登れた。偵察した通り東山東北面の岩壁の北の一稜を頂上へ登攀しようと決した。丁度コルから挿し込む朝日は岩壁と尾根を照して我々に尾根の岩容をよく知らせてくれる。大體頂上から四段位に大きく段を作り東北に飛出して東側は岩壁に續き西側は大きな澤にオー

バアハンクしてゐて末端は絶壁と氷の瀧で森林帯の中に没して居た。

末端から最初のガリーを登り第一段目のテラスへ登らうと澤を横切つて下に出た。高度は三千四百米位である。

粘板岩の岩を踏んでテラスへ登り着く、未だ尾根の末端で西側の澤は見えず、足の下は森林である。見上げると灌木の草附きの岩は思つたより傾斜が強いので此の石楠花や躑躅やヘビノボラズの生えたテラスで、四十メートルに結び合ひ、ハーケン、カラビナを夫々分配した。幾分の興奮を落着けて先づ關根がトツブを登り出した。テラスは母の木が一本あり此の邊りが森林限界線となつてゐた。

綱が灌木に絡んだりするのには思はぬ苦しみをして八十米も進んだ頃やつと尾根に出た。振向いて見ると北山は未だ見上げる様に高く朝陽に輝いて居り、登つて來た溪は北山と我々の足下に未だ眠れる様に横たはつてゐた。

尾根は案外細くテラスと思つて登つて行くと切れさうになる細い尾根で、穂高岳瀧谷の第四尾根の下部を思はせる様なナイフリツヂを形成してゐた。尾根は時々小さく切れ込んでゐるので、その都度此處で終りになるのではないかと不安になつた。その上非常に錯綜してゐてどう上つてゐるのかも見當がつかない位であつた。粘板岩の岩質は板狀に剝離するので其の一枚々は指でも折れる位柔かであるが、一塊のを押へるやうにすれば案外安全なホールドが得られた。

幸ひ數日來の晴天と氣温の高い爲に軍手だけで登れるのは樂であつた。我々の西に澤をおいて大きな尾根を見る。之は頂上の下の三角形の岩壁で我々の尾根に合してゐる。矢張り昨日の偵察した時に感じた様に此の岩壁が問題であつた。

八ピツチ程登つて時間を見ると十二時になつてゐる。手頃なテラスに出たので晝食を攝つた。乾パンを二人で一袋も食はない中に又攻撃に移つた。

我々が又一段登つた時、尾根は全く姿を北壁の一角稜と變へてしまつて、西の澤へオーヴァーハングして垂れてゐるのみであつた。三角の岩壁は此の岩の上で薄赤い岩肌を頭上に見せてゐた。岩には全々ホールドがない。不安が絶望に變つて來た。然し先づ第一に注意を引かれたのは此の岩壁がやがて西へ延びて北壁にならうといふ所に即ち岩壁と北壁の繼目に登れさうなクローアールを發見した。そこで岩の下を廻つてクローアールの下端に達した。テラスが無いのでクローアールの中で確保する。關根がトツプで登り初めた。案外傾斜が強いので殆ど體を岩の外に出して頭の上を次第に登つて行く。最後の出口が悪くホールドが無いと上の方で言ふ。クローアールの中で確保してゐる自分の位置が不安定なので私は出來たらハーケンを打つ様にと叫んだ。それから何か上方で言ふのが谷に大きく木霊すると間もなくハーケンを打つ音が氣持よく響いて來た。此の岩にハーケンが使へるかどうかと云ふ不安は、打終つてパチリとカラビナを通す音が小さく併し確りと聞え、「岩が固くてうまく利いたぞ。」と言ふ聲と共に消え去つてしまつた。

今度は釣上げだ。關根の登る調子に合せて綱を引く。體を岩から離して一段登りホールドを探す。併し未だ十分な手懸りは無いらしい。暫くしてもう一本打つ。今度は釣上げをしまゝで打つ。クローアールの出口なので不安定であり、岩の固すぎる爲に深く入らず餘り良く利かぬと云ふ。關根は疲れて來たらしい。併し頭張りの強い關根は二、三何か言つてゐたが、更に續けて第三のハーケンを打ち始めた。綱を通して上の動作は微妙に感じて來る。「うまく利いた」ぞと言ふが早いか一步一步私の手から綱が繰り出された。テラスに登れば又行手は尾根

になつてゐた。然し次第に傾斜の緩くなるのが感じられる。これから尾根を東側に廻つて行けば三角形の岩の上部に出られさうである。尾根に處々に固い岩の現はれてゐる所がある。この様な場所が岩が固くハーケンの利いて呉れたのは幸ひな事であつた。

三角形の岩の上に立つとサポーターイグパーティーの伊藤の姿が見えた。ピッチを早めて尾根の上に登り着く。氣がついて見ると何時の間にか主山は霧に隠されて見えない。これからはコンティニェアスで頂上に立つた。十四時十分であつた。杉本は人夫と火を焚いて熱いコ、アーを作つて呉れてゐた。尾根に取りついてから六時間足らずであつた。

一月六日、七日、連日の好天氣が今日は遂に崩れた。昨日二つの登攀をすることが出来たのだから天候が悪くても割に呑氣にしてゐられる。曉方は非常に霧が深く駐在所の直ぐ前の一本松がぼんやり見える丈であつた。十時頃から雨になり出した。七日も雨と霧であつた。秀姑巒山や南玉山へ行つた連中はどうしてゐる事であらう。隊員は好いが蕃人達が困つてゐると思はれた。國吉さんからマボラス山附近で一寸した吹雪に會つて死んだ蕃人の話などを聞いてから餘計に心配になりだした。

雨垂れの音を聞きながら日記などをつけてゐると十月上高地の雨の音が頭に浮んでくる。氣候も丁度そんなものであらう。

一月八日、秀姑巒山もマボラス山も一夜の中にすつかり變つてしまつてゐた。主山、東山が銀色に輝いてゐるのは何とも言へない。駐在所の前も二種程積つてゐたが、陽が當ると同時に解けてしまつた。

十時十八分出發。北山登山口とある長命水の少し手前までは全員で行つたが、此所で北山へ行く關根、百瀬、

高橋、港、遠藤と別れる。杉本、伊藤は溪をつめてPⅠから出てゐる尾根の下迄行つてゐるのが見える。鈴木、笠原、尾關は中央稜へ投影を兼ねて行く事にして富士標高からガリーを東にトラヴァースして尾根の下端へ取付く。雪も確り緊まつて落石の危険もない。然し岩に厚くフェルグラが着いてゐてテラ／＼してゐた。氷玉になつた草付きを登り十三時尾根へ出た。ザイルをつけて笠原をトップに登り始めた。傾斜は強くはないがベトリと附いたフェルグラの爲にとすると不安定になり易い。シュタイクアイゼンを持つて來なかつた事を悔んでも始まらない。北山の樹氷が美しく輝く。此の邊は早くも日が蔭つてしまつた。一寸じつとしてゐるとネイルドブーツの足は凍りさうであつた。

直ぐ左の尾根を杉本と伊藤が登つてゐるが、お互に話が出来る位の距離である。隣の登攀を撮らうとアイモを出したが、サラ／＼と音がしたと思ふと止つてしまつて振つても叩いてもどうにもならない。鈴木は盛んに残念がつたけれども機械は直りさうにもなかつた。行手はまだ仲々長かつた。三人なので思ふ様に進まない。直ぐにザイルは延び切つてしまふのだ。隣の杉本、伊藤も壁にぶつかつて相當に苦心してゐる。種々助言の積りで嗚呼つたがはつきりとは聞えぬらしい。杉本が戻つて伊藤がトップになつた。既に二時間以上も一つ所で頑張つてゐる。人の登つてゐるのを見ると實際はら／＼する。

五米ばかりの氷壁を笠原が越えて上へ出た。其處を越すと急に尾根が緩やかになつて直ぐ前に頂上の亭が見えた。

伊藤等も悪場を乗り越えたらしく尾根の陰になつて見えない。

十八時頂上に着いた。早速避難小屋で火を燃して、パンを食ふ。先日残して置いた一升壺の水も固く凍つてゐた。

二日間の降雪でどの岩にも厚いフェルグラが附いてしまった。數日前とは丸で趣が變つてしまつてゐる。夕陽に照らされた氷はバラ色に輝いて非常に美しい。

二人も間もなくやつて來た。あのフェイスには四時間蔭りかゝり、岩についた氷は落してホールドを出さなければならなかつたと。如何にも満足さうに語つてゐた。

十八時四十五分、五人で降り始めた。富士標高に來ると眞暗になつてしまつた。

一月九日、昨日どうやら第三隊の任務も大體すませたし、第一隊の秀姑巒山組が尾根筋で水が得られない爲に引き返して來たので、第三隊と入替つて新高駐在所に入る事にする。尾關、笠原の二人が此處に残り他は八通關に引上げた。

遅くとも今日あたりは歸つて來る筈の吉阪、桑島、山崎等を心待ちにしてゐると夕方になつて大元氣で歸つて來た。八通關には今日下つた關根達が待つてゐるので一寸休んで下つて行つた。

一月十日、今迄二回北山行きを試みて何れも灌木の爲に行けなかつたので、笠原は今日こそ行つて見せると力んでゐる。前川、海老原と蕃人二人を連れて駐在所の直ぐ裏から尾根に出てブツシュは全部切拂つて行くと言つてゐた。

宮川、大井の二人と尾關、宮崎、東濱の三人は澤を直接つめてPⅠの尾根の眞下へ出た。

宮川、大井はPⅠ、PⅡの尾根を登るのである。尾關等はPⅠ、PⅡ間のルンゼを登つて南山往復をする豫定であつたが、ルンゼはフェルグラの溶け落ちた堆積と、その落下で思つたより時間を食ひ、主山の稜線へ出た時は既に十六時を過ぎてゐた。

十七時富士標高から主山を仰ぐと丁度大井等のPⅡ稜を登つてゐるのが目に入った。PⅡのピークの北面は殆どオーヴァーハングかとも思はれる様に見える。他人の登つてゐるのを安全な場所から眺める程心配な事はない。早く右のルンゼへ出れば良いと思つてゐる内に一人出た。やれ／＼と思つてゐるともう一人がなか／＼出て來ない。トップが主山と東山の稜線へ出た時は思はず拍手をしてしまった。大井、宮川は尾根の下の取附が十時十五分前後七時間餘を費して主山頂上に十七時二十分に達したのであつた。笠原達は北山に目的を達して歸つて來た。頂上から路を下つて來ると、今迄それから上へは出られなかつた亭に出たさうで、前二回どうして行かれなかつたのだらうと不思議さうな顔をしてゐた。

一月十一日、もう引上げの時期が來てしまつた。約十日間見馴れた新高山の岩場は、今では穂高のその様な心安さを感じる様になつた。國吉さんに此の一週間の御禮を述べた。本當に迷惑をおかけしてしまつた。此の愉快な思ひ出ある生活を送る事が出來たのも全く國吉さんのお蔭であつた。

約十日振りで全員八通關に集つた。それからそれへと話は盡きない。誰も自分の行つた時が最も面白かつた様な話し振りであつた。

次に第二隊の南玉山隊と第一隊の秀姑巒山隊の記録として桑島と宮川の報告を載せよう。

## 五、第一隊 秀姑巒山からマボラス山

三十日時新高駐在所泊りの第三隊の見送りを受けて八通關を出發した。

第一隊は大井、宮川、宮崎、東濱、前川、海老原にブヌン族のアンバスとバイソの八名。天幕、コンロ、米を

蕃人に持たせ寝袋、食料等は隊員が持った。

今日の行程の南駐在所迄は八通關道路三里半の至つて樂なコースである。八通關を後に暫く登ると景觀は一變して松の疎林となり山の中腹につけられた道は、三千米の高所とは思はれないハイキング・コースだ。八通關に最後のヤツホーを叫びかけて尾根を廻れば、右に深い老濃溪の谷を見下して風景は一段と美しくなる。

バナイコ駐在所附近は臺灣唯一の松茸の産地と謂はれる丈に松が多く、梢を吹く風はなんだか内地の初夏を偲ばせるものがあつた。

是から秀姑巒駐在所までは殆ど平らで、海拔二九二〇米附近を上下幾曲折して進む。

秀姑巒駐在所は溪を深く入つた幽邃な瀧の上にあつて目指す秀姑巒山の一峰がよく見える。茶菓の饗應に與り、左程空腹を感じなかつたが晝食をとつて十三時出發。

此所から番稱オペクオと云ふ尾根上までは距離も長く、可成りな登りであつたが思つたよりは樂であつた。四阿があり暫く休憩する。

新高連山、關山、雲峯等の眺めは實に雄大で内地では見られないものであつた。對岸の尾根を大鹿を射止めた蕃人達が歡喜の歌を歌ひ乍ら下つてゐるのが見えた。その單純なヨーデルは谷間に木霊して一層の感興を添へてくれた。僅か下れば躑躅山駐在所で此所もバナイコと同じく現在は駐在所は居らず無人の家となつて崖上に淋しく建つてゐた。

谷を深く一廻りして天上の瀧をなだらかな上りを尾根の端へ出れば、躑躅山、南駐在所の境界標が立つてゐて、今日の宿泊地南駐在所も招呼の中にある。



此所まで来ると風景も亦ぐつと變つて、これから大水窟の分水嶺迄はなだらかな草原で、處々に大きな露出岩があつて高原的な氣分に満ちてゐる。

距離も短いとなると腰を落ちつけて悠々とあたりの景色に見とれる。肩幅廣く張つた新高連山は印象的な眺めだつた。

十六時二十分、南駐在所着

大水窟の大斜面の中腹に作られた此の駐在所は實に氣分の好い處だつた。標高三三〇〇米最高の駐在所で二棟のささやかな建物には駐在官寺澤巡查と警手一人がわびしく住んで警備の任に着いてゐる。

汗に濡れたシャツを石垣に乾かして、餘り氣持良さに家に入るのも忘れて日の陰るまで日向ぼつこをしてゐた。有難い事はこの高所でも風呂に入れたことだ。お蔭で汗も流してさつぱりとして家に入る。

夕食には心づくしの野菜のうま煮につられて思はず椀を重ねる。

夜になると流石に高所、炭を山のように積んだ爐の圍りに集つて談笑。部屋の中の快よい暖さに反して、外は月の青白い光が固く凍つた前庭を照して、冬の姿に歸つてゐる。

四日、六時四十分起床、外は未だ暗かつた。

暖い味噌汁に舌鼓を打つて元氣一杯、寺澤巡查に送られて出發したのはかれこれ九時に近かつた。

少し東のビヤクシンのある所から直ちに草の急斜面にとりつき、眞直ぐに本尾根に登る。ひどく息切れがして汗がにじんで来た。忽ちにして駐在所が遙か下になつてしまつた。一時間にして尾根に出る。東側は雲海に閉ざされて奇峯シンカン山を望み得なかつたが、行く手には秀姑巒山、マボラス山が遙か遠くに聳えて今日の行程の

長さを思はせる。霧が時々まいて風が寒い。

暫く尾根通しに登つて頂上の下の大きなガリーを右に横断する。瓦煎餅の様な岩屑で歩くとずる／＼崩れるが殆ど危険は無く再び尾根に上る。霧は何時か消えて夏の様強い陽光がチリ／＼照りつけて、重いルックサククを負つた脊に汗が流れてくる。殆ど草の大斜面で、處々に灌木が地に這つてゐるのみである。

大水窟から三つ目の瘤の上で晝食、乾パンと紅茶。アンバス等は薯をかじつて簡単な食事を終る、十三時十分發。下り着けば秀姑巒山との大鞍部で廣い草地に轉がつてゐるのは、燒獵の後のビヤクシンの倒木で、ふつ／＼とした草地は何處も良い天幕地になる。水は此所から西へ十町許り下つた谷間に湧いてゐるといふ。

正面に秀姑巒山の第一峯が標高差三〇〇〇米の急斜面を岩とビヤクシンの密林に被はれて聳え手も足も出ない様に見える。

やがて踏跡を見つけ、それに導かれるままに東側に絡む、かち／＼な踏跡は岩を乗り越え、木の下をくゞりガリーを渡り、第一峯と第二峯(頂上三八三三米)を巻いて第三峯との鞍部に出る。

此の附近は一般に東側はガリーになつて木が少く、西側は多くビヤクシンと石楠の密林になつてゐる。

木蔭の少い東側の登りは太陽の直射を受けて非常に暑く、隊員は流れる汗を拭つて踏跡を辿つた。時々不明瞭になるが、一度來た事のあるアンバスは何の不安氣もなく先に立つて案内する。鞍部に出て初めて残雪を見つけ今迄暑さと水の不足に苦しめられた一同は、大喜びで雪を煩張つた。此所からは残念ながら新高は見えなかつた。

今度は西側を残雪のついたビヤクシンと石楠の中を絡んで。第三峯を越えて尾根上に出る。尾根は再び草付き

の斜面となつて歩きよくなつた。マボラス山迄は尙深い鞍部へ下つて再び急斜面を登らねばならず、今迄の様子ではマボラスの獵小屋の湧水も果してあるか分らないので、尾根を一段下つて三方小さな丘に圍まれて夏の雨期なら水でも溜つてゐさうな草の平地を見つけて天幕を張る。十七時。

四人用の小型ウインパー天幕を二つに並べて張り、早速倒木を集めて火を起す。水が無いので附近の木蔭に點在する残雪をかき集めて溶かさなければならず、それも土が混じてゐるので一々濾さなければ使へないので鍋一杯の水を得るにも非常に手数がかゝつた。

尾根の上なので眺めは頗るよかつた。正面にはマボラス山が岩膚をあらはに聳え、東郡大山、丹大山は遙か遠く僅かに頂丈を雲海の上に出してゐた。

陽が陰ればさすがに三六〇〇米、寒さが身に泌みるので、コンロに火をつけて天幕内で炊事をする。水の不足と低い氣壓に日頃の腕も振へず妙な飯が出来上つた。それでも空腹には十分美味しく食べられた。

夜、月の好いのに誘はれて外に出る。雲海が月に照らされて莊嚴な景色だつた。焚火を圍んで懐しい山の歌を合唱する。夜半になつて天氣は次第に崩れて、濕つた風が天幕をゆがるし始めた。

五日、天氣は到頭崩れて濃霧はあたりを籠め雨が降り出したので滞在と決する。アンバス、バイソは水を探しに行きたいといふので、前途の偵察を兼ねてマボラスより先の峯まで行く事を命じて十時半出發させる。

することもなく暇に任せて御馳走を作る、時々霧の切れ目には外へ出て二人のコースを双眼鏡で偵察する。

十六時半二人は一一、七七〇尺の峯まで往復して歸つて來たが遂に一滴の水を得ずがっかりして戻つて來た。

早速茶を飲ませ煙草をやつて勞をねぎらふ。水場に湧水が無く残雪が無ければこれ以上行程を延す事は不可能な

ので、明日は我々だけ偵察を兼ねてマボラス往復と定める。夜に入つて風が強くなつた。

六日、今日も雨だ。バイン、アンバンを天幕に残して隊員六名は十時出發、かすかな踏跡を辿つて鞍部まで下る。濃霧の爲全然見透しきかず、正面の尾根は登らずに右へからむ。遂にガリーで踏跡を見失つて、ガリーと藪をよち登つてマボラス山の東肩に出る。十二時二十分。全身びつしよりになつたので倒木を集めて火を起す。風雨の中ながら火付よく、直ぐ焰を上げて燃え始めた。

火をそのまゝにして頂上へ向ふ。雨は何時か雪に變つて吹雪き始めた。十五分程で三八〇六米の頂上に着く。霧の爲何も見えず、唯頂上のケルンを高く積み上げたのみで直ちに引返す。焚火の傍で晝食。

再びガリーを下つて踏跡に出て往路をとつて十五時四十分天幕に戻る。

到頭吹雪になつたので縦走を打ち切り明日下山と決定す。

夜は遅くまで談笑して寝袋にもぐつたのは零時を過ぎてゐた。

蕃人は天幕の寝苦しさに耐えられず、林の中の風のあたらぬ處に火を焚いて毛布にくるまつて雪の上に寝た。

雪の中でも彼等としては却つて焚火で暖く、廣々として寝良いのであらう。

六日、夜來の雪は未だ止まず。僅か乍ら積つてあたりを白くしてゐた。

下山となると蕃人は張切つて朝早くから仕度して、「雪が積ると歩けなくなるよ。」とせきたてる。凍りついた天幕を疊んで出發したのは既に十一時半だつた。今日は暗くなつても八通關まで延す事にする。

蕃人は雪を恐がるので先に立つて道の凍つた所はわざ／＼ピツケルで除いてやらなければならなかつた。

荷は軽くなつたので自づと足も早く、大鞍部に出たのが十三時。雪は雨になつて激しく降り出した。

鞍部から十五分程西へ下つた谷間に、天然のスレートで葺いた蕃人の獵小屋があつて火を焚いて休む。此所には湧水があつてこの附近唯一の水場である。テルモスの暖い紅茶がともうまかつた。

一時間ばかり休んで體を暖め、再び雨の中に出る。小徑は秀姑巒山の第一峯から八通關へ延びた尾根上を下つてゐる。草と岩の起伏の多い尾根を辿れば忽ちに高度を低めて、やがて霧の間に秀姑巒駐在所を望み見る様になつた。

急傾斜の下りの連続に足を痛めて、八通關道路に下りついた時はホツとした。

此の小徑の下り口にも小屋掛があつたので火を焚いて暖をとる、雨具を持たぬ蕃人は全身びつしよりになつてゐるので時々乾かさねばたまらないしかつた。

此處まで下れば後は唯歩けば八通關だ。雨は尙止まず痛む足をひきづる様にして全身ずぶ濡れになつて八通關山莊に歸り着いたのは最早薄暗い十八時だつた。

風呂に入つて暖い飯を食べた時は全く生き返つた様な氣がした。

夜は八通關でも雪になつて眞白に積つた。

七日、快晴、昨夜の雪も忽ち溶けてしまつた今日は休養として、濡れた物を外に出して乾す。午後大井、宮川は新高駐在所へ連絡に往復した。

八日、第一隊と第三隊と交代して我々は新高駐在所へ入つて主山の岩壁に挑戦した。

結局此の縦走は所期の目的は達し得なかつたが、内地人によつて登られた事のないマボラス山へ登つた事に依つて満足しなければならなかつた。

## 六、第二隊 南山、南玉山

一月三日 快晴

前日決定した通り吾々隊員三名及びブヌン一名計四名で南山、南玉山方面へ向つて八通關を出發。

一行の荷は三人用ウインパーテント一張り、同フライ、炊事用具一揃へ、一週間分の食料（主食としては米とパンと半々、それに砂糖餅を少々）、及び各人の個人装備品等、餘り軽いとは云へぬ。

「ぢや元氣良く行つて来いよ。」といふ聲に送られて出發した。一月の三日と云へば内地では所謂嚴寒の候等と寒がつてゐるといふのに、如何に南へ來たと云ひ、三千米に垂んとする高さの處でこの暑さ、荷を脊負つて居るせいもあらうが陽のかん／＼と照りつける中を物の三十分と歩かぬ内に汗びつしよりになつた。新高駐在所で憩。此處から直ぐに道が森林の中に這入るので大分涼しくなつた。道が坂道なので汗をかく味には變りない。森林を抜け出る少し手前に長命水と銘打つた綺麗な清水があつたここで晝食をとつた。木の間から見える主山も大分近くにあり、何だか上から覆ひかぶさつて來さうな感じがする。稜線を良く見てゐると時々キラ／＼と小さなものが光る。氷のかけらが風で飛ばされるのであらう。パンを食ひながら見とれてゐた。歩き出して直きに森林を抜けると、目の前に主山、東山の全貌が餘す處なく見える。少し行くと富士標高と書いた杭が建つて居り、備へ付のベンチでゆつくりと景色を堪能出來る様になつてゐる。主山の右側に出てゐる北山へ續く稜線が大きく落ちてゐて丁度肩の様になつてゐる。富士標高からは大きな斜面に、初めは大きく、上へ行くに従つて段々小さく、ジグザグの道がついておりその終が肩の處に出てゐる。この道を喘ぎながら登る。肩の近くへ來ると急に邊りの強



新高駐在所附近から見た主山(右)及び東山(左)

早大山岳部



PI の尾根の登攀（主山中央稜より）

早大 山岳部



い風を受ける。そして肩へ近附くに従つて益々強くなり、ぼやつとしてゐると全く吹き飛ばされさうだ。これだけなら大して面白くもないのだが、肩から少し向ふ側へ下るか、或は更に頂上の方へ上ると殆ど風の氣もない。後で話を聞けば何時もこんな状態ださうだ。此處まで来れば今日の行程は殆ど終つたも同様で、後は新高駐在所まで下りるばかりだ。荷を置いて日向ぼつこをしながら目の前の景色を楽しんだ。左側には主山から南山へ続く大きな稜線があり、右手には餘りはつきりしてゐない屋根が下の方に眞直に落ち込み途中が見えなくなつて、その先が又見え出して遠く西山までつながつてゐる。左側の斜面に斜に手前に向つて道がついてゐる。これが新高下から主山へ出る舊道で、我々がこれから下りる綺麗な道は新道でこれは極く最近つけられたとの事だ。歩きよいのでどん／＼下つて行くと、舊道と交叉してゐる所へ出た。道標があり駐在所まで八百七十米とあつた。

ここからそろ／＼森林に入り、道は尙下る一方で中々出のある八百七十米だつた。小屋の裏まで来ると森林が切り拂つてあり、目の前がぱつと開けて遠く雲海が見える。下は深い谷の底まで見える。中々此の駐在所は良い所にある。餘り氣分が好いので夕日を脊にしなが、小屋の前のベンチに腰をかけ、丁度來合はせた二人連れの人と長いこと話し込んでゐた。風も大分涼しくなつて來た。小屋の中へは這入つたが氣が付いて見ると、使用人のボタンがゐないので探すと小屋の左側の小さな物置のやうな小屋の中で、一人で焚火をしながら夕食の用意をしてゐた。巡査に頼んで警手の部屋へ泊めて貰ふ様にしてあるので、そつちへ行かぬかと奨めたが、此所の方がよいんだと言つて動かぬので其の儘好きな様にさせて置いた。此の小屋が歸りには我々の實に氣持良い寢室となつたのだから面白い。

十五人程の本島人の團體と一緒になつた。皆今日鹿林山莊から登つて來た人達であつた。

〔行程〕

八通關出發(十時)——新高駐在所(十一時)——長命水(十二時三十分)——新高肩(十四時二十分)——新高下駐在所(十五時三十分)——就寢(二十一時三十分)

一月四日快晴

七時起床。本島人の團體は既に出發してしまつてゐた。外へ出て見れば雲一つない快晴だ。駐在所の人に聞いて見ても、こんな良い天氣が続くのは珍しいと。人夫のゐる小屋へ行つて見る。既に炊事をして

「お早う、夜中に寒くなかつたかい。」

といふと、彼、火を指して

「これがあるから寒くない。」

と言つてゐた。

駐在所の前の棒杭にこんな風に書いてあつた。

「嘉義郡新高下警察官吏駐在所 海拔一萬九百尺 新高駐在所まで 二里二十五町 タータカ駐在所まで 二里二十四町。」

歸りに又此處へ寄る豫定なので食料品の一部を物置に忍ばせておいて出發。新道舊道の交叉點まで前島、成富の二氏と共に行き、此所で別れ我々は舊道を行く。舊道と云つても中々良い道だ。歩いてゐる間は相變らず暑い。四十分程で稜線へ出た。途中振返つて主山を見れば實に大きい。先に別れた二人が大分上の方を歩いてゐるのが小さく見えた。此處から尾根は南山へ向つて続き暫らく先へ行くと、二つに分れてゐて、左側の尾根は丁度稜線

が上から壓潰されて低く平らになつた様な形をした大きな鞍部を過ぎ南山に續いてゐる。南山の下（南山より手前にある峯）を右にまいて南玉山へ走つてゐる稜線へ出た。稜線へ出て見ると、今迄見えなかつた南の方の山が一目で見える。よく晴れてゐるので遠くまで相當はつきり見える。一番良かったのは何と言つても關山だつた。圓錐形をした其の形といひ、紫がかつた茶色いくすぶつた其の色合ひといひ實に綺麗だ。これが眞南に見えるのであつて、目を右に轉じて我々の立つてゐる稜線のすつと先を見れば、南玉山が遙か彼方に見える。附近一帯稜線の南側は緑色の大きな緩かな斜面で、中々氣分の好きさうな所だ。

晝食を終り出發と定め、我々が歩かねばならぬ所を見れば、目の前のごつ／＼とした岩尾根、此處から先は道が全然分らぬし、勿論ケルンも積んではなかつた。殆ど人が來ぬらしい。先づ尾根に沿つて行つて見ようと定め歩き出した。歩き出すと言つても足丈の仕事ではなく、両手も使つてやり始める。

大きな上り下りはない。小さな岩峯を二つ程越して見た。荷が軽ければ樂に行けるのだらうが、一寸脊負つてゐるので思ふ様に出來ぬ。どうやら四つ程越し終つて見て、又先を見れば段々悪くなつて行く様に思へた。で「こんな調子ぢや、尾根を行つたんぢや、時間ばかりかゝつて一寸も捗かどらぬから、少々谷へ下りて見よう。」といふ事にして、南側の急なガリーを下つて見た。これとてガリーが何時迄も續いてゐてはくれず、直きに終つてゐて下は崖になつてゐた。それで又稜線と平行に斜面をからんで支稜の小さいのを越えて行つた。此の所脆い岩と荷物と格闘してゐるといつた形だ。それに岩のあつちこつちに生えてゐる棘の多い枯れたやうな小さい木にも大分惱まされた。少し稜線と平行して歩いては先が詰つて、又仕方なく少し谷へ下り又横へまいて行くといつた調子で段々と谷へ追ひ込まれる。

時間は遠慮なく立つてゆき、既に十六時近くになつてゐた。そろ／＼露營地の心配もしなければいけないので、注意しながら行くと、僅かな流れを見つけた。此所が好いと先づ選定し、流れに沿つて少々下ると、水の量も少し増して来た。次にテントの張れさうな場所を物色した所、ワオロが一寸林の中に入つて行つたかと思ふと直ぐに快適な場所を見つけ出してくれた。少々狭いので四人が／＼りて掘つてテントを張り終つた。ワオロは蕃刀を振りまはして薪木を集めて來、又石を少し拾つて來て、テントの傍に立派な竈を作り火をつけた。こんな事を實に素早くやつてのけるのに吾々感心する。今迄の岩場を歩いてゐる時も一言の不平も云はず行く通り黙つてついて來又吾々が道につまつて探してゐる時等は遠くの方まで見に行つて來たり、一點の非の打ち處のないポーターだつた。夕食後焚火を圍んでワオロから蕃語(ブタン語)を教はつた。彼の日本語はこつちの云ふ事は大體通ずるが、殆んど話す方は出來ぬので聞き出すのに大分苦心する。たまに話が少しこみ入つてくると、手眞似も必要となつて來る。

山へは入る前に、臺北で「臺灣國立公園煥健コース實地踏査隊」の團體が南山から南玉山を通り、更に先へ尾根を下り、下へ出ると云ふ話を聞いてゐたし、又新高下駐在所ではその一行が、つひ四日程前に出掛けたと聞いた。何人位で又人夫等を何う使つてゐたかといふ様な話は聞いて見ても何だか要領を得ぬので、そのまゝにして來たのだが、今日實際に歩いてみて、吾々の通つた場所は十何人も人が通れる様な場所ではない。でも一行は何處かは知らぬが先へ行つた事は事實なのだからその道がある筈であるとまで考へてみたが、これも明日になれば分る事だと明日の問題に残して置いた。

一月五日 薄曇

朝食は米をぬきにし、砂糖餅を二ヶ、油でいためた乾パン、それに味噌汁とで簡単にすませた。十時にテントを出發、一面のガスは昨日はテントから前の木の間に覚えてゐた巒山が全然見えす一寸物足らぬ思ひがした。テントを張つて露營はしてゐるものの、大體の見當だけははつきりと「何處」とは分つてゐない始末であるが、今日は荷が殆ど無いので何處でも歩ける。先づテントより四、五十米上へ行きそれから南玉山の方向に向ひ歩き出し、小さい尾根を二つ程越えたと今迄のごつ／＼した岩と森林の地帯から急に黄色い草原の大きな斜面へ出た。岩は小さく草（新高矢竹といふのださうだ）に隠れてゐる。草原へ出てから稜線を見上げると、上の方には大きな岩が稜線から始まつて大分下まで續いてゐて、この岩場が終つた處から草原の斜面が始まつてゐる。この原を横切つて行くと可成り大きい支稜に突き當つた。これを越して向ふ側を見ると草原の斜面は益々大きくなりつと先まで續いてゐる。又谷の下の方でも續いてゐる。右手に當る稜線を見れば、今越えた支稜の上端が大きな岩峯となり、これからぐんと落ち込み岩ばかりの稜線が此所で終つてゐる。コルから先は稜線からいきなり草原が始まつてゐる。これは南側の斜面で、北側を見ると、之又岩ばかりで垂直に近く、谷へ落込んで木は殆ど無く、がら／＼の脆さうな岩ばかりである。コルから先は稜線も歩く。一五〇米程上り三つ位小さい峯を越えつゝ上り、最後に大きく上ると頂上に高さ一米程の大きなケルンがあつた。これが南玉山（三三・九一米）。此の頃になつてもガスは相當濃く遠くの景色が見えず残念だつた。少憩後次の錢頭雁山に向ふ。附近の様子は相變らずの調子だつた。丁度南玉山と錢頭雁山の中頃より少々先へよつた地點に、蕃人の狩獵をする時に寝泊りする堀立小屋を見附けた。側に行つて見ると中には何もなく唯鹿の頭蓋骨が一つぶら下つてゐた。又焚火の跡があつただけだつた。少し下の方を見ると四ヶ所程極く最近露營したらしい跡があつた。又水場も直ぐ近くにあつた。大人數の

露營には絶好な場所だ。よく調べて見ると確に踏査隊一行の泊つた跡だつた。歸りにはこの邊から道を探りながら歸らうといふ事において、先づ錢頭雁山へ向つた。もう大した上りはなく間もなく頂上に立つた。頂上(二八六二米)には三本足の櫓が立つてゐた。森林三角補點(植産局)と書いてあつた。此所でゆつくりと晝食にした。ガスも大分薄くなり時折時間を見せるので周囲を見渡して見た。

尾根の先は遠く南面山へ續いて、この尾根は高度もすつと低くなり、尾根といふより原つばの様な感じがした。又楠梓仙溪を隔て、鹿林山、石水山等が見えた。山と謂ひ、谷と謂ひ、内地のそれとは大分違つてゐる。

歸り道にはさつきの露營地から先、出来るだけ注意しながら道らしきものを探りながら歸つて來た所、南玉山を過ぎ暫くしてから其らしきものを見出し得た。之を辿つて行つた處初め極く僅か跡がついてゐたに過ぎず、歩いて行く中に段々はつきりして森林に入りはつきり道と分る程度になつた。尙暫く行く中に小さい水の流れてゐる澤にぶつかつた。どうも見た様な所だと思つてよく見れば、テントの六十米程下の處だつた。道は更に先へ續いてゐたが、之は明日通ることにしてテントへ引返す。

一月六日 霧雨

起床八時。出發十時。テントの傍から谷を下り昨日の道の所まで來た。今日は昨日の續きを辿り出した。大して明瞭ではないがはぐれる様な事はない。道は大體同じ高さを行き上り下りは殆ど無いと言つて良い位小さい尾根を二つ程越すと水が可成りあり、傍に露營した跡があつた。狭い場所で精々五人位しか泊れさうにない。我々の泊つてゐる方が遙かに見晴しも良く、氣分が好い。此の邊りから道は少し上り氣味にて、稍々不明瞭となつて來た。處々ケルンを積みながら上る。段々急な上りとなり、泥と柔い岩の混ぢつたガリーを登る。踏むと少々後

へ逆戻りするが、直に止り割に歩き易い、一昨日下つた所とは問題にならぬ位楽な道だ。かれこれ一時間位で稜線に出た雨も細いが大分降つて来た。よく見れば一昨日晝食を食べた場所だつた。要するに此所から稜線と直角に真直下へ下れば道があつたのだ。下り口を示すケルンの二つ三つもあつたら初めて来た者も迷はぬだらうと、ケルンを積んで置いた。此所から尾根通りに南山へ向ふ。主山から来てゐる尾根にぶつつかるまで暫く上る。其處から南山へ続く尾根を行く。雨は少しも止みさうになく、風さへ少しく加はつて来た。眺望は全然きかぬ。小さな峯を三つ程越すと、その向ふに又峯があり劍の様な形をした岩が立つてゐる。之が頂上かと思つて其處まで行くと、その先に又もつと高い峯がある。こんな事を繰り返して稜線を上り下りして先へ行つた。其の中雨は霎に變り、風に吹きつけられて顔に當つて痛い。下半身は既にびしょ濡れ、上に着てゐるヤツケもそろ／＼下まで水が通つて来た。が我々は未だ良い方でワオロは一寸可哀い想だつた。荷物なら幾ら多くてもびくともしないが此の寒さには大分こたへるらしい。濡れた軍手で冷めたさうにしてゐたので毛の手袋を貸してやると、温いといつて喜んで大分元氣が良くなつた。六つ位峯を越して一番最後に大きな峯の上に立つた。その先にはもう峯はなく低くなつてゐた。記念撮影をして直に下りにかかつた。晴れてゐたら南山の東側の岩を偵察しようと思つてゐたのが、この雨で斷念するよりない。頂上より約四十分程で前のコルまで歸つて来た、此處まで歸ると何時しか霧は雨となつてゐた。時間が少し早かつたが、何處へも行けぬのでテントへ歸る事にした。来た通りの道を急いでテントまで歸つた。テントの附近まで来ると雨は殆ど止んでガスだけであつた。歸りついて早速火をおこして濡れた衣類を乾かしにかゝつたが、小屋ならぬテントの事、思ふ様に捗らず四人共火を圍んで二時間位かゝつてやつとどうやら乾かす事が出来た。

一月七日 雲

昨夜雨だつたのが今朝方雲に變つたのだらう。フライの上に白い氷粒が溜つてゐた。朝食後直ちにテントを引拂ひにかゝり出發は十一時。昨日と同じ道を通り同じコルへ出た。此所迄來ると風も大分吹いており、氷片が顔に當つて痛い。木や草や岩や凡ゆる物が薄い氷に包まれてゐて實に綺麗だつた。休んでゐると大分寒いので直ぐに出發した。前の時と同じ所を逆に行くのだが、今度は雪が岩の上に凍り着いて歩き難い。ワオロの前後に付き添つて用心しながら此の場所を通り過ぎた。相變らず雲が風に乗つて吹きつける。原つばの様な鞍部も一面に薄い氷に包まれて夢の様だ。稜線へ出ると風は益々強くじつと立つてゐられぬので全然休まずに舊道の下り口まで行き、此所から少し下り、中央尖山、大霸尖山等標高を書いた道標のある邊りまで來てやつと風から解放された。が其の時は全身びつしよりになつてゐた。舊道を下りるにつれ段々雨に變つた。一寸立ち止つてゐても氣持が悪いので休み無しに殆ど走る様にして小屋へ急いだ。新道との交叉點も過ぎ新高下駐在所へ着いた。豫想通り巡査や他の人が皆タータカの方へ歸つてしまつてゐて小屋には鍵がかかつてゐた。仕方なく人夫の小屋の方へ遣入り直ぐに火をおこしにかゝつたが、薪が濡れてゐるので中々つかぬ。やつと火を起し濡れた衣類を乾かしにかゝる。少し乾き出してから今度は空腹を覺へ出した。そこで砂糖餅を焼いたり乾パンを食べたりした。夕方になつても雨も風も少しも止まぬ。風の吹き通しの良い粗末な小屋だが、今の我々には正に天國だつた。

夕食後火種を持つて警手の部屋へ入り、立てかけてあつた鼻を敷き真中に火鉢を置き、寝袋に潛り込んで直ぐに寝込んだ。

一月八日 快晴



夜半に非常に寒いので眼を覺した。時計を見ると一時半、外に出て見ると雨は何時の間にか雪に變つてゐた。夜明けには大分時間があるが、さうかと言つて目が覺めてしまふともう一向に眠れない。前夜の燃え残りを集めて火を起し、暖まつた後寢袋に潛り込んで明方までどうやら眠れた。夜がすつかり明けてから外へ出て見れば、一面の銀世界に變つてゐた。雪は地面を辛うじて覆ふ程度に積つてゐた。南山や主山から南山へ續く尾根が眞白で實に綺麗だ。空は亦からつと晴れ上り一片の雲もなくなつてしまつた。今日は出来たら鹿林山莊まで行くと云ふ事にして十時半に出發。初め四人揃つて出掛けたのだが、途中棧道が多くこれが濡れてゐるので、ゴム足袋にはつる／＼とるのでワオロ一人知らぬ間に小屋へ歸つてしまつた。駐在所からだら／＼の登りを少し行き西山の一つ手前の山の上へ出て主山の方の景色のよいに驚いた。大きな枯木が一面にあるその間から、新高山群が一望の内に收められる。左の方から北山と、更に北にある山とが丁度ナング・デビーを思はせる。北山から左へ尾根を辿り上つて行くと主山の頂上へ来る。其の堂々たる眞白な姿は周圍敵無しといった様子で嚴然と聳えてゐる。頂上から又暫く尾根傳ひに目を移すと、南山が見える。この邊りまで眞白である。南玉山へ續く尾根は大分雪のつき方が少いが丁度西穂高の山稜に似てゐる。南玉山はこつちから見ると中々物凄い。垂直の岩壁は雪も殆どつかず陽も當つてゐない。こんな眺めは一寸得られるものではない。西山の少し手前まで来て日向ぼつこをしながら更に念入りに見直した。だが大分時間も遅くなり西山頂上へ着いたら十二時三十分になつてしまつた。頂上には西山神社があつた。社の裏に見晴し臺があり眺めの良い所であつた。遠く阿里山も見え又下の方は東埔の邊りまで良く見えた。又南には關山が久し振りで我々の前に姿を現はしてゐた。時間が遅かつたが天氣は良いから大急ぎで鹿林山莊まで飛ばさうといふので急いで西山から下り出す。この下り口は所謂西山の峻なる處

で丸太で電光形に百段程の梯子段が岩壁の上についてゐる。前山は横へまいて先へ急いだ。タータカ鞍部まで途中、無言坂、努力坂、奮闘坂等の名前がついてゐる急な坂がある。この登りも下りとなれば楽に下るので其のつらさが味はへぬ。タータカ鞍部から鹿林山の登りにかゝつた。空腹が大分こたへる。大分登つてから今度はだらだらな道を尙暫く行くと、放し飼ひになつた四頭の牛に出逢つたので、張切つて緩い坂を思せき切つて登ると向ふ側にタータカ駐在所と鹿林山荘があつた。又阿里山の方に行く道も見える。話に聞いた通り中々立派な建物だ。飯を注文し中をあちらこちら見て廻る。良い木が使つてある。流石に阿里山に近い所だけあると思つた。十六時半に此所を出發した。歸りは新道を通りタータカ鞍部まで出、此所からも元きた道は通らず山の下をまいて通つてゐる新道を通つた。良い道だ。餘り丁寧につけてあるのに一寸感心しながら歩いた。夕陽に映えてゐる雲海を時々振り返りながら先を急ぐ。南玉山、錢頭雁山迄見え、その先は雲海に隠れてしまつて見えぬ。前山の下に來ぬ中に十八時を過ぎてしまつた。遠く続く雲海の彼方に沈む夕陽は又格別だつた。陽が沈んでしまつてもまだ少し明かるかつたが、それでも次第に暗くなる一方だつた。西山の下邊りへ來ると道が大分悪くなり、實に大きい一枚岩が二ヶ所程あり、其處へ來ると道はその岩の下まで下りる様についてゐて夜道には大分歩き難かつた。邊りは段々暗くなり、道は殆ど目には見えず大體の感で機械的に歩いた。山腹をまく毎に未だか／＼と思ひながら行くのだが、中々着かぬそれで尙歩き続けると中小屋でワオロが焚いてゐる火が見えた。傍には嘉義郡新高下駐在所と書いてある板のある所へ來て先づやれ／＼と思つた。大聲で呼ぶわとワオロが薪を松明代りにして迎へに出て來た。一人で大分寂しかつたらしい。小屋へ着いたのが二十一時一寸過ぎだつた。明日は八通關へ歸るのだと云ふので残りの食料をあこれと食べ腹をこしらへた。昨日の寝た部屋は火がなく寒かつたので、今日はこの人

夫小屋の火の周圍に寝る事にした。横になつたのは零時近かつた。

一月九日 快晴 風強し。

愈々八通關へ歸る日だ。夜明け前に目が覺めた切りもうどうしても眠れぬので、到頭起きてしまつた。朝食を極く簡単にすませ十時半跡片付けをすませて思ひ出深い新高下駐在所に別れを告げた。主山の肩の下まで一時間半程で來た。相變らず強い風が吹いてゐる。此所に荷を置いて東山へ向ふ。頂上の避難小屋に仲間の寢袋が三枚程あつた。彼等は健在だなど安心した。主山から大體尾根通りに東山の下まで來、ここから東山を稜線から少々西側に外れ壁の様になつてゐる所を上り、上へ出ると後は傾斜が前より少々緩くなつて頂上の直ぐ下で又一寸急になつてゐた。簡単な豈登りの程度で上へ出た。頂上には大きいケルンが三ヶあつた。風の當りも相當強く、積つた雪がすつかりクラストしてゐた。暫く頂上に居てから大體上りと同じ様な所を下つた。下りにはワオロが一人で日向ぼつこをしながら待つてゐた。ここは頂上とは打つて變つた暖かさだ。主山へ歸る途中空腹が過ぎて三人共フラ／＼してゐた。考へて見れば朝乾パンと味噌汁だけで、晝飯に砂糖餅一ヶといふ寂しさだつた。早速肩まで歸り、此所で武装を嚴重にして十分覺悟をして下りにかゝつた。今日は風だけでなく一昨日降つた雪がすつかり氷つてゐて一步一步しつかりとふみしめて行かぬと直ぐツルンといつてしまふ。ワオロは又地下足袋に草鞋をつけた丈なので實に危氣な恰好で下りて來た。今日は中々風が靜かにならず。富士標高まで來てもまだ吹いてゐた。一刻も早く下らうと休まずに先を急ぐ。暫くの間空腹も忘れ新高駐在所へ急いだ。小屋が見える處まで來ると早くも向ふで吾々を見付け二人、三人と小屋から出て來るのが見える。かうなるとこつちも走る様にして小屋の傍まで來た。

「御苦勞さん」

「御歸り」

と一人々々が代るくに出迎へてくれた。此所で簡単に我々の行動を話し八通關へ急いだ。八通關でも皆に出迎へを受け直ぐに夕食にして貰つた。夕食後又風呂に入り久し振りに體の垢を落した。

## 七、歸 路

一月十三日 八通關——トマス

十四日 トマス——トミリ

十五日 トミリ——蕨

十六日 蕨——玉里——花蓮港

十七日 花蓮港——蘇埃——臺北

十八日 臺北、草山溫泉に宿る。

十九日 臺北滞在、總督府、軍司令部等を訪問

廿日 臺北——基隆——大和丸乗船

廿四日 東京着

廿八日 報告會、遠征隊解散す。

一月十二日 早くも二週間過ぎてしまつた。明日は下山しなければならない。

去年の暮、我々と一緒に荷上げをした顔馴染みの蕃人達が東埔から上つて來た。早速天幕器具を持たせて下らせる。今迄一緒に生活した五人のブヌンも久方振りに我が家へ歸るのでとても喜んでゐた。

「ミホミサン」「ミホミサン」

振り返り振り返り下つて行つた。

彼等も相當に重い荷を脊負つてゐる。實際どんな力を持つてゐるのか分らない。

杉本と遠藤は輸送の關係で東埔へ下る。臺北から廻つてタコロで我々と落合ふ豫定だ。

七日の早朝に出した新聞社への報告が未だ届かぬらしい。記事は兎も角としても映畫や寫眞のフィルムが途中で紛失しては重大事なので二、三日遅らせて杉本等が持つて行くことになつた。

荷を送り出してしまつて、すつかり氣樂になり八通關山へ水晶を取りに行つたりなどした。岩を割ると小さな水晶がつく／＼と一面に生えてゐる。小指程のがあつても綺麗なものは中々見つからなかつた。

山々が眞紅に光り出す頃八通關の風呂場の煙が澄み切つた空にゆるやかに上つてゐた。

一月十三日 食事をしてゐる間に夜が明け始めた。各自の大ルックサックは昨日は人夫に下さして、今日からは小型ルックサックの輕裝である。玉里迄の廿四里の道を四日間に歩くのだ。内地の中級山脈の旅行といつた具合であつた。

長い間世話になつた八通關の警察官の方々に別れて八時三十分出發した。

谷を一つ廻る毎に梢を透す日光が次第に強くなつて行く。此邊は臺灣唯一の松茸の發生地ださうで附近は松ばかりであつた。橋の名も松茸橋、初茸橋とある。坦々とした路が何處迄も續いて行く。

行手の道が直ぐ對岸に見えてゐるが谷の鼻迄詰めなければならぬから大變だ。目の前の道迄二里とか三里とかいふのだから全く驚いてしまつた。

バイナコ駐在所——秀姑巒山駐在所——躑躅山駐在所、此所から見た新高山も亦素晴らしいものだ。南山から東山、主山、北山迄の尾根が長く續いてゐる。主山北壁の巖には雪がついてゐる。

十四時四十分州境の亭に着いた。これから愈々花蓮港廳に入るのだ。谷を廻れば新高山ともお別れになる。三千米の高さであるのに一面に緩やかなカヤトの丘が續いてゐた。

臺中州側の明るさに比べて花蓮港側の谷は一面の雲海に閉されてゐる。ミヤサン駐在所は雲海に洗はれてゐる様に其の縁にあつた。

次第に雲海に近づいて行く。

雲の中は今迄の乾燥が急に變つて水蒸氣の過飽である。サルオガセから水滴が垂れてゐた。

此の附近の駐在所は急な斜面を開いて建てられてゐる。雪が降らず崩雪の危険が全然ない爲であらう。

十七時三十分トマス駐在所着。駐在所の門を入ると霧の中から梅の香がぶんと鼻を打つた。

一月十四日 目の前のシンカン山が薄紫色に、空は無氣味な程美しく夜は明けた。それも間もなく霧の爲に閉されてしまつた。

九時トマス發。相變らず路は谷を蛇行して進む。草木にかぶされた二軒の蕃社の廢屋が谷深く見える。戦死、殉死、警察官の遭難地は木碑が建てられて、水や花が供へられてあつた。

蕃地名物。鐵線橋に初めて來た。

ターフン橋、幅七〇米、深五四米

「五人迄、二十疋以上の荷を持つて渡るべからず。橋上を走るべからず。」と板がついてゐた。

エヒラを過ぎて少憩。谷は深い。六杆來ても今朝出たトマズは目の前に見えた。

ターフン駐在所でお茶を戴いて晝食をする。此邊りは雲の下になつて陽はさゝないが乾燥してゐた。吉阪、宮川等の建築屋の卯は谷の十数町先にある蕃橋と蕃社の跡を見物に出掛けた。

十六時五十分トミリ駐在所に着いた。此處は名の通り玉里から十三里（トミリ）の地點だ。丁度雲海の最下端になつてゐる。亭があり泉水があり立派な庭が出来てゐた。

一月十五日 谷一つ隔て、十里<sup>ト</sup>駐在所が見える。あそこで晝飯でせうと駐在所の方が言はれた。

十五時三十分蕨着、名の如く四、五日頃になると此邊り一帯に蕨が芽生えるさうだ。

眞紅なテウチン櫻と梅の木と紅葉したモミヂが三本並んで咲いてゐる。バナナの木もある。やがて暮れて行く冬の宵にコホロギが鳴き、螢が飛ぶ。今何月なのか丸で分らなくなつてしまつた

一月十六日 八時半蕨出發。雨が降り出した。

黄麻、佳心の駐在所を過ぎ、コンクリートの立派な山風橋を渡ると間もなく山風駐在所であつた。

握り飯の固くなつたのを噛る。雨の降つたり止んだりする中を卓鹿に十四時五分着いた。是から自動車でも行けば玉里に出られるのだつた。

## 八、岩場と積雪及び天候

今迄海外の山の寫真でのみ見てゐた水成岩の横に層の波打つてゐる岩を見たのは初めてであつた。此の水成岩に依る岩質は新高山の岩場を特徴づける大きなものの一つであらう。次には穂高や剣よりも山容の大きい爲岩場も稍々其よりも大きくなる點であらう。高差にして四〇〇米近くの尾根や壁は主山から東山まで、も相當にある。

我々が東京での地圖や寫真での計畫では主山、東山の北面、主山を中心に西面、南面、それから南山南玉方面の内二、三個所に觸れて見る豫想であつた。然し元日に登頂した時の觀察で、東山から主山への岩は豫想以上に立派であつたが、南面は總て草と樹木とに覆はれた緩い斜面であつた。そして西面は岩屑と砂との崖でとても登攀の對象となり得ない状態であつた。然し南山の北面は殆ど垂直とも見えるクローアルとバットレスの連続の素晴らしい岩壁を見せてゐたのだが、此の偵察に行つた吉阪、桑島、山崎等は吹雪に阻まれて十分の偵察も出来ず又タツチして見る間も無く、次の機會に譲らねばならなかつた。主山から東山までは五本の尾根と三本のルンゼを登降したので此の方面を主として記述して見る。

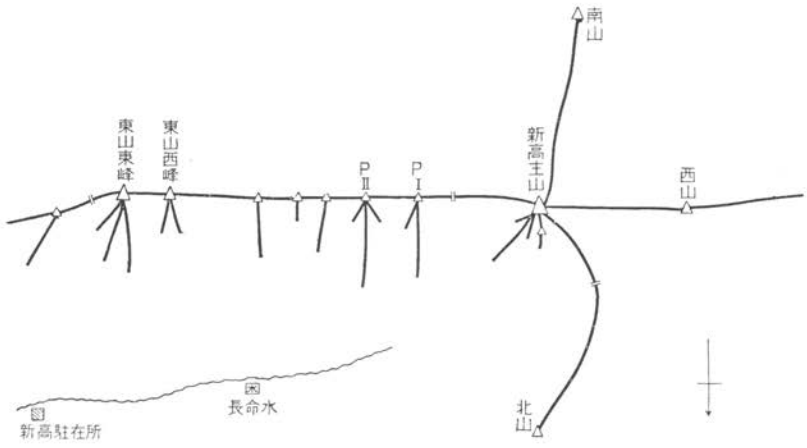
主山（三九五〇米）から東山（三八八四米）まで、距離は千二百米位ある。其の間に登攀の對象となり得る尾根が主山から二本、主山から東山より我々がPⅠ、PⅡと稱した小ピークから夫々一本づゝある。PⅡと東山との間の四個程の小ピークから十個近く尾根と云ふよりはバットレスに近いものが出てゐて、東山よりの下部は完全な岩壁となつて數本のクラックが走り、更に下部は急斜面のケレルを形成してゐる状態であつた。これらの岩の岩質は全部灰色の黒味かゝつた粘板岩で、屋根を葺くスレートと同じものの様に見えた。その他幾分赤味が

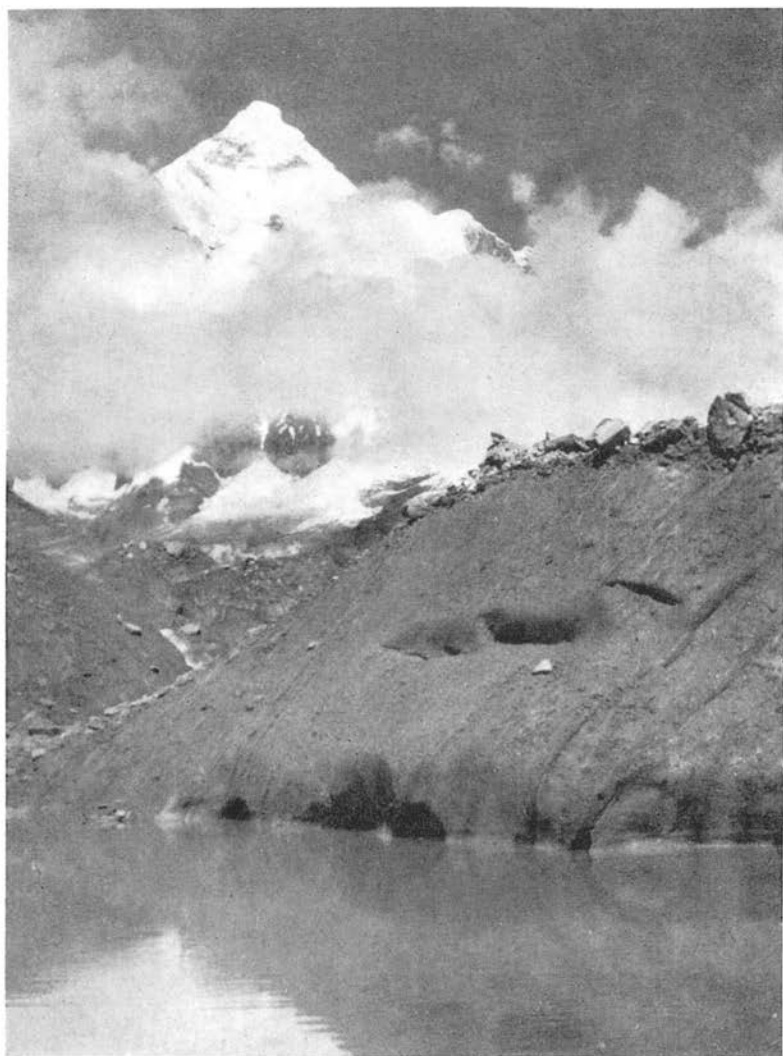


かつた一枚々々崩れてゆく様な非常に脆い岩にも處々出遭つた。これらの岩は見た所は實に堂々としてをり、特に主山の二つの尾根と、東山はさうであつたが、いざ岩に取付いて見ると豫想したより脆く、これらの尾根はどれでも平均四十五度から五十度或は六十度といつた傾斜であつた。

新高山の岩場の缺點は、これらの岩の脆い事であらう。それであるから大きな岩壁に行き當つても、ハーケンを何本も打つて、登り切るといつた事は餘り期待出来ない。現に今度の登攀でも、PⅠと東山の尾根に於てカンテ状の所を越さうと打ち込んだ時に、想像もつかぬ大きな岩が動き出した様な事があつた。そして高差は東山の尾根が三八〇米から四〇〇米位。主山の方はすつと短くなつて二八〇米三〇〇米位と思はれた。PⅠ、PⅡの尾根は高さは主山及び東山よりも低い方が下の方迄伸びてゐる爲に矢張り三〇〇米はあらうかと思はれた。しかし總體としては非常な危険と困難を要求する程の岩場ではないが東山よりの岩壁はかなりの困難があらうと思はれる。積雪と天候についてであるが我々が約十日間新高駐在所に滞在中降雨（上方は降雪）に遭つたのは二日だけであつた。もつとも駐在所の方は今年的好天氣の續くことは珍らしいと言はれたが、北アルプスの冬期とは比較にならぬ好天氣であるのは確かである。年によつては駐在所の軒位に迄雪の積る事があるさうであるが、一度陽が當れば二、三日で消失するさうである。而も此の駐在所は海拔三〇九一米の高さである。萬一の場合を考慮して雪中幕營の用意をして行つたのであつたが全然不用であつた。

然し三千米以上の北面殊に山頂附近は殘雪がクラスト、フェルグラの状態となつて相當長期間残つてゐた。クラストした雪は風化した岩を固定して却つてガリー歩き等を安全にしてゐたが、フェルグラは厚く堅くてホールドを無くし登攀に困難を増す状態であつた。氣温は暖く手袋は毛糸のを一つでよく全然凍傷の心配は無かつた。





ベース・キャンプ附近  
正面はナンダ・デヴィー

立大山岳部



立大岳部

第一キャンプ

# ナンダコート日記補遺

立教大學山岳部

## 緒言

### 一、登頂成功の原因

#### A 山岳の選定

#### B 調査の完全

#### C 人の和

#### D 登山の時期及季節に就て

### 二、ヒマラヤの水雪

### 三、高所に於ける人體への影響

## 緒言

我々は所謂科學者ではない。全員經濟學科か商學科を出たものばかりである。それ故に氣象、風速、溫度測定或は醫學の様な科學的な知識は非常に乏しい我々

の報告中に素人の眼から見た科學に關する事柄があつたとしたらそれに付いて、科學者の助言なり、忠告なりを待つ次第である。

### 一、登頂成功の原因

#### A 山岳の選定

ヒマラヤは實に老大大だ。その中から登るべき山を、探し出すことは最も困難なことである。我々日本人が入國出来る範圍で手近かな山は、さう多くはない。この殆んど制限されてしまつた區域内から、自分達ヒマラヤに未経験な者が登り得られさうな、それでゐて手應へのある相當な高度をもつ山を選ぶのであるから大變無理な註文である。

しかし一般に日本人は、登り得る可能性のある山に向つて挑戦するのではないと相手にしてくれない様な性質があるから、始めから大きなものを選ぶことは狂人扱ひにされこそすれ、決して我々の後楯とはなつてくれない。

我々はそこで、高度七〇〇〇米位の、登り得る可能性のある山を探した。しかし、廣いヒマラヤ山系の中にこの程度の山は、さう残つてゐないし、又残つてゐても既に登頂されてゐるのが多い状態であつた。

我々の入國出来る山系に就いて述べよう。シツキムヒマラヤ。ガルワル、クマオウンヒマラヤ。カラコラムヒマラヤ。大別してこの三地方に限定されてしまふ。

テイベツト、ネパールは未だに鎖國状態であり、神祕の扉は開かれず未知の秘境である。この地方に連なるヒマラヤには全く入る事は出来ない。

前述の三地方とて、さう容易に入國の許可は下るとは思へなかつた。

我々の先輩が何年もかゝつて調べあげた結果、最も

入國許可が簡單でありさうでゐて、山中に入るのに比較的平地旅行が短かく、山も手頃なのがあるらしいと分つたのはガルワル、クマオウンの兩地方であつた。

シツキムに於ては手頃の山は既に多くの歐人の足下になつて居るが、未だ登頂可能の山も多くある。しかしこの地方の盟主カンチエンジュンガのグループは、あまりにも俊鋭で我々の力量では遙に及ばない程である。

中には高度がさして高くなるとも、その鋭い山頂、山稜が、歐洲登山家の怖れとなつてゐる山もあつた。

カラコラムは、印度平原から山麓に入るのに最も遠い。印度奥地の旅行に馴れない我々が、果して、大勢のクリーを指揮して、この地方を通過出来得るだらうか？ 又出来るにしても、一學校單位の極く僅少な費用の遠征では、そのクリー使傭費に關する一切の費用が多額となり、とても旅行の完たきを期し難い。

この地方は、歐洲人も多くは入つて居らず、未知に

近い山が多い。バルトロ氷河を挟んだ山塊には多くの有名、無名の美しい、錐型の峯々が未だに人類の攻撃から除かれて屹立してゐる。K<sup>2</sup>を盟主とした、ヒドウィンピーク、ガツシヤーブルムを初め其他の高峯はあまりにも、素晴らし過ぎる。少し離れてカシミールの奥に孤立したナンガパルバートにしても、攻撃する對象としては大それたものと考へた。では何故にガルワール、クマオウンの兩山系を特に選んだか？

前にも述べた様に、この地方は英領印度である爲に入國の可能性が非常に多い。英本國、英領印度政廳だけにうまく了解して貰へば、あまり難かしい問題は起らぬと考へたからである。

次に、印度平原の乗物——汽車や自動車——から離れてからあまり遠くない距離にヒマラヤがあり、その山の懷までの旅行日程が短いことである。これは費用の少ない我々の旅行には最も適したところと考へた。

此の前提のもとに、我々はこの地方を詳しく調査した。過去（遠征前）の漠然とした記録漁りでなく、目

的をこの地方に定めてからは文字通り寢食も忘れる程であつた。日本山岳會の圖書室で、誰も居ない晝間を選んで何人もが手分けをして、アルパイン・ジャーナル、ヒマラヤン・ジャーナル、デイオグラフキカル・ジャーナル等の定期刊行物や、ヒマラヤの單行本等を漁り讀んだ。語學のあまり得手でない我々には一番苦手の仕事であつた。

それでも英和辭書と、首ツ引きでコツ／＼と勉強した。自分達のヒマラヤの知識は知らず／＼の中に豊富になつて行つた。或る時山縣だつたと思ふが——古いデオグラフキカルジャーナルの中から、ロングスタツフ氏のナンダゴートの紀行を發見した。このことは我々にとつては大きな力となり、希望となり、果ては目的實現へと導く大きな原因となつたのである。

誰も居ない靜かな午後の山岳會の圖書室に我々の友人——ハワイ歸りの第二世——を連れて來て、山岳會設付のタイプ・ライターを借りて、トン／＼とロングスタフ氏の記事を寫し取つた。

彼は英文を読み乍らキイを打つてゐたが大切な山の處へ來ると、「おい、これは危いとこだよ、止した方がいゝよ」と云ひ出した。そばに居た我々は微笑して苦勞し甲斐があるぞと喜んだこともあつた。

ナンダデヴィを盟主とした二六〇〇〇—二二〇〇〇呎の連峯中には未だ人跡未踏の處女峯も多くあつた。之の地方は、歐洲登山家の最初に最も多く入つた地方であつて、其の後急にヒマラヤ遠征の規模に變化が起り、大遠征隊組織のシステムとなりエヴェレスト、カシエンジュンガ、ナンガパルバート等の最高級の山に目を向けられた爲、しばらく念頭から置き去りにされた形となつた爲に未登頂の峯が残されてゐたのである。

一九三四年シプトン一行のナンダデヴィ遠征により登頂不可能視された其の山もその魁偉な山容を人類の前にさらけ出され。登頂可能なりと云はれるまでに至つた。そして再びガルワール、クマオウンの山はヒマラヤの人気者となつて來た。

我々は最初にナンダデヴィをと目指したのであつたが調べて行くにつれ、山は我々の經驗の範圍外のものであることを知るのみで確たる自信は得られなかつた。

ロングスタッフ氏は一九〇五年ナンダデヴィ登頂を計畫しミラムより入つたが地圖上の間違ひから、登頂出來ずローンの谷に入り、志を變へてナンダゴートへと突進した。彼はナンダゴート氷河の左岸にベースキャンプを設け、ナンダゴートの北稜の末端一六八〇〇呎に達し、粗末なテントを張り、そこから二二五三〇呎の山頂へ一氣に登らうと企てた。そして二萬呎以上に達し、山頂を指呼の間に望みながら雪崩を踏み起すと云ふ尾根の雪質に災され、又、登頂には既に時間が足らぬと云ふ條件に祟られ、涙をのんで引き下つたのだつた。

然し乍ら彼の記事により登頂可能なりと云ふことは良く分つた。高度と云ひ、困難さと云ひ、我々の理想に、びつたりと合つた山ではないかと考へた。否それ



よりも登頂の可能性が殆んど確實なりと云ふ點が最も強く我々を喜ばせた。

日本に於ては、未だヒマラヤ遠征と云ふものが、社會的に廣く認められては居らず、或る一部の人達のみが後楯となつてくれるだけで、一般人からはあまり問題視されて居なかつた。而しその餘り興味を有しない一般人も登頂可能と云ふ事にでもなれば或る程度の期待を持つてくれる。このことはジャーナリズムに片寄つた考へ方の様ではあるが、ヒマラヤ遠征には、費用調達の上から或る程度までは容認されても良いことではあるまいか。

勿論、登頂可能と云ふことは、我々にとつても、勵みとなり、力となり、攻撃精神を旺盛にする原動力ともなることである。

二二三〇呎（六八六〇米）の高度の山での登攀が我々の力の範囲では充分以上のものであるかも知れない。而しそれ以上の山へは、資力と、經驗が足らないし、一大學山岳部の計畫であるから、大きな山を選

んで多額の金を使用することは許されない事だ。

この手頃な、何もかも理想的な山を選んだことが成功の最も大きな鍵であつたと云へよう。

#### B 調査の完全

調査と一口に云ふと前述のことも含まれるのであるが、再び其の必要を述べてみる。勿論山そのもの、調査の完全は期せねばならぬ。そしてこれは、本に出てゐるものを調べるより外に道はない。その本にしても、英人の本と、獨逸人の本には相違があつて、多額の費用を惜まない大名旅行式の遠征と、諸掛りを極く切りつめた旅には、根本的な精神に於てさへ距りがある。我々の場合は勿論後者をならつてこの度の旅行の費用を調査した。

食糧費、器具費、整備費、旅費、人夫使傭費等は最初から一定額に定めてかゝつた。而し我々の作つた之の豫算ではとても印度旅行は出来まい。其の二倍、或は三倍の金を持つて行かぬばならぬと教へてくれた人もあつた。勿論それだけ持つて行けば、豪奢な旅行は

出来るに違ひない。

しかしドイツ人の切りつめた旅行の仕方を調べたり、必要以外のものは一切認めぬと云ふ方針から割出した。我々の豫算は後から考へてあまり事實から離れたものではなかつた。

印度の旅行にうるさいボクシス(チツブ)位のものが我々の念頭になかつた位のものであつた。

調査の完全と云ふことに就いて深く考へさせられたことは、我々の知識——本よりの——が實際に於て、あまりかけ離れては居なかつたことである。

アルモラからマルトリの寒村に到る道程、ローンの谷、そして、その奥に見ゆるナンダデヴィ東峯のバンド、ロングスタッフ氏の登つたナンダゴートの尾根、等々、皆、夢に出て來た山の姿であつた。

それは、出發前東京日日新聞に掲載された我々の山の知識と、山中からの竹節氏の記事を對照して讀んで貰へば良く分ることである。この邊に來ると、何が見えますとか、森林は、つきる様になるとか、この地方

の山の様子が豫め本當に我々の頭の中に入つてゐただ。

出發前我々は、アルモラからマルトリまでの奥地旅行を心配してゐたが、この村々の知識が充分であつた爲に、さして苦勞もなくすんだ。

内地の山を歩くのと同じ氣樂な氣持で旅を續けて行けたのも、この調査のお蔭が多分にあつたと考へてゐる。

山の懷に深く入り込むと、氷雪の峯が重なり合ひ、何れが何山であるかは一寸判斷しかねる場合が多い。

このときその地方の知識を良く呑み込んで置かないと全く分らなくなる。分つてゐても、判斷に苦しむ場合が多い。その點、一度も來たこともないナンダゴートであつたが既に我々の山であつた。

### C 人の和

内地の山を旅する時でも、その同行者が氣の合はぬ者であつたならば、その旅行は、失敗するか、さもなれば成功しても後口の悪い旅となつて、楽しい想ひ出

とはならない。性格の違つた者であつても、或點に於て相互に理解し合ひ、許し合へると云ふ間柄は共に旅行が出来る資格の一つである。

旅慣れてゐることと世馴れてゐることが必要だ、角のとれた人間であることだ。時には他人の云ふことも我慢して聽いてやらねばならぬ。

我々立教大學山岳部は過去數年來、ヒマラヤの夢に魔されてゐた。この夢に魔され通した先輩が卒業し、實社會に跳び込んでしまふと、次の人が、それを受け續いで更に一步一步と、遠征實現の道を登つて來た。

この連がり、鎖の一つ／＼の輪となつて、年齢を超越して、若い者と、先輩とを結んでいつた。それはヒマラヤと云ふ題目を共に唱へる人達であつたからだ。

辻先生のお宅で、英語、ドイツ語のヒマラヤの本を譯して戴いて、それを部員がノートに取つたり、或は質問したりして研究會は度重なつて行つた。

先生の室であつた心理學教室で開かれる研究發表會、こんな時には何時も會は夜中十二時頃までも長び

いて、心をインドの空に走らせた。斯う云ふ様に我々山岳部のもの達は一つの固い團體に成長していつたのだ。

山も決まり、調査も殆んど一段落ついた後は、殘る問題は、資金と隊員選定のみになつた。資金は全員が努力して何とか集めること。隊員は部長先生の選定に一任すること。部員は唯馬の様な力と牛の様な忍耐力で、資金を集め、持つて行くべき道具、食糧を、何時でも買へる様に整理することだけとなつた。昭和十一年暮、大毎、東日の援助が決まる。皆、我々の熱の賜物だつた。我々の力よりも青年の熱を買つてくれたのだ。

誰が行くのか分らぬのに全員自分が行くのだと考へて、何事も捨て、準備に忙がしい日を送つた。この目まぐるしい出發の準備は隊員だけの力では何年もかゝらねば出來ない。

幸、我々には、個人と云ふものを没却した、幾人も

その闘士の中には不幸にしてインドの土を踏む機会を失つた者もあり、その過激な労働と、頭をいためる氣づかいの爲に病を得て、不歸の人となつた者もあつた。

やがて隊員が決定した。而し選に洩れた人達も、我々の爲に以前と何等變りなく働らいてくれた。

準備時代の人の和は大切である。だが其以上に大切なのは現地にあつての隊員の和である。

隊員は、隊長が一番年長で我が部の大先輩であつた。後の隊員は各々一年づゝの差で卒業した者であつた。その爲に親しみの中にも自ら、長幼の順がはつきりしてゐて、この事はもの事の解決に非常に役立つた。その他の理由として、お互が違つた性格を持つてゐたこともある。その異つた性格も各自が自覺し、隊員同志もお互に良く知り合つてゐた。これは準備時代からの山友達であり、一つのザイルに結ばれた同志であるからだ。

これは同じ性格の者同志が結ばれたよりも便利であ

つた。全部が陽氣な呑氣者でも仕事は出来ないし。又全部がしかめ面しか出来ない様でも、長い旅には困りものであらう。

この結ばれた遠因は過去の山岳部の生活に於てあつたものかも知れない。それよりも自分達が小さい部の中から選ばれた者であり、互に自我を滅して、山岳に突進せねばならぬと云ふ強い責任感が然らしめたものとも考へる。

我々の築いて來た團結體の中に飛び込んで來た、東日の竹節氏と我々は、しつくりと結び付くことが出來た。これは氏が、山生活に於て、我々と數シーズンを一緒に過して來たことにもよる。竹節氏とは早月尾根の冬の登攀以來山友達となつた。鹿島鍾の天狗尾根の時にも一緒にテントに寝た。だから全くの未知の人ではなかつたのだ。

山を攻撃し始めてからは、隊員の團結こそ如何なる技術よりも必要だ。

長い間の單調な山麓旅行、それに續いて、石油コン

口を友とした、雪と氷の中の生活。目的通り、豫定通り、仕事が運ばぬ時のいら／＼した氣持。こんな時こそ、隊員の強い自制心が必要になつて来る。

些少な事でも怒りぼくなり、氣に障る様になるのも無理ではない。旅に於ては楽しいことばかりが続くとは限らない。之の時に自我を殺して、目的の爲に忍ばねばならぬ。

自我を殺すのは必ずしも消極的とは云へない。勿論、自分の主張を引き込めることを意味するものではないがそれが入れられなくなつた場合でも隊の爲め目的の爲め隊の動きの中に入りこんで總てに協力するのは云ふ迄もない。自分一人の旅ではないからだ。隊が一つの人間となつて動かねばならぬからだ。

我々には、このことが無意識的に行はれた。

これは、内地の試練時代から行はれた氣風が、そのまま活用されたと云へる。

色々のヒマラヤ遠征の記録を見て、美しくなる程の隊員相互の友情に感激した事もあつた。隊員は何時も

楽しい和氣の中に登攀を続ける様にすべきである。このことが出来なければ、登攀の完成は望み難い。

#### D 登山の時期及季節に就いて

最も大きな成功の原因は、登山期日が長く見積もられてゐたことだ。我々はベースキャンプを建て、からの日數を四十日間見積つた。

萬事都合良く運べば、二週間もあれば登れる山であつた。しかしヒマラヤに未経験と云ふハンデイキヤツプは、四十日間の餘裕を見積る様にさせたのだ。然しこのことが無かつたならば我々は山の玄關に立つて、呼鈴も押さずに引き返したであらう。

ヒマラヤの老練家にしてみればこの長い間の登山期日は、必要でないかも知れない。それは、その期間中の食糧燃料に影響して來て莫大なものとなり、甚だ無駄な費用と勞力とが費されるからである。

馴れて居ない者にとつては、出来るだけ餘裕のある日數とそれに付隨した食糧、燃料等は必要である。

四十日間の登山期日があつて初めて、そしてその爲の豊富な食糧があつたからこそ、九月二十九日に一度追返へされ再び立ち直り、冬も間近かなヒマラヤの一角に立つことが出来たのだ。

この最後の渾身の力を盡して登頂した日が四十日目位に相当した。ヒマラヤの一年生にはその位の餘裕のある日数が望ましい。

季節に於いて一言述べてみると、これは實に難かしい問題で、若輩の斷言すべきことではないと思ふが、考へたまゝを述べよう。

我々は、モンsoon後を選んだ。これは雪崩の危険が幾分無くなると考へたからである。實際に就て云へば、この地方の天候はモンsoon中でも、登攀不可とは云へないらしい。と云ふのは、之のガルワール、クマウン兩地方の山——カメット、ナンダデヴィ、トリズル——等が登られたのはモンsoon中であるからだ。最も此等の山へ登つた人達はヒマラヤの老練家で、山の性質を良く理解した人達であるから、雪崩の危

険、天候等は或は豫測し得られたからかも知れない。

モンsoon前に就いて述べると、嚴冬に氷り付いた多量の雪は、モンsoon前の暖氣の爲に大きな雪崩を起す。その爲登路開拓に、一方ならぬ苦心をさせられる。しかしこの季節は氣温が上昇し、高處に於ても、その高溫度の爲に比較的樂に行動出来ると云ふ有利な條件がある。しかし何時モンsoonが襲來し來り、建設したテントを、叩きつぶし、埋め去り、高處に雪中野營してゐる登山者を吹き飛ばすかも知れない。モンsoon前の登攀の豫定が後れると、丁度高處に野營し得る様になつた頃モンsoonになることもあるであらう。ナンガパルバードのメルクル一行はこれにやられたのではあるまいか。

モンsoon後はどうか。

モンsoon中の降雪は、モンsoonが明けると、一しきり雪崩れる。しかしこの雪崩の時期が終ると——九月の半も過ぎると——急に嚴しい寒さの爲め雪は山の横腹に、くつゝいてなか／＼落ちなくなる。雪崩

もあまり出なくなるし、この頃は一番良い登攀期になる。

しかし、九月も末になり、十月の聲をきくと、ティベットよりの寒波は、身を切る様に冷たくなり、雪線下に生えてゐる草も一日／＼と枯れてゆき、懸垂水河から流れ出る瀧も凍つてゆく。さして高度の高くない山——ナンダゴート級——であつたならば寒さを我慢すれば安全な登山が出来るのであらうが、ヒマラヤの一流處に對しては、果して勇敢に、攻撃出来得るだらうかと云ふ疑問が起る。殊にこの時季の夜の寒さを考へると、二萬八千呎級の野營が果して出来るだらうか、出来るにしても、一日／＼と冬が近づくと山頂に向つて、一歩一歩と進み得られるであらうか？

大ヒマラヤに挑戦する場合の大きな悩みはこゝにあるらしい。モンsoon前の登山期に於てはモンsoonが來れば一時攻撃は中止されねばならぬし、モンsoon後にはこの酷寒と戦はねばならぬ。

であるからしてモンsoon中をうまく、山中に過

し、モンsoon明けては直ちに攻撃にうつれる様にするのが、理想的な方法ではあるまいか。

このことは、ヒマラヤの盟主どもにあてはまることであつて、ナンダゴートには、それ程、難しい問題はないのではないかと思ふ。ガルワール地方の二五〇〇〇呎級の山ですらモンsoon前後とはさして登攀には、變りが無いのではないかと思ふ。

この位の山だと、モンsoon前の時季に登頂出来るだけの期日があるし、モンsoon後に於ても、高度から割り出した温度を考へて、登攀可能であると考へる。このことから山岳——ヒマラヤ——の高度、地方により、その登山期は選ばれると思ふ。

ガルワール、クマオウン地方は、前に述べたように、モンsoon中に登られた山が澤山あるから、一寸例外的様だ。しかしこれは、モンsoon中でも晴れる日があると云ふことを裏書してゐるし、モンsoon中を登山期と選んでも悪くはないと云ふことだ。これは、シッキム地方の様に海洋の影響が少ない爲にもよ

るが、ヒマラヤは北に行く程この影響が少なくなると云はれる。

ガルワール、クマオウン、地方の山は、老練家ならばモンスーン中とても、さして困難ではないと云ふことになる。

しかし我々には最も安全なモンスーン明けの九月を待つて登攀を開始するのが無難だ。我々は、モンスーン中を平地旅行に過ぎた。じめ／＼した部落を雨に打たれて歩いたのだ。一萬呎のマルトリに來りやうやく、天候も良くなりかけ、青い空を眺められる様になつた。これが八月の末である。この兩地方はモンスーンの明け方が早いとか云ふが、或はそうかも知れない。しかし連日快晴の日の續くのは九月の半過ぎだ。

連日快晴でなくとも、多量の降雪、烈風が無くなり、時々晴れる日もあると云ふのが、「モンスーン明け」と云ふのならば、八月の末にはガルワール、クマオウンヒマラヤのモンスーンは明けると云ひ得る。

登山期を定めることは必要だ。それよりも更に必要なのは、期日をたつぷり取つて置くことだ。この長い期間の登山者の氣持は、實につらい。

降雪、烈風、雪崩、登路の造り直し、……頂未だ遠しの場合、烈しい猪突的な闘志は何時の間にか摩り減らされ次第に緩み勝ちになる。こうなると、山頂は實になやましき存在だ。疑惑が起る。果して登り得るだらうかと。

この時に、隊員はお互に闘志を小出して、強い忍耐力和攻撃力で、じめ／＼と最後まで、山を諦めず肉迫、前進しなければならぬ。

この様なことは山登りをする者は誰もが心掛けて居ることだけれど、相手が大き過ぎると、殊更、深くこのことを感ずる。

彼のバウエルも、カンチエンジュンガに於て、最後の瞬時まで——登攀不可能だと確定するまで 自分達の力を信じ、實に、ねばり強く、一步も退かず山に肉迫してゐる。



それには持久戦の覺悟を持たねばならぬ。しかし、幾ら力があり、鐵の意志と團結があつても、好運に恵まれなければ駄目である。

天に幸されんとせば、すべからく持久戦とゆくべきで、そして天運——天候——を持つのだ。

人力の限りを盡した持久戦に、好運の快晴が訪れて後始めて、果敢な、素晴らしい頂上への突撃に移れるのだ。

この一瞬が山に登り得るか否かの分岐點となるのではなからうか。

天候こそ登頂の最後の鍵である。

## 二、ヒマラヤの氷雪

(特に溫度、濕度に關して)

書物に、寫真に見るとヒマラヤの氷雪、それは單にシヨウ・ウインドゥに並べてある商品でしかない。手に取つては見られない。手に取つて見なければ、その性質や品質は分らない。

濕度の多い内地の雪と、乾燥したヒマラヤの雪。同じ白色の雪ではあるが甚だ相違してゐる。

これは、溫度と濕度との變化によると見ても間違ひはあるまいと思ふ。

ガルワール、クマオウン地方のモンスーンから、モンスーン後の溫度、濕度と、それに關聯して、雪質に就いて、素人考へを述べて見よう。勿論、我々は純然たる科學者でないから數學的な確たる列證は擧げられない。そのつもりで、讀んでいただきたい。

溫度に就いて調べて見る。この地方のモンスーンは六、七、八月の三ヶ月に渡つてゐる。

インドの中部地方の溫度も、一月二月は寒く、それより次第に氣溫は上昇し、四、五月頃になると、猛烈な暑さになる相である。山地に於ても、略々同様で、冬の間氷つた多量の雪は、この五六月の季節になると、高濕の爲に溶け始める。

その爲に山地の河川は相當の増水があるらしい。又モンスーン前の雪崩も、多くはこの高濕が、多大の刺

戟を與へて起るものと見られる。

この高温も、一度モンスーンが襲來し、海洋の影響を受けた、濕氣を含んだ風をもたらすと、山地に於ては、雨となる。

即ち暖波が、ヒマラヤの氷雪に突當つて、そこで冷却され、雨となり、高度の高い處では雪となる。この季節になると、雨天の日が多く、時には物凄い風を伴つて嵐にもなる場合がある。沛然と、音をたて、トタン屋根を叩くのが一日中と云つたことも普通である。

こうした季節には氣温も下降し、十五、六度位になる。(アルモラ附近) しかし、一度雨雲が晴れて、太陽が輝き始めると、直に二十九度、三十度と水銀柱は昇る。

これを、解り易く説明すると、アルモラ(海拔約五〇〇〇呎)カブゴートあたりで、終日ひつきりなしの降雨に會つた時には、薄手の毛のステーターを、キャラコカ、ポプリンのワイシャツの上に着て、ズボンも、毛織の薄手のものでないと少し寒いと感ずる程であ

る。眞夏の上高地で猛烈な嵐に會つた時の氣温を思ひ出せば略々了解出來よう。然しこの雨が上ると(一時的のもの)シャツ一枚、半ズボン一つでも太陽の當つた舗道に出ると、汗がにじむ程になる。

これは、太陽の熱が強い故であらう。日中の物凄い暑さを、避ける爲に、バンガローの石造りの家の中に入つてじつとしてゐると、さして暑さは感じない。この地方の家——印度人の家は皆さうかも知れないが——は皆石造りである。この石造りの土間だとか柱は、室の内部を暑い日中でも或程度の冷却作用も爲すものらしい。

さて、この濕氣の多いモンスーンも、八月末から九月半ばになると次第にその威を減じ、九月の末になれば秋晴のすがすがしいお天氣が續く様になる。ティベツト高原からの冷たい乾燥した北風が吹く爲である。この風の爲に南からの濕度の多い風は次第に弱まつてくる。この季節になると、ヒマラヤの丘は、最も旅心地の良い場所に變る。雨の無い、からりと晴れた日に、

松並木、石楠花の大本の間の小徑を歩くのは、ヒマラヤの旅人だけが味へる豪壯なものだ。森の彼方、松林の彼方に隠見する、白雪の大きな山波も一日中眺められる。

秋も間近に迫るこの季節は、草原も田圃も、畑も、秋の黄金色に彩られる。瀟々と吹く秋風は、冬の仕度を、用意しなさいと語るのだ。街の舗道を歩くのにも夜は、毛織の合着位でないと薄ら寒い。日中は、ぽかぽか氣持の好い暖かさになる。やがて十月、十一月になると寒さが山裾を包んでしまふのだ。

以上は、アルモラ附近（五〇〇呎あたり）に就てである。

このヒマラヤの丘と、それより奥地のヒマラヤの裾とは又可なりの變化がある。

マンシヤリ、マルトリ、ミラムの部落が、夏期だけの村であることを知らねばならぬ。

モンスーン前の雪解期にこの村に入る人達は、冬期を、カブコート、バゲシュワール等の温かいヒマラヤ

の丘に送る。彼等は羊を追乍ら、緑の草地を求めて、山へと向ふ。ヒマラヤの雪の峠を越して、ティベットの高原にまで足をのばす者もある。

この人達はモンスーン明けて、間もなく秋の風が立ち初めると、家内一同で、彼等の財産である羊を連れて、暖かい場所へ／＼と下つて行くのだ。九月末になると、この人達の行列がゴリの谷を埋めて下つて来る。

暖かい處を好む彼等には、九月末の零下二、三度のマルトリの部落は安住の土地ではなくなる。厳しい霜と、朝夕の寒さは羊の喰ふ緑の草を、次第に枯れ草へと變化させる。

この様に、ヒマラヤの裾は、秋風の立つのも早い。

さて、人里離れた、雪と氷の世界、ヒマラヤの氣候、温度、湿度は如何であらうか。

モンスーン中旅を續けた我々が、マルトリから、ロースンの谷に入り、ベースキャンプを設けた時には、氷雨がそぼ／＼と降つてゐた。

氷河を渡つて来る冷たい風と、四五〇〇米の高度に於ける雨であるから、手もかじかむ寒さだつた。(八月末―九月始)

然しこの頃は、雨と風の勢は、さして強いとも思へない。と云ふのは、モンスーンも、そろ／＼明ける頃だからだ。晴れた日もあつた。こんな時に、太陽の燦然と輝く下で荷物の整理などしてゐると、じつとりと汗ばむほど暑い。氷河を渡る冷たい風も、日中は心地よく感じる。だが一度夜の幕が下りると氣温は急に下降し、零下二、三度になる。氷河を渡る風も夜になると身を切る様に冷たい。

日中でも、アルモラ地方で述べた様に、日陰に居ると、ひんやりする。太陽の出ない、曇つた日だとか、雨の降る日は底冷がする。これは、未だモンスーンの濕氣が山に残つてゐる爲でもあらうと考へる。

九月の半、それ以後になると天候は漸く定まり、雨の降る日は少なくなる。その代り目に見えて、寒さは加はる。それは、ベースキャブ附近の草花や、小さい

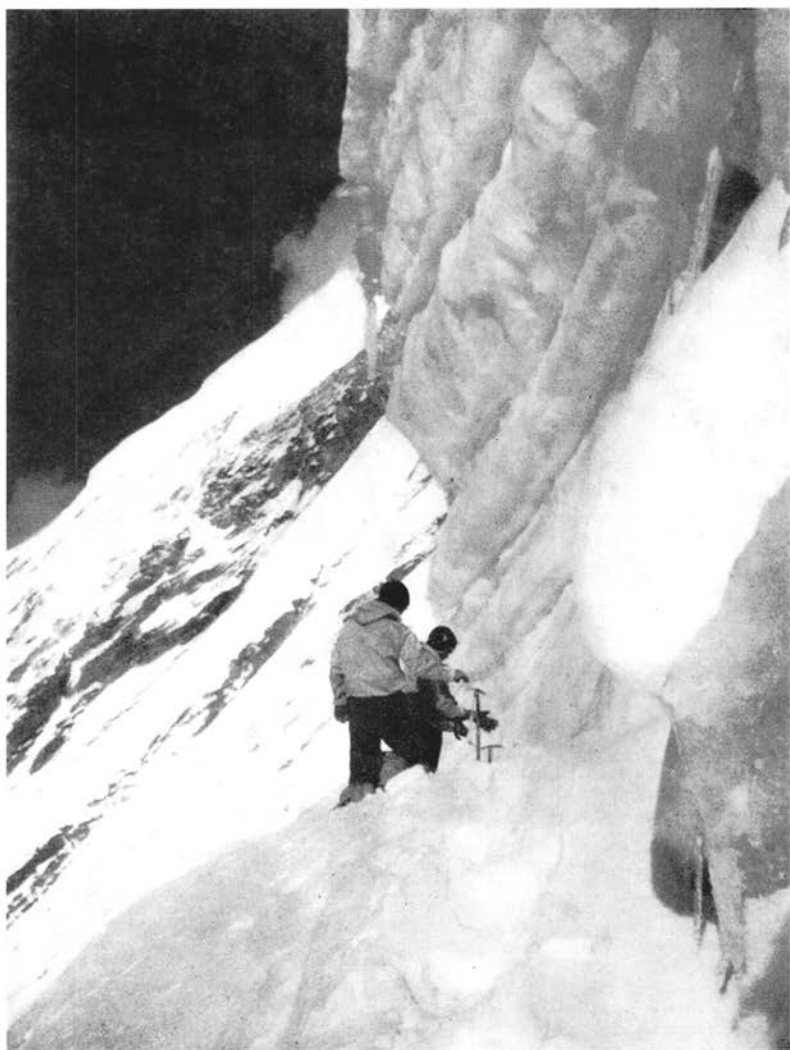
灌木(石楠花)を見てゐると良く判かる。

エーデルワイスの花は九月末から十月になると、カサ／＼に枯れてゆく。石楠花は、その葉を、くる／＼と巻いて枯れた様に凋びてしまふ。五千米以上に降雪があつた時――モンスーン明けても時々降つた――に、四五〇〇米のベースキャブにも雪が見舞つた。ベースキャブを建設した時の様な寒さとは違つた寒さが、ヒマラヤを訪れたことの良い證據である。

テイベットからの乾燥した寒風が、山を包むと、雪崩もその回数を減じ、山は、もう落ちる雪を殆んど振り落とし、研ぎ澄した白銀の殿堂にと變つてゆく。然らば、その殿堂内の氷雪中に於ては如何なる變化が經驗されるのであらうか。

モンスーンの間積つた、濕氣を帯びた多量の雪は、モンスーン明けを待つて、一勢に雪崩れる。晴れて、太陽が顔を出すと、氣温は上昇する。この高温に刺戟されて、多量の雪は落下するのだ。

速日、速夜、ひつきりなしに雪崩の咆哮は鳴り止ま



第三キャンプ上の氷塔を捲く

立大山岳部



移轉後の第四キャンプ

立大山岳部

ない。

この雪崩も、九月末になると殆んど落ち盡し、雪はティベットからの寒風に叩かれて、次第に凍結してゆく。

一體、ヒマラヤの雪と内地の雪とは何んな風に相違してゐるだらうか。

先づ最初に、内地の雪は、冬降ると云ふことだ。それは内地の山が高度が低く五〇〇〇米以上の雪線を越した山岳はないからだ。ヒマラヤは、この雪線を越えてゐる爲に、一年中四季を問はず、降雪し、其の雪は日中の太陽の強い熱に溶かされ、夜の嚴寒に凍る。この作用を、毎日／＼くり返してゐる中に、ヒマラヤに降つた雪は、次第に青い万年氷と變化してゆくのだ。又、夏期に降つた雪が、前述の作用で氷になり、それが冬期の嚴寒に會ひ、益々固く氷化してゆく。たとへモンスーン前の暖氣で、溶解しても、モンスーン中に再び降雪し、間もなく、寒波が西北から來るの

ゆく。

この作用は、一般的な原則であつて、登攀中、常にこの固い氷にぶつかつたわけではない。湿度と温度と風、地形も影響されて、雪は粉雪にもなれば、ベタ雪にもなり、氷にもなる。

モンスーン明けは内地の氣候から云ふと夏である。であるから、この季節に五千米の高所でも雪の上を、日中歩いてゐると、印度の平地の中にある様な暑さを感じる。

太陽の直射と雪面からの輻射熱の爲に、だるい、物憂い感じさへする。

毛織のワイシャツ一枚で、三貫位の荷を負ふて歩いてゐると汗ばむ。手袋などはない。靴についた雪は見る間に水玉になつて解てしまふ。

しかし、これは、烈風の荒ぶ、尾根筋の話ではない。谷か、又は風當りの少ない日向の雪田の話である。風さへ吹かなければ内地の夏山の大雪溪を登るのと何分差はない。

日中の高温（十度——二十度）も太陽が山の端に沈むと、水銀柱は、見る間に下降し零下、五、六度——十五度——位までになる。この急激な温度の高低が、雪を氷化させるのだ。然しこの作用は高度に關聯して、幾分の變化はあるに違ひない。高度の高い山岳では氣温はあまり昇らず、又、風當の凄い山頂等は日中の溶解作用は、盛んに行はれるとは考へられない。

この高處の風當りの強い場所とか、日の當らない場所の雪は、一日中粉雪のこともある。

風當の強い處は、あまり雪はたまらず、殊に尾根筋などは、雪は風に叩かれて、クラストし、固い雪が緊つた雪になり、大きな雪庇をつくる。この尾根の雪は、その日／＼の風の強弱で雪質は變化するものらしい。風の殆んど無い様な日であつたならば、矢張り、雪は溶解作用を多少營むと見え、もぐる歩きにくい雪質と變化する。

次にナンダゴコートの雪質を説明し、今まで述べて來つた事の例にする。

五〇〇〇米——五五〇〇米まで、即ち第二テント附近は地形的に、割合に風の當らない處であつた。この廣い雪原はナンダゴコートの東北尾根と、ナンダゴコートの山頂の大きな山にさへぎられて、南風も、東風も當らない、ポケット狀の地形であつた。

従つて、太陽がこの雪原に、偉大なる自然の恩恵をもたらし初めるのも（九月中）午前九時過ぎからである。そして、一日中、この雪原を温め、四時半か五時には太陽は、ナンダデヴィの外輪山の一峯、ローン峯の後に隠れる。

その日中の雪原は、太陽の熱の爲に、水つぽい雪質と變化し、足首迄もぐる。その水つぽい雪の下層は、氷である。この氷も、毎日／＼の溶解作用で雪が氷化したものらしく、雪原全體が平な氷河狀を呈してゐる。之はナンダゴコートの東北尾根と、我々が登つた北尾根との間の——第四テントを建設したコルの北側——谷狀の氷河の續きで、雪原の上部の處は、クレバスや、雪崩のデブリ等で、とても歩け相もない處である。であ



るがこの雪原の雪の下層の水の下は、水が流れてゐる。日中特に午後になると、溶解した雪の水を、集めて流れており、處々雪面から顔を出して岩の周りの雪は春の雪の様に水つぼい。時々この氷つの面を、踏み破り、下部の水の中に足を突き込むこともあつた。

この様に、太陽の輝く雪原は、暑い位である。之の暑さも、日が蔭ると、急に冷へてきて、ぐんぐんと寒さを増し、スエターを着たり、手袋をしなければならなくなる。

日光に溶かされたベク雪は、夜八時にもなるとカンカンに凍つて、日中、足首迄も潜つた雪面は、固い板の様になり、十六貫の人間が其上に乗つても、びくともしなくなる。夜になつて風に飛ばされた、山頂附近の乾いた粉雪が、此の雪原に降ると、そのまま朝九時までは、きめの細い、片栗粉の様だ。日のさし込まない前の雪田の登高は、耳もちぎれる程の寒氣と、靴の中の足を自分のものと感じさせない程の寒さである。この様に太陽熱は、雪を多種多様に變化させる。

殊に、急峻であつた北尾根は、一日の中に、あらゆる雪質を我々に味はせた。

日當りの良い傾斜の幾分緩い尾根では、雪原の雪の様にボク／＼潜る水つぼい雪であつたし、日陰の岩と氷との間の溝を登つた時には、固いピッケルをはじき返す様な氷であつた。又、處々尾根の氷雪が龜裂の爲に斷ち切られ、大きな氷の斷涯を形成してゐた。この氷の斷涯の裾は、日陰になつてゐたのと、上部から吹き下ろす、粉雪が溜まるのとで、腰まで潜る深い粉雪になつてゐた。その深い粉雪の下はネイルド・ブーツも齒がたゝない固い氷であつた。急峻である爲、泳ぐ様にしてこの粉雪の中を、押し進まねばならない。氷涯と深い粉雪との接合点には、深い、クレヴァスの口があり、この口は雪に隠されてゐて、良く験べてから足を下ろさないと危険なところであつた。これを渡る時、日の目も見ない北側の氷の面で、これに足場を刻んで、登るのは、日が當らないから、實に寒い。靴に付いた雪も、手袋に着いた雪も凍つてしまつてゐる。

やがてこの氷面を登つて、日の當つてゐる處に出ると、たちまち、身體についた凍つた雪は水玉になつて解け、見る間に、乾いてしまふ。

内地の山で、尾根自身が、氷の階段になつてゐるのは、餘り見當らない。この氷の段階に付いた雪は、凡る雪質を具へてゐる。風に作用され太陽熱に作用されて出来る雪であるから、一寸想像では考へられない。唯、氷の尾根と云つても、全部氷化したガラスの様な尾根ではないと云ふことだ。

今まで書いてきたことは、北面の、烈風に影響されなかつた部分に就いてである。

第四テントから上部山頂までの雪に就いて云ふと、東北尾根の尾根筋には、南印度平原からの風が何にも遮られず、吹いてくる。又、北、テベツト高原からの寒風も、クングリ、ピングリ峙、パンバドゥユナ山方面の六〇〇〇米級の山波を乗越して、この尾根を吹きさらす。

であるから、この尾根はモンsoon頃は、南風に叩

かれ、磨かれ、その時に付いた雪は北側か西側に大きな雪庇を出すものらしく、又、モンsoon後は、北風の爲に南東に、雪庇を出すものらしい。と云ふのは、この尾根の雪庇は、一定の方向に出て居らず、右に左にと、まちまちであつた。これは地形にもよるが、それよりも、風によつて出来るものと見た方が良いのではないかと思ふ。第四テントより山頂に向けての尾根筋中、最初は文字通り剣の刃の様に尖つて細かつた。こゝは、東ネパール方面のパンチ・チュリーまであまり高い山もないので、東南の風に叩かれたか、西側にのし出した雪庇は實に數米もあつた。雪庇の出た細い尾根を歩くのは雪庇の上なのか、本當の稜の上なのか、判断に苦しむ。バランスをとつて、綱渡り式に、注意して歩かねばならない。その上、風が、ひつきり無しに東から吹き、雪煙が時々烈風に捲き返へされて、我々の顔に雪をたゞきつける。日が出てゐても、風が刺す様に寒く。雪は風に叩かれて緊り、アイゼンで歩くのに丁度いゝ加減だ。日中、この尾根筋は(六

二〇〇位迄)せい／＼零下十度位のものであるが、ウインドヤツケを通す風は骨身に滲みる。

さて、この西側の雪庇の部分を通ると、今度は東側に雪庇が出てゐる處に出た。我々は、雪庇から少し離れて西側を歩いた、こゝは山頂から少し下部の圓いドームの根もとに當つてゐた爲に、風が幾分やわらぐと見え少し雪がもぐつた。細い尾根が少しづつ廣くなり出した事にも原因する。そして、圓いドームの登りは、種々雑多の雪質であつた。北風に磨かれた青い氷がテカ／＼光る處もあつたし、風に持ちはこぼれた粉雪が太陽熱に作用されて、幾分緊つた雪に變化し、これが氷の上に乗つてゐて、踏み出すと同時に板狀に切れて、氷の面を、流れると云ふ處もあつた。又足首が、ふくらはぎ迄滑る粉雪の處もあつた。この北向きの廣い大きな斜面は、冬の富士山の登攀の様に、雪質が、凡る方向の風に作用されて、變化してゐた。

何處に居ても、風は當るし、時々起こる山頂附近の雪煙は龍卷を起して、下に居る我々に襲ひ來つた。高

度が高まつたので、溫度も少し下つた様だつた。この一定しない雪質の登りは實に辛かつた。

最後の三百米の登りは、雪質に恵まれなければ、易々とは抄らなかつたらう。と云ふのは、廿九日の最初の攻撃の時の事を想ひ合してである。天候は次第に惡化し、濃いガスは、降雪と變り、烈風は益々加はり、時たま、ぱつたりと風が止む。すると粉雪は、音もなく、急な斜面に積つてゆく。

左側は切り立つた岩の露出した崖で、右側は、急な雪の斜面で、ナンダゴートの北壁の岩の處で、ズテンと陥ち込みあまり急なので下のバットレスは何も見えない。唯、ナンダゴートの氷河の真中あたりがかすかに見えるだけだ。おまけにこの雪稜には、雪庇が、左右兩側に出てゐて、パン切り庖丁の刃の様だつた。この氷の團子狀の雪庇の頭から、二、三米離れた、右側—ナンダゴート・バットレス側—に登つたのだ。

粉雪が積つた斜面は、ステツプを切る後から、崩れた。足場に乗つても、二、三回、踏み固めてから、足

を下ろさないと、足場は、壊れて、小さい雪崩となり霧とも雪とも見分がつかない、灰色の斜面に静かな音をたて、流れてしまふ、日が陰つたので温度は、益々下降し、足も手も、無感覚になつた。

この最後の一瞬に、最悪の雪のコンデションにぶつかつた我々は天を恨んだ。

湯浅が雪崩に流されたのもこの雪である。二、三日前の降雪と、その日の降雪が、幾分緊つた、下層の雪の上に不安定に乗つてゐたのだ。足場を連続的に、雪面に切る。一線に切られた雪面は、バランスを失つて雪崩となつたのだ。膝をも埋める、深い雪の急斜面の登攀は實に雪崩の危険が多い。

我々は、天候と、時間と、雪崩に禍されて無念なれども引き返へしたのだつた。

十月五日の登りは、廿九日に比して、全く、話にならぬ程楽だつた。雪質が全然違つてゐたからだ。廿九日から十月五日まで、殆んど降雪と云ふ程の天気はなかつた。その爲に、上部の粉雪は、風に飛ばされ、或

は雪崩れるものは雪崩れてしまひ、太陽に温められ、風に叩かれてしまつた。稍固い雪と變つてゐたからだ。足場を刻んでも、前の様に、壊れたり、崩れはしなかつた。

ピッケルの刃の跡が、綺麗に、雪面に印され、歩幅の、狭いステップも、一つ／＼、完全に、残つた。この恵まれた、雪質は、天候と云ふ天の授かり物によるのだ。我々が高度に馴致したことによるが、雪質が悪かつたならば、雪崩の危険が、我々を容易に頂上に立たせなかつたに違ひない。烈風は相變らず西北から吹いてゐた。十月に入つてからめつきり寒さも増したが、さして苦しい程のこともなかつた。太陽さへ顔を出して呉れれば、寒さは、さう氣になくとも良かつた。

しかし、ザイルをピッケルに捲きつけて、ジッヘルしてゐる時の足や手のつめたさは、實に辛い。これとても、内地の冬山の吹雪の中でこんな動作をしてゐる時のことを想へば、すーつと樂だ。山頂は、風當りが

強く、西風が、ビュン／＼と吹き立てゝゐた。山頂の固い雪の上に、ピトンをうづめて、結び附けた國旗は、吹き飛ばされさうだつた。しかし、我々が立つて、一時的にも、寫真器を素手で扱へたのであるから大したこともない。

温度は零下三十度。我々の頭も、靴の先にも、太陽の直射があつた。それだから寒さはさう物凄く厳しく感じなかつたのだらう。アイモの撮影機も、正確に、動いたし、寫真のシャッターも切れた。風が吹くのであまり、吞氣に、寫真を、いちり廻せなかつたまでのことだ。これは、決して、瘦我慢ではない。風が止んだら、もつと樂だつたに違ひない。

× ×

この様に十月に入つて寒さが増してきても、日中は、大したことも無いのである。しかし、朝、晩の寒さは、實に、目に見えて、増してくる。今まで、不安定であつた雪橋も渡れる橋に變る。雪原の雪も、九月の始め頃の様には溶けない。小さい氷河の終りの溜は

朝、夕は音も立てない。それも、次第に、水が少量になり、果ては少しも出なくなつてくる。土の上の植物は、矮びて、枯れてしまふ。

霜が正午頃まで、土を固いまゝにする。

以前の様に、裸になつて着代へすると、寒い。テントの側らの日當りで、厚いスエターを着て、羽根ブトに寝そべつてゐるのが一番楽しい。

夜はテント内でも(第一テント、五〇〇〇米土の上)零下五、六度になる。朝テントの内側は、雪の様に厚い霜が一ぱいにくつゝく。九時頃日がテントに當ると、テント内は滴で、雨に會つた時の様に、ズブ濡れになる。

ヒマラヤの雪は、太陽の熱によつて、幾種幾通りの變化をする。その變化には、温度と風が作用する。従つて、六千米以上の高所に於ける雪は、あまり變化しないと云ふ説も、一應の理由があることだ。即ち温度が、あまり下降しない。風當りが強い。このことから斷定した説であらうと考へる。しかし、地形的なこと

を考へると一概に肯き兼ねる。

ノースコルの雪が、或る變化をすると云ふことは、地形的に、風や温度に作用され易いことによるのかも知れない。

雪質に就いて、我々は、内地の冬の最も厳しい寒さの時のことを標準にして、ヒマラヤの事を考へた。しかし、日中の登攀は、案外、内地の冬山よりも樂であつた。一般に、ナンダゴート級の山であれば、最後の登攀——即ち尾根の登攀で高度六五〇〇米以上の吹きさらしのところを除けば、内地の冬山よりも春山の、登攀に似た登攀が出来るのではなからうかと考へた。その上日當りの良い、風の當ならないところは、夏の雪溪を歩く時の様な暑さにも巡り合せる。

唯、最後の六千米七千米の間は、相當の寒さと、苦しい呼吸に苦しまねばならない。

雪質も、時により場所により異にするが、まあ一口に云へば、内地の冬山の、固い氷化した雪質を想はしめるものがある。

× ×

内地の冬山の、訓練を積んだ登攀者ならば、あまり驚異的なものは發見されぬことだらう。

× ×

雪崩。これは驚異に値する。内地の山の谷の雪崩には、そのすさまじい勢ひのある時間が短かい。と云ふのは、雪崩れる場所の傾斜面が短かいことだ。ナンダゴートの北壁の雪崩れは、落差一五〇〇米と云ふものは、全くの壁である。この壁を雪崩れて、下部の氷河につき當つて、濛々と雪煙を宙に上げる偉觀は、度膽を抜かされる。急面斜であるから、速度も早く、又距離が長い爲に、雪崩れてから、他の雪にショックをあたへる機会が多いので、氷河につき當る時には——雪崩の最後の瞬間——實に大きな量の雪を落下させる。

ナンダデヴィ東峯の東面の壁と、ナンダゴートの北壁は、一日中、この巨音を響かせてゐた。谷から峯に、地響する程の音を、溢させてゐた。最初は、この音が耳について、睡眠を妨げられたりしたが、後に

は、何んとも感じなくなり、遂には、カメラをも向けない程、慣れてしまつた。

雪崩れを撮影するのに、先づその巨音を聞き、それから、テントの中に飛び込んでカメラを持ち出し、絞りや、フィルター等を良く調べてから撮す。それでも雪崩れは未だ濛々と、すさまじい勢ひで落下してゐるのだ。

このことからして、その大きさは想像出来よう、降雪がある時、夜でも晝でも、雪崩の音は續く、朝日が當つたトタンに大きな雪崩が出るし、夕日が沈みかけようとした茜色の雪も雪崩れたりする。

出来ることならば、谷の登りは、出来るだけ、さける様にした方が安全である。雪崩れは一日中、何時でも出ると考へてゐた方がいゝ。

しかし一般に九月末から十月になると雪崩れの出る回数は減する。降雪量が減する爲に、不安定な雪は殆んど落ちて、固い氷化した根雪が残るからであらう。

雪崩にも、尾根が崩れることがある。それは、尾根

が型良く稜線をしてゐないところがあるからである。

尾根が急に廣くなつて一つの斜面の様な型に變つたり、尾根の上に氷の塔が出来てゐたりする。それ故に、斜面が雪崩れたり、塔が、崩れたりするらしい。

第三テントの上部——一種の稜上だ——の氷の塔の上が雪崩れて、十月六日に、第三テントに歸着した時には、テントの直ぐそばまで、氷の固いデブリが押し流されてゐた。ロングスタッフ氏も、ナンダゴートの東北稜上で雪崩の危険があつた爲に引き返へしてゐる。尾根が雪崩れることもあると云ふことは、注意すべきことである。

### 三、高所に於ける人體への影響

#### (1) 呼吸

高度四千米以上。即ちベースキャンプ位になると少しく呼吸が苦しくなる。しかし、同處に二日も居れば、高度に慣れて、呼吸も苦しくはなくなる。従つて、高山病の頭痛も、二日間位で感じなくなる。第三

テント（五八〇〇米位）までは、僅か一日か、二日で頭痛も、しなくなる。しかし、呼吸は五八〇〇米位になると直ぐに平常には返らない。その上重い荷が肩を押へてゐる爲に、相當苦しまねばならぬ。第三テントまで三日ばかり、第二テントから往復したが、何時も何時も、登る時には苦しんだ。

ゆつくり歩いて、二、三十歩と云ふところが關の山でそれ以上頑張つてもその後が苦しいから頑張らない方がいゝ。二三十歩歩いて一寸立ち止まつて、呼吸を調整しなければ駄目である。これが、第四テント以上の六千米以上になると尙一層、苦しさは増して来る。第一回の攻撃の時は生れ落ちて始めて登る六千米以上の高さであつた爲に、その呼吸の苦しさは、實にひどいものだつた。五歩登つては止まり、十歩歩いては止まり大息をしなければならなかつた。登頂出来ずに、第四テントに辿り着いた時には、自分の身體とも思はれぬ程疲労してゐた。その夜は苦しい一夜だつた。高度が、六千米を超すと、急に、人體に影響して来る。

しかし、二回目の中には、高度に馴致した爲か、呼吸の苦しさも、暫らく立ち止まつて休んでゐれば直ぐに平常に復し、再び、元氣良く十歩乃至十五歩の登高が出来た様になつた。

六千米からは、急に呼吸は苦しくなる。六千米までは、一日位無理をしてもあまり苦しくはないが、六千米以上で無理をすると次の日が動けなくなる程だ。

或は六千米から上部と下部とには一つの境界點があつて人體に或る種の變化をそこで起させるのではないかと思ふ。最も七五百米までは、人間は大したことなくしに高度に馴致し得るとドイツの登山家は云つてゐるが、これを又細く分けると六千米以下は問題でないと言ふことも言ひ得られるのではないか。

高度六千米以上の苦しい呼吸も、其れに馴れてしまへば、唯あまり、連続的に登高が出来ないと云ふだけで、一寸立ち止まつて、呼吸を整へれば、再び登高し得られる様になる。

その呼吸の調子を、うまく、コントロールすること



を知つてしまへば、あまり苦しまぬ様になる。

高處の烈風に抗して、歩一步と、登るのは實に苦しきことである。

## (2) 氣壓と脈搏

ペースキャンプ（約四六一九米）の小雨の降る日（九月二日）にバロメーターの目盛を見た。高度五千米までのものだったから、それは四五〇耗しか目盛が無かつた。その日針は四五〇耗を指してゐた。我々のバロメーターは不確實であつたが、まあ、四五〇耗位に氣壓は高くなることは分る。それ以上の高所には氣壓計を持つて行かなかつたから、氣壓の目盛を數字で現はせない。

この日の夜、靜かに寝てゐる時に脈搏を取つて見た、五人とも、八〇前後になつてゐた。寝る前に、羽根ブトンに潜り込む。それは相當の運動だ。その後脈を取ると、急に、百位に多くなつてゐる。これがペースキャンプに於ける場合であつて、高度が高まるにつれて、活動後の脈搏は増加してくる。

例へば、五千八百米の第三テント附近を、三、四貫の荷を負ふて登攀してゐる時などは百廿位までに増加する。しかし高處に長い間居て、高度に馴致すれば、活動後直ちに、八十位に脈搏は減少し、苦しい呼吸も、直ちに平常に復する様になる。であるから、六千米以上の山頂への登りの時の、烈しく苦しい呼吸の時には百廿以上にもなつてゐたと思ふ。

十歩と續けて歩くと、苦しくなつて、後が續かなくなるのも當然のことだ。

以上甚だ非科學的に述べて見たが（六〇〇〇—七〇〇〇米）に於ては高度に馴致すれば、呼吸も、脈搏も、靜止の状態に復した時には、直ちに平常に還ることを知つて貰へればよい。

日本人の身體が高度に適不適と云ふことは斷言出来ないことだと思ふ。兎に角、七〇〇〇米以上の巨人に當つて見なければ比較出来ない。唯、醫學的でなしに、他の理由から、日本人のヒマラヤ遠征は、歐米人よりも樂に出來ると云ふ事は言ひ得ると思ふ。

(編者附記) 立教大學山岳部のヒマラヤ遠征が舉行されてから既に三ヶ年の年月が流れた。曩に本誌第三十二年第二號に「ナンダゴコート」日記を收載して、吾人は遠征の詳細に接し得たが、いま本號にその補遺を採録して、右の日記に現はれない一面を窺ひ得る喜びは大きい。たゞ當時のメ

ンバーが或は應召に、或は事務多忙に、執筆の暇なく、ために食料、器具、人夫等に關する記録が茲に發表せられぬのは残念であるが、聽てそれらの部分も完成される機会がある事と期待してゐる。



# 黒部奥山と奥山廻り役 (三)

中 島 正 文

## 目 次

奥山廻り役の研究 (前承)

三、奥山盗伐事件と其始末

四、奥山廻り役の人々

五、奥山廻り役の記録と繪圖

(了)

## 奥山廻り役の研究

三、奥山盗伐事件と其始末

越中新川郡黒部奥山一帯は寛永末年から前田利常侯に依つて長く領國東方の藩屏として常人不入の地とせられ

黒部奥山と奥山廻り役 中島

七七

毎歳奥山廻りをして厳しく山内取締りを勵行せしめられたことは前項に於て述べた所であるが、此の制令は長く明治維新に至る迄忠實に遵奉せられた。

故に奥山の諸相は原始の形態を傷はるる事少く、明治大正に至つてさへ人跡未到と唱はるる幾多の地境を残したのであつた。

然らば此の禁斷郷は侯の希望せられた如く靜謐の限りを續けたか、誰しも頗る疑問とする所で、廣般なる黒部奥山の全容は其れ自身は少しの變化もなく保全せられて來たつたが、其部分部分は必らずしも然らず、隨所に波瀾重疊として展開し吾人をして瞠目手に汗を握らしむるものが有つたのである。

觀ずれば禁斷郷黒部奥山の深山幽谷の内と云へども皆な之れ凡浮の世中に外ならぬのである。是處にも浮沈する人間の苦惱が有つてこそ、即ち潤ひあり情味ある黒部奥山の歴史は形成さるゝものである。本項に於て之等幾多の事件を求め詳細の記述を試みねばならぬのであるが、恨むらくは資料の湮滅甚だしく遂に其の事の不可能である事である。然かも之等の事件の殘存記録は奥山廻り役の実際に遭遇した前後のみを記述してあつて、此間藩の意向施設等事件の締め結りをなす重要事項の片鱗も見出し得ないのは何とも残念至極と云はなければならぬ。

さて天正の昔の佐々成政のさら／＼越えや元和の松儀氏の浪人鎮撫の物語りは、既に人口に膾炙して居るものゝ可成り傳説の域を脱せぬものと云はねばならぬ。此の以後寛永慶安の間には格別の事件もなく萬治三年には加賀藩山廻役の定めあつて、此の境域の閉鎖の強固さは益々加はつたと見るべきであつた。只此間には針ノ木峠を越す商人や立山參詣者又は黒部大川端へ岩魚釣に來る漁人さては熊や羚羊を追ふて國境線上へ立ち入る狩人等、些爾たる者共が時に深谷の靜寂を破る位のものであつた。

蘆崎寺一山文書、古代度々爭論記。元祿元年。

乍恐口上書を以御斷申上候

一、信州同行拾貳人立山江山越に參り申候所ニ蘆崎村ノ案内者共室堂ニ而改申ニ付岩崎寺山番方ノ人ヲ添岩崎寺江つれ下り候ヲ私共改メ候得ハ信州松本領壹本木村と申處之由口上書私共方江取置申候ニ付御斷申上候以上

元祿元年七月二十二日

立山蘆崎寺衆徒中

社人中

黒崎村三郎兵衛殿

奥山廻役宗兵衛記録 元祿七年。

(前略) 黒部川はりの木谷出合ニ而信州仁科郡けんきやう村長三郎源七、同郡大町三郎左衛門兵九郎此五人罷越小屋掛いはな釣申を見付候ニ付向後此御領江罷越中間敷段々委細隠度申候へば右五人之者共殊の外迷惑仕り重而參り間敷と申小屋こぼさせ相返し申候(後略)

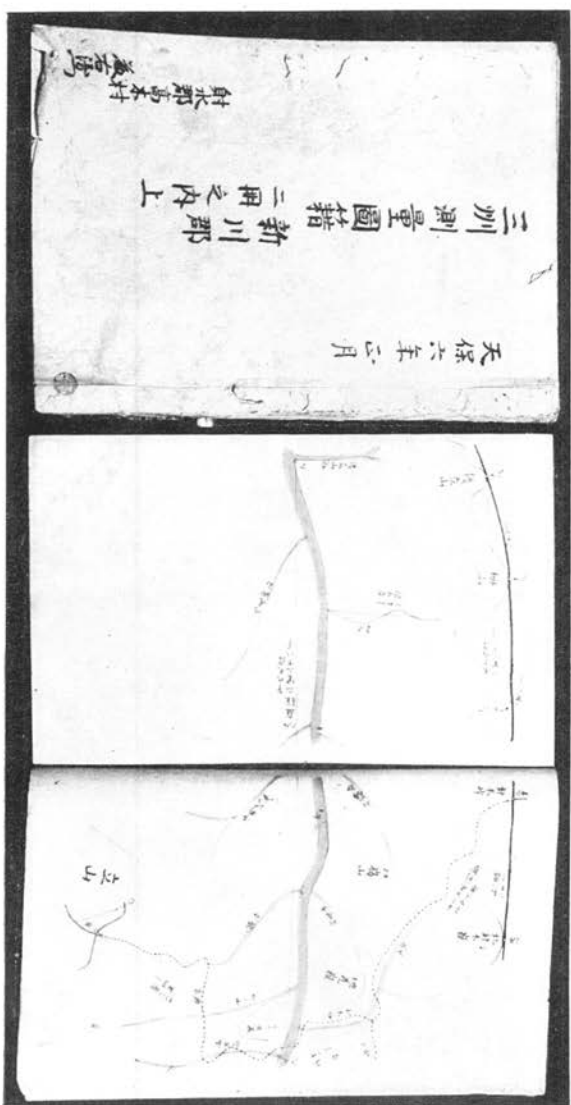
之の二つの文書で見らるゝ通り此の越境者達は惡意で爲した所作とも見られない。信仰上からと生活上必至のことから出たことであるのが好く譯る爲め、お叱り追放位いの軽い處分で終結したとは推察出来る處である。又こんな越境は折り〳〵繰り返へされた所で、奥山廻役も大して騒がず本藩の方も嚴重に取締りを指令しつゝも之等の者共を特別に重視もせなかつたようである。

然るに間もなくこの靜寂郷に突如として、奥山廻役を始め藩廳を驚かした一大盜伐事件が発生した。正徳二年七月の盜伐事件である。これは吾人の手元にある一番古い盜伐の記録である。

正徳二年七月四日、上奥山見分の爲めに登山した奥山廻役西水橋の勘左衛門並に同役内山村平三郎に依つて針ノ木谷に於て五六軒の小屋を掛け相當大仕掛けの盜伐を行つて居る者が發見され直に取押へられた。訊問の結果此等の柚共は尾張國あつみ郡なかわ村の者共二十五名であつて、信州松本町佐平次野口村彌三郎の二人の元締で以つて登山し、此の針ノ木谷のねずの木を切りへき板にして持ち出して居ることが判明した。於是奥山廻役等は針ノ木峠を越して西の方は加州領なる事を彼等に嚴重に云ひ聞かせる一方、峠麓の國境を熟知せる元締こそ奇怪な奴と睨み人を派して呼びに遣したのであるが、何條不正行爲を行つた元締の來よう筈もなく四日過ぎて使も歸つて來ぬ始末に、いよ／＼本締の不正行爲と判り柚人足共は其儘信州の方へと追ひ放つた。殘された小屋四棟共焼き拂つて後患を絶つたのである。

以上は尾張の者共から自供した書面に依つて了解せられる事件の全貌である。是の盜伐者達は尾張の國の者で遠國から出稼に來て兩國の堺も何も判からずと云つて居るが、少し注意して其肩書を見るならば實際は尾張者でなく尾張藩領である信州安曇郡奈川村の者共であつて、決して針ノ峠と相離る遠國の者とは云ひ難いのである。吾人には彼等がこの山間に精通して居る山一つ向ふの奈川村の者共で、即ち現在の日本アルプスを我庭同様にして居る信州者の盜伐事件であつて、問題が惹起しても御三家尾張領民と云ふ親藩の威光を笠にして加賀藩奥山廻役の強制執行を免れむとする奸策に外ならないことが直に了解せられるのである。元締がわざ／＼奈川村民を仕立てた理由も其邊のことではないかと思ふ。

奥山廻役の届書にも「柚共も尾張者共とも不奉存是義信州者之様ニ奉存候」と云つて居る位で奥山廻役等も奈川村を知らないとは少々迂遠な話であるが、當時は他領他國內の智識の無い時代故之れも致し方の無い所であ

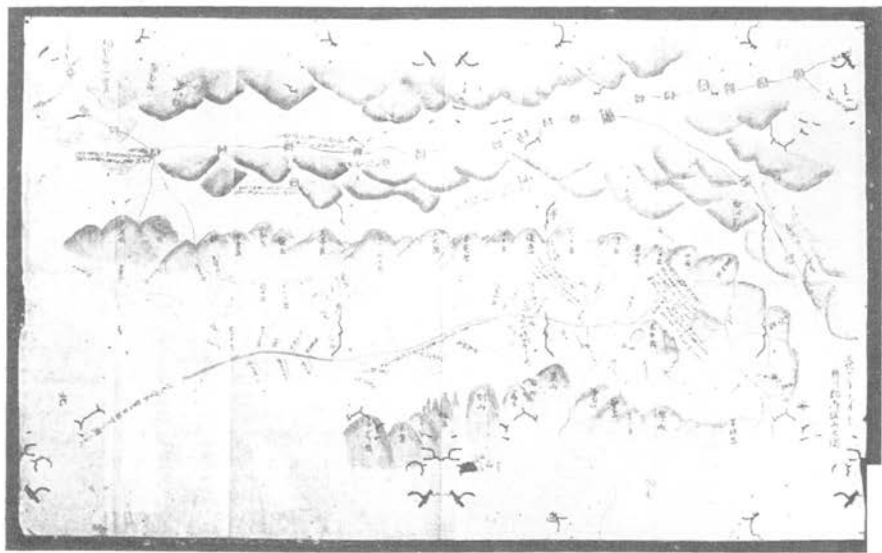


三州測量圖籍 (天保六年石黒信由翁編著)



右 古代度々争論記（芦舩一山文書）

左 山廻役御用勤方覺帳（天明三年宮永十左衛門手記）



新川郡御縮山之圖（文化十一年製）



つたろう。

尙此時は御三家の百姓と紛争を起すことを遠慮したのと、奥山廻役の同行八名の柚人足に比し盗伐者の方は二十五名も居る事故、強制的に加賀藩公事場へ彼等を盗伐者として引致することの困難さを考へて寛大な處置を取つたに過ぎない事が理解できるのである。

此の事件に依つて彼等は行程を早やめて下山直に御郡奉行に詳細を申告したので本藩の驚愕も一方ならず、八月初旬十村重右衛門と奥山廻役三名に柚人足三十餘名を附して不時の再登山を命じたのであつた。この處置は的中して又々針ノ木谷の他の二ヶ所に於て四ツの山小屋を發見して焼却したのであるが、此度は犯人を捕へることが出来なかつた。之等の小屋は前回同々の奥山廻り見分に於て發見出来なかつた事は奥山廻役に取つては實際不面目極まる事であつて、彼等は上申書の内で「小屋の義は山之茂り小屋際へ不能越候而ハ遠方々見不申候依之勘左衛門平三郎罷越候柚人足少々召連申候間左様之所尋出不申候今般は人足茂大ク召連罷越手分ヶ仕方々相尋申候故見出申候」と極力辯解して居るのである。この文書中に小屋腰の石に寶永八年八月野口山と書記有之と云つて居る所から見れば、昨年來すでに此の小屋は出来て居たと見るべきで小人數ではあると云ふ云ひ譯けも有ろうが些か奥山廻り役の緩怠は免れ難い。

以上は事件の概略であるが、其詳細は古文書を見た方が一層理解が早やい。

佐伯記録 正徳二年

正徳二年はりの木谷へ信州之者共入込候ニ付取申紙面之寫。

私共儀はりの木谷こやをかねすの木板柢拵い申候所ニ各見分被成御たづねに付申上候。私共志なの、國水野はやと様

黒部奥山と奥山廻り役 中島

黒部奥山と奥山廻り役 中島

三

御領内松本町左平次屋口彌三郎と申もの共本メ仕りヤとい申に付遠國罷越此山谷之内併大川通ねすの木ねきり仕こヤ所へ持參を仕候ていたはば八寸長サ四尺三四寸ニへき板にでき次第もちいだし申候しかる所にはりの木とをけみねをかぎり越中國の御山のよしいさいにおのく御申被成私共うけたまはり屈御尤しごくに奉存候。私共兩國御さかい山は遠國の者に御座候へバかつて以不奉存右本メのものとも志なの國の由申ニ付きり木も枇板も仕候へとも越中の御山の義ニ候へば早速此所立のき申度存候へとも私共かたへ本メ方過分のまい銀請取本國罷越申ニ付私共こゝろにて山志まい罷出かたくそれに付おのく山ノ内とおりう被成野口村本メ并其所ノ百姓中罷越候様ニ私共方よびニ遣申候へとも今以野口村のものともまいり不申候ニ付彌々越中の御山と存候ニ付私とも山志まい野口村までかへり候爲其書付仕相渡申候以上

正徳二年七月六日

尾張國あすみ郡

なかは村 太郎 右衛門 印

同 喜三郎 印

同 伊左衛門 印

同 彦左衛門 印

越中國西水橋

勘 左 衛 門 殿

同國內山村

平 三郎 殿

佐伯記録 正徳二年

覺

志なの、國野口村屋口彌三郎并其所百姓中もはりの木谷へおのく御越ニ付被罷越候様に先達テ右野口村のものともよびに遺申候へともたゝいま迄罷越不申志かれはおのくも此間御まぢ被成候へとも今以相見へ不申候それに付私共御山之義相かんがい山すじ見流申ニ彌々越中の御山に奉存候ニ付此山の内相志まい野口村まで罷出申候依之私ともかけおき候こや分不殘取よけ申ニ付これいごう越中御山の内へ罷越申しまじく候もしかさねて御山へ罷こし候ハバいか様とも越度に可被仰付其書付仕之所相違無御座候以上

正徳二年七月七日

尾張國あすみ郡

なかは村 喜三郎 印  
 同 太郎 左衛門 印  
 同 伊左衛門 印  
 同 彦左衛門 印

越中國西水橋

勘左衛門 殿

同國內山村

平三郎 殿

覺

一、小屋 四間六間 壹ッ

一、同 二間貳間下間 壹ッ

一、同 貳間小間 壹ッ

一、同 四間五間半 壹ッ

黒部奥山と奥山廻り役 中島

一、同 二小間 壹ツ

一、からうす 二から

一、六升なべ 貳枚

一、貳升なべ 貳枚

×

喜 三 郎 印

太 郎 左 衛 門 印

伊 左 衛 門 印

彦 左 衛 門 印

右の文書に依つて人数と云ひ小屋の仕掛けと云ひ食料方面の準備と云ひ山内の様子が判からぬと云ふ者共の仕業とは絶対に考へられぬ所ではないか。此等の覺書を添へた奥山廻り役の報告書を受け取つた藩廳は事件を重大視した事は想像に餘りがあつたろう。再登山には充分の人数を準備して徹底的に搜索處置せしめたのである、其顛末は彼等の報告書が面白く雄辯に物語つてくれる。

佐伯記録 正徳二年九月

重而小屋跡或立歸居申哉爲見ニ被遺候紙面寫

新川郡蘆崎寺村奥山之内針ノ木谷ノ峰信州御境目迄重而私共彼場所江被指遺委細見分可仕旨被仰付候罷越見分仕候處先頃尾張國之柚之者共針ノ木谷江罷越小屋掛仕板枇等致居申所西水橋勘左衛門内山村平三郎見届ケ申小屋を燒爲拂申跡相

遺無御座候重而立歸申躰ニハ今以相見不申候

一、右燒爲拂申小屋ハ壹町程川下ニいはな釣申中者居申體之小屋御座候ニ付其砌勘左衛門平三郎見出し潰置申候今般私共見分仕候處に最前潰申通に成居申重而釣ニ罷越候様子相見江不申候潰小屋之内相改申候所ニ逃而罷歸候則捨置申躰ニ而衣類米、塩、味噌、釣針道具迄茂捨置候處今以其儘に成居申候、然ハ立歸申躰ニ而ハ相見不申候今度ハ右小屋等も燒拂申候。先頃燒拂申小屋場所ハ貳拾丁程上見分仕候處針ノ木谷ノ西ノ方少平成ル所ニ四間ニ四間半ノ小屋壹ツ貳間四方ノ小屋壹ツ同谷東ノ方平成所ニ四間ニ八間ノ小屋壹ツメ三ツ屋根板取並外廻取拂柱棟木梁等其儘立置申ニ付今般燒拂申候此小屋之儀ハ古ク相見江楓板杯も批申哉とも見請申候小屋腰之石ニ寶永八年八月野口山と書記有之候へ共私共砂みかきに仕文字相見江不申様ニ消罷歸申候

一、先頃燒爲拂申小屋場所ハ壹里半程茂被罷越ル所迄參申所針ノ木谷ノ續ニ少平成所西方に九尺貳間ノ片ヤね小屋壹ツ御座候板くづ等ノ様子ハ古ク相見申候得共相考申候處當年中出シ小屋ニ茂仕候哉と相見申候則取潰燒拂申候。

一、夫ハ奥山御境目の峰迄壹里半程之間遺變之義無御座様ニ見請申候。

右二ヶ所之小屋之義ハ山ノ茂リ小屋際へ不罷越候得而ハ遠方ハ見不申候依之勘左衛門平三郎罷越候袖人足少々召連申候間左様之所尋出不申候今般ハ人足茂多ク召連罷越手分ヶ仕方々相尋申候故見出申候小屋燒拂申候以上

正徳二年八月十日

新川郡十村天正寺

重 右 衛 門

同郡奥山廻西水橋

勘 左 衛 門

同 内山村

平 三 郎

黒部奥山と奥山廻り役 中島

高 島 源 藏 殿

神子田 孫七郎 殿

この文書を味讀するならば信州者の盜伐は一朝一夕のことではなく、相當大規模に順次大膽に且用意周到に行はれ來たつたものと云ふべきである。彼等は山の茂りに隠れて作業して居た時は發見せられず、濟んだのであるが、遂に大膽に過ぎ針ノ木大道近く迄進出した爲めに加賀藩奥山廻りに發見せられ追放の浮目に會ひ小屋は總て焼却せらるゝの運命に陥ちて挫折してしまつたのである。

然し針ノ木谷の美林盜伐の利に味を占めた信州人は此後頻ば此の方面を騒がし加賀藩をして痛心せしめた事は常識的に考へられ得ることである。

次いで起つた寛保年中の盜伐事件は何う云ふ事件であつたか、只文書に信州から盜伐者が入り込み奥山御林を荒した事のみを記して居つて詳細不明である。此時は奥山廻役佐伯有度等が劔嶽の横ブナクラ越をして現地に急行したと云ふことが記録に見えて居る。「寛保元年七月廿二日ニ在所罷立早月谷ヲ罷登リ劔嶽東方越ルぶなくら越と申也。他ニ手帖ニ記置也」とあつて肝心の手帖が現存して居ないので事件の詳細が不明なのは残念に堪えない。奥山廻り勤方の上申書中にも「寛保年中以來上奥山ノ内へ他國者入込御林盜伐仕候義御座候由近年茂右躰の趣御座候ニ付」と寛保の盜伐を強調して居る所から察して、この時も相當の大被害を被つた事は推認するに難く

ない。之等の度々の盗伐に刺撃せられて藩に於ては寶曆年中藩の御用材木の切出しを實行したのであるが、結局越中の方へ切出しては嶮岨に制せられて至難の業となつて長續きせず、又信州方面へ拂下げては泥棒を家内へ引き入るゝの恐れなしとせず依つて僅かに越中の請負者に些少の拂下げを爲すに止つた。

次いで第三回に起つた安永の盗伐事件は長く喧傳せられた大盗伐事件であつた。殊に犯人の姓名を採つて其就縛の場所や盗伐の地域や其往來の山徑に三吉小屋場、三吉谷、信州三吉道、又は三吉嶽の名稱を遺存した程の有名さであつた。今日と云へども古い信州の案内者は赤牛三吉と云つて臚氣乍ら越中赤牛嶽方面のことを示すに使つて居るのである。上河内の嘉門次も越中方面の正確な智識と史實は全然譯つて居ない様子だつたが、漠然と三ツ嶽邊や赤牛方面を赤牛三吉と云つて居たようだ。今日其名稱の名残さへ皆無な越中側に比して彼信州側に少しでも残つて居るのは當時彼等に與へた影響が如何に深刻であつたかを如實に物語るものである。

此の盗伐は安永の初年頃から始まつたものゝ如く、安永三年八月頃には信越の國境の山々から松本町へ枇杷が大量に出廻ると云ふ風説が、薄々越中の方まで聞え奥山廻役の耳にも入つて居た事情も有つて其年の奥山廻りは特に綿密に注意して見廻つた結果、果然黒部大川中嶽谷下手の川筋に小屋四軒小谷へ這入つて又三軒を發見直に焼却したのであつた。

安永四年に入つて中嶽谷方面に依然として盗伐の噂が有つた所、折よく立山の御作事所へ御用材木伐木取締りに出張中の山廻役上市村八郎兵衛同山室村茂左衛門の兩名が人足を引連れ噂の高い上奥山へ急行し、遂に折嶽の一角で盗伐の者共を發見し逃げ後くれた信州安曇郡高根新村友右衛門俣三吉を召捕り、金澤の御公事場へ引き渡したのであつた。由來中嶽谷は立山頂上から眞直ぐに隅なく見渡される谷で快晴の日あたり信州盗伐者達の炊煙

が立山から遙か望見せられた結果、遂に正體を暴露せられ加賀藩山廻役に名をなさしめたのであろう。この三吉の自白に依つて大盗伐は安永二年からと云ふことが判つた。於是本藩は上奥山一帯が不斷に盗伐の不安下に在るものと憂ひ、即時後立山から南鶯羽嶽方面までの連峯を隔なく至細に見分を爲す様奥山廻役等に下令した。

この登山は早隠を要する爲めに捷路である早月谷を溯行し劔嶽を越え黒部大川を涉り後立山の山腹を巡り中嶽方面迄實に難行路をよく踏破したのであつた。中嶽へ登攀見分すれば豫想通り峯から三里程下手に再び盗伐小屋を發見し其四棟を焼き拂つた。其上米、枳板其他を押收したのであつた。この再登山に依つて盗伐小屋の汎んど總ては壊滅し盗伐者の足跡を斷ち大體上奥山國境方面の肅清は成つたのである。

犯人三吉は其後如何様に處分せられたか判らないが、長く牢中に呻吟したか或は直に重罪として斬殺せられ現地折獄附近に梟首せられたか定かにし得ないが、恐らく嚴刑を以つてせられた事は想像に難くない。この故に此の三吉の捕縛せられた場所は奥山廻りの間に有名なもので三吉谷、三吉小屋場は長く立派な地名として彼等のみならず藩の公文に迄使用せられたものである。

佐伯記録 安永四年十月

私共義爲奥山廻御用七月廿二日ニ在所罷立早月谷を罷登申候、去年八月頃を信州松本邊へ枳板等出申由承申候ニ付其節罷登申度奉存候へ共時節おくれ冬山に向候故罷登不申候、就夫今般仲間四人共に罷登申度奉存候處に石佛村平左衛門相滞居申候故私共三人併拙人足多召連劔ヶ嶽ヲ越黒部谷後立山之腰罷通りはりの木峠罷越御境目筋見分仕候處相替義無御座候然處黒部大川側ニ人之足跡有之候故其跡ニ付相尋候得、信州松本御領内しんきり村之者之由ニ而三人罷越居り申候段々詮義仕申候處いはな釣ニ參候由申候ニ付小屋之様子見分仕申候所ニ彌といはな釣と相見江申候向後參不申様ニ隠度



申渡相逃し申候、尤小屋も焼拂申候

一、右いはな釣詮義仕り候内信州之様子相尋申候所近年松本御領内高瀬谷と申山ニ而楓材木等仕丹波島川(犀川のことなれど源流なる高瀬川をも含めり)へ流出し申由申聞ニ付右高瀬谷之義ハ彼方様御領御山中嶽山之後と相考申候ニ付何として罷登申度奉存候處先年ハ眞砂子嶽火打ケ嶽中嶽鷲羽ケ嶽上ノ嶽此山々之義ハ難罷登候故薬師ケ嶽高山ニ御座候ニ付此峯ハ右山々見渡シ罷歸申候然所ニ右申上通高瀬谷ニ而材木並桶くれ等仕候ハ、若此方様御領中嶽山へ越申べく哉と無心許奉存候ニ付黒部川端ハ罷登候處兩淵共ニ高岩ニ而難通候故荷物等はりの木谷ニ残シ置人々飯米二三日分持參仕高岩等ニ而難通所々ハ結はしごを拵亭綱ニ而下ケ川瀬難越所ハ伐橋等を掛罷登漸く中嶽山へ取付見分仕候所ニ彌々私共相考候通御境目峯ハ三里程下り拾間五間程之小屋壹つ八間三間程之小屋壹つ四間ニ三間之小屋壹つ三間貳間程之小屋壹つ又四つ右小屋之内ニ楓さわら板長四尺ハ六尺迄幅九寸厚サ貳分程ニ仕六拾九連但壹連ニ付百枚宛外ニ米壹斗五升程並搦臼壹つ且又小屋之近所相尋申候所ニ捨置申體之物共別紙ニ書上ケ申通草之中所々に御座候人壹人も相見不申候私共儀段々罷登右小屋ハ拾丁斗下ニ而晝飯始火を爲焼申候故その燻りを見付隠ニ打捨逃申體ニ奉存候

一、右小屋所ハ山越ニ道裡四里。

先達御公事場へ御引渡被成候信州安曇郡高根新村友右衛門せかれ三吉義於御公事場ニ被爲途御吟味候處當御領黒部奥山へ立入材木等致盜伐仕候義ハ去々年来之義ニ而則其比ハ小屋建置候由申候旨左候へバ奥山廻り之者共早速見答可申處只今迄見付不申候義ハ油斷ノ體ニ相聞御尋御札被成候様ニ被思召候旨御公場ハ被仰遺候ニ付私共手前御尋之趣奉得其意候、奥山之義ハ前々ハ申上置候通難至極之場所多御座候ニ付通路難成所々ハ藤等ヲ以釣橋并階子等を仕立且又難罷越谷川ニハ切橋等ヲ掛通路仕候族ニ付例年秋ノ彼岸ハ來夏迄ハ雪中ニ而登山難仕夏中ハ雪解水ニ而黒部川難越渡御座候ニ付二百十日前後日和相見合彼岸迄之間年中ニ壹度私共仲間四人之内貳人宛人足八九人程宛召連登山仕ケ様ニ而野宿仕候ニ付飯米等入用之品々持運候分量御座候ニ付日數十五六日程宛上手御境目下手御境目等端年ニ相廻リ惣御境目之儀ハ二

ケ年ニ壹度宛見分仕廻リ口異變等谷之義ハ下山刻委細書付ヲ以申上候、且又近年盜伐之體相聞候ニ付入念ニ相廻リ可申旨去年改而被仰渡候ニ付飯米持運人足人多無御座而ハ難相越御座候ニ付御入用ヲ以増人足奉願則願之通被仰渡都合人足三十人召運去秋ハ一日數も相増廿五六日程宛去年今年奥山御境目筋相廻リ申候。是ヲ以谷々ハ不殘ハ難相廻御境目筋綿密ニ見分仕隔年ニ相廻リ申候右之趣ニ付去々年之儀ハ下手御境目相廻リ候ニ付當年盜伐仕候中獄谷之邊相廻リ不申候去年奥山御廻リ候砌リ右中獄谷ノ邊見分仕候ヘ共小屋等相見不申候中獄谷ガ七入り下手筋川縁ニ去々年掛置候體之小屋四軒并ニ伐木跡且又同山谷之内去年相建候小屋三軒□物之棟杯御座候、而燒拂申候當六月右中獄谷之邊盜伐之體相聞候處幸御作事所御材木爲御用御掛置被成切橋御座候ニ付右御材木小屋ヘ相詰候山廻上市村八郎兵衛同山室村茂左衛門等人足召運罷越三吉召上リ并小屋等燒拂申候且又今年奥山廻之儀ハ格別上手御境目筋相廻リ候様被仰渡當六月廿七日登山仕候御境目筋其外谷々見分仕候指而相替義無御座候八月廿日下山仕候勿論其時々每具ニ御書付ヲ以申上置候、尤當御領ガ奥山御境目筋相廻リ候義ハ艱難至極之谷々峯々打廻リ候ヘ共信濃路通ガ中獄谷之邊ヘ罷越候義道程も左而已無御座候通路仕安體ニ付盜伐仕候義上存候、私共奥山廻之義油斷之筋も御座候様ニ被仰渡候ヘとも且而油斷仕候譯柄にては無御座候右委曲口上書ヲ以申上候以上。

安永四年末十月

|         |   |   |    |
|---------|---|---|----|
| 奥山廻り三ヶ村 | 長 | 兵 | 衛  |
| 同 石佛村   | 平 | 兵 | 衛  |
| 同 高月村   | 兵 | 三 | 郎  |
| 同 山室町村  | 茂 | 左 | 衛門 |

荒木 善太 夫 殿  
渡邊 權 佐 殿

右の長い上申書に依つて事件の前後内容が明確に了解せられる。この事件に依つて三吉が斷罪せられた結果信

州方面へ甚大な影響を與へたらしく、今後上奥山筋の盜伐が可成り長く止んでしまつたのである。

加賀藩の方でも毎年見廻る奥山廻役が盜伐を發見出來ず、却つて立山の御作事所へ出張して居る平山廻役が偶然からか犯人を捕縛するといふ譯で多少奥山廻役を叱責して見たものゝ、其山廻りの貧弱な小人数の形式的なことでは何れとも爲し難い點が認められ、彼等の意見具申を入れ、柚人足の数も三十名位引き、且し山中所要の日數も二十五六日間位との規定を確立したのであつた。

この人数と日數で細心に見分を施行した爲め、安永以降は上奥山の國境線上の峯々は汎んど總て彼等に依つて踏破せられたと云つてよいと思ふ。

三吉盜伐事件は實際奥山廻役に取つても其責任上思想上に蒙つた刺撃は大きいものが有つたと同時に其制度上にも至大な影響を與へたものであつた。

この盜伐の結果は三吉の斷罪だけでは濟まなかつた。奥山の深谷中に切り倒されて居る材木は何處分したらよいかと云ふことが御算用場の問題となつた。これにもいろいろと論議も戦はされた様であるが、御縮り山の内年ら民間へ拂へ下げる以外方法が無いと云ふことになつた。然かも越中方面は到底搬出の見込なく、信州方面へ拂下げの止むなしとの結論に達したのである。是れでは丁度盗み損こなつた泥棒を再び家へ引き入れる様なもので甚だ不締り不得策なことで、地元奥山の山廻り役や十村等の反對が相當強よかつた様であるが、老臣の會議から藩公の耳に迄達して遂に差支なしと云ふことに決定したようである。此時の買手は信州野口村の豪家西澤九郎七である。尤も此の人は材木など手廣く取扱ひ悪く考へれば、信州盜伐者連には多少にかゝわらず息を掛けて居ると見られる人物である。この人物に盜伐の材木を拂下げるとは意外千萬である。これでは盜伐者が再び頰冠りして入山する

のは當然だと云はねばならぬ。

知つてか知らずでか拂下げは實行せられた。

佐伯記録 安永四年

黒部奥山盜伐の場所御拂木ノ儀ニ付信州之者願之趣御作事奉行申聞段々遂詮義以上別紙寫之通先爲試御拂之儀承届御作事奉行申渡候尤買入登山之節へ伐出率行指添見届候様ニ申渡度候條被爲得其意指支不申様ニ可被御心得候以上

十月二十四日

横山 河内守

佐伯記録 安永四年

覺

貳百三十拾本 根伐櫛 但シ立木壹本ニ付貳拾貳匁宛

代金百兩

内金三十拾兩 當十一月廿日切隠度金澤表江持參上納仕候

金四十拾兩 來申年七月十四迄右同斷

金三十拾兩 同 九月十日迄右同斷

右之通約東打極信州向寄ニ而野口村へ伐出候、尤來申年一ヶ年且又當十一月廿日切金子持參之砌本切手取替奉申上候以上

未 十月

願主 信州松本野口村

西澤 九郎七

この成績は何うだつたか譯らぬが、以後信州側へ材木拂下げの事實が少ない所から見ても、利益問題でなく結局取締り問題で許されなかつたものだろうと思ふ。盗伐後日譚であるこの拂下問題など見ても安永二三年の盗伐が如何に大きなものであつたか推察出来、興味深いものがある。此以後藩の方では盗伐者を出すことは威信上面白くなく、時としては隣藩との事端を惹起する事になるは勿論、黒部と云ふ秘境の不取締りともなると云ふ見地から諸種の手段を講じて之が防止に躍起となつたのである。

文化十一年城川哲周が奥山に藥草を採取したいと願ひ出たのを許可したのも、同十三年丹土辨柄の湧出を申し立て、入山を許されたのも、畢竟するに越境盗伐者の監視に之等の入山者を利用すると云ふ點を覗つたものにならない。又奥山出入口の村々へ對し油斷なく山番致す様との文書を授けて居るのも之の用意に外ならないと思ふ。

前記三大盗伐以降は一寸大盗伐の記録は見當らないが、小被害は絶え間がなかつたろうと思ふ。寸注目させられるのは文化十年の盗伐である。この事實は繪圖の註記に依つて確認せられる。

新川郡御縮山之圖 文化十一年上ル

「中岳川邊都而谷間廣ク諸木多御座候所信州三吉道ヲ盜伐ニ參リ申様子ニ而橋杯も有之大なる小屋跡あり去年焼捨申形相見之鋸末深七八尺斗宛も有之候併番人相立候故か當年は壹人も相見不申由山番杓共申聞候」

「ハリの木邊當時大形盜切ニ仕宜キ材無之由ニ而三四年も相立申古小屋御座候」

この註記を見れば文化十年前後の盜伐も相當なものがあつて大分神經を腦ましたらしいのであるが、城川哲周の入山中山番を立て、監視の目を光らした結果以降暫く平靜を取り戻した様である。

信州の方面でも越中側の美林に垂涎して居るものゝ其取締りの嚴重さと其實力行使には如何とも手が出せず、加賀藩側の探査の手が迫ればいち早く逃走してしまふのが唯一の策であつた。今日でも越中舟見町の脇坂家に當時盜伐者から沒收した鍋や調度品が恰も戦利品の様に所藏せられて居るのを見てもうなづかれる次第である。盜伐はかくて何時の時代にも絶滅の望みなく屢ば小ぜり合ひを演じたのであるが、遂に大規模の盜伐もそれに伴ふ大檢舉も見るに到らず明治御維新となつてしまつた。

藩政時代最大の盜伐事件としては前記の三吉事件が最も大きく影響も從つて深刻を極めた。繪圖上にも長く三吉岳、三吉谷の名を止め信州高瀬入り林道に迄三吉道の名を残した。この結果加賀藩の取締りは嚴重な上にも嚴重さが加はつて、爾後如何なる人士の立入りにも加賀藩の實力を以つて制限を加へた結果、後立山連峯には長く人跡を絶ち高山信仰の對照物たる神祠佛跡を仰ぐことすら叶はぬ、日本國中でも稀有な高山となつてしまつた。然もそれが却つて今日世人に北アルプスの印象が若々しく輝き、人跡未到と云ふ文字にふさはしい境地を形成して居ることを思ふと、些か乍らそれに關聯を持つ奥山諸事件もあながち無駄事では無かつた様な氣がするのである。

#### 四、山奥役廻の人々

秘境黒部奥山を守り歳々年々奥山廻りを勵行して藩是の遂行に努力して來た奥山廻り役には如何なる人々が當つたか。又其人々の家系、事蹟、性は如何なるものが有つたか。又彼等に伴はれた袖頭人夫には今日の長次郎平藏にも比すべき功績の人士が無かつたか。是等は此際是非とも明白にして置かねばならぬ問題である。

黒部奥山の如く廣大にして深遠なる秘境を守り通すには絶大の根氣と努力が必要であつて、守衛の責任を負ふ奥山廻役の勞苦の並大底で無かつた事は誰れしも信じて疑はぬ所であるが、之に當る人々は前項所々に於て僅かに姓名のみ知つて其人の全容は知悉せられないので、今少しく詳しく之等に就て語られなければならない。然しそれとても時勢の變遷に伴ひ各家門に興亡の變化あつて其の由緒書や其人々の性行事蹟を記録したる文獻は漸次湮滅し去つて今や幾何も殘存せぬ状態である。故に不満足乍ら本項も又遺存した記録に依つて貧弱な記述を試みかねばならぬ仕義である。

松儀家は代々越中新川郡浦山村を領した名家であつた。戰國の末葉傳右衛門の祖父兵庫は越後の上杉謙信と于戈を交へ一族覆滅の悲惨事を喫せられたと傳へて居る。是より兵庫は國を去つて大和國吉野山に走り有縁を求めて遂に僧となつて永樂坊と號し淋しく山中に一生を終へたと云ふことである。兵庫の子重之進は生れ故郷忘れ難く再び故郷浦山村に還住し傳右衛門と改め弓矢を棄て、歸農したのであつた。其子傳右衛門は即ち加賀藩初代利家侯に見出され其諮問に答へ賞美の書簡まで賜つた事は前章に詳しく述べた如くである。

寛永六年、加賀三代利常侯越中浦山村に放鷹の砌り、里人から往古家持卿この地熊野社に一夜の宿りを求められた折り節し夜闇に鷄鳴を聞かれ「鷄の音も聞こゆるさに夜もすがら月より外に訪ふ人もなし」と風懷を洩らされたに依つて、今は之にちなみ此の邊り鷄野と呼ぶると云ふ由來を聞かれ與ある事に思はれ、鷄野亭と稱す

る御旅屋の造營を傳右衛門に命ぜられ兼ねて其守役をも命ぜられたのであつた。奥山の智識であつた傳右衛門はこの頃から利常侯の異常の信任を得たものゝ如く、寛永十七年には黒部奥山の本締内役と云ふ責任ある役儀を命ぜられたのであつた。この傳右衛門は元和の頃か内山村に立籠つた浪士を鎮撫したと云ふ功績も有つたと言傳ひて居るのである。之等の功に依つて藩公からは屢々時服物品を賜ひ又御扶持を加恩せらるゝ等、特殊の恩遇を賜つて居たのである。この傳右衛門は正保二年に没し其子三右衛門は父の跡を繼がず、命ぜられて富山御領の十村役となつたと傳へて居る。其後愛木橋落成し浦山村が本街道上の重要な宿驛となるや、鷄野亭は増建せられ本陣御旅屋として指定せられ松儀家は代々其の御旅屋守として勤仕したのであつた。又屢々平山廻り役や奥山廻り役を兼帯して廢藩に及んだのである。

佐伯家は代々蘆畹寺立山中宮の祠官である。元來蘆畹寺村は總て立山開基佐伯有賴卿の末流にして佐伯姓を稱し立山に奉仕し二十四坊三社家に別れて居つたのである。

佐伯十三郎の父三右衛門は立山方面奥山の權威者として三代利常侯の重命を受け、慶安元年本藩から特派せられた三奉行を案内して信濃境針ノ木峠迄の測量を完成し續いて愛木の奥わかべ、つりかね、つか山までも踏破して黒部奥山の委細を隅なく候に上申賞美せられた事は前項に屢々記述した如くである。この十三郎は仲々政治的手腕を持つて居たらしく彼は承應二年には二十俵の御扶持を頂き新川郡奥山廻りを勤め、寛文六年六月百姓代官を加へられ延寶二年には十村御扶持人と榮轉し郡の詰所へ出頭して郡方百姓の諸裁決をする身上となつた。續いて延寶三年春から新庄、文珠寺兩組の十村役をも兼帯し金澤表御算用場の詰番まで仰付けられと云ふ百姓として



は極度の榮進ぶりである。又彼は寛文元年伊勢参宮を遂げ歸途京都に立寄り吉田殿の吹擧に依つて從位五大隅守佐伯本雄と任官したのであつた。實に當時十村役中でも彼の如き名譽と富力とを兼ね具へた者は稀れであつたと云へやう。於是此の年奥山廻りの方は伴の五左衛門に譲つて彼は専ら百姓代官の方へ力を致したのである。山廻りの功者のことに付いては彼よりも彼の父の方が優つて居たと云はれて居る。

夜話抄 寛文二年今枝内記

一、越中立山の麓芦崎といふ所あり其百姓某といふ者に微妙院殿（前田利常）より御扶持かた被下し所謂知たる人なし然所に彼百姓今度相果候ニ付而其子細相知候。其委細は於越中此者程越中山之案内を知たる者なし此者果候後は山の案内何れも不鍛鍊に候よし

この記述から見ると十三郎が父より不鍛鍊らしく聞ゆるが、慶安から二十餘年も父と共に山廻りを勵行して居る彼れに不鍛鍊の筈もない。又御扶持も彼が頂戴して居た譯だから前記の記述は父子混同して居る様である。十三郎は豪毅にして潤達、交遊も廣く和漢の典籍にも多少の興味を有して居た如くである。天和三年大淀三千風が立山登山の途次彼の許に笈杖を休め交歡を遂げて居る。

日本行脚文集 元祿二年三千風撰

（前略）地獄の咒光明眞言の徳風をふかせ餘波おしくかへりて麓の旅舎佐伯氏につく時に天和三ノ大暑下旬頂雲軒三千風記し畢、かくて主本雄翁の里屋敷米道村にいざなはれ珍饗にめでて二日いこひ神書のそこそこ講談し山の縁起など致し翁も別杖の柳にぬさつて、

身はかくて別れぬとも本來の

空の心は不變同座に

黒部奥山と奥山廻り役 中島

返 立山神司 佐伯氏本雄

別てふ事はならぬ神心に

生れぬさきの物語する

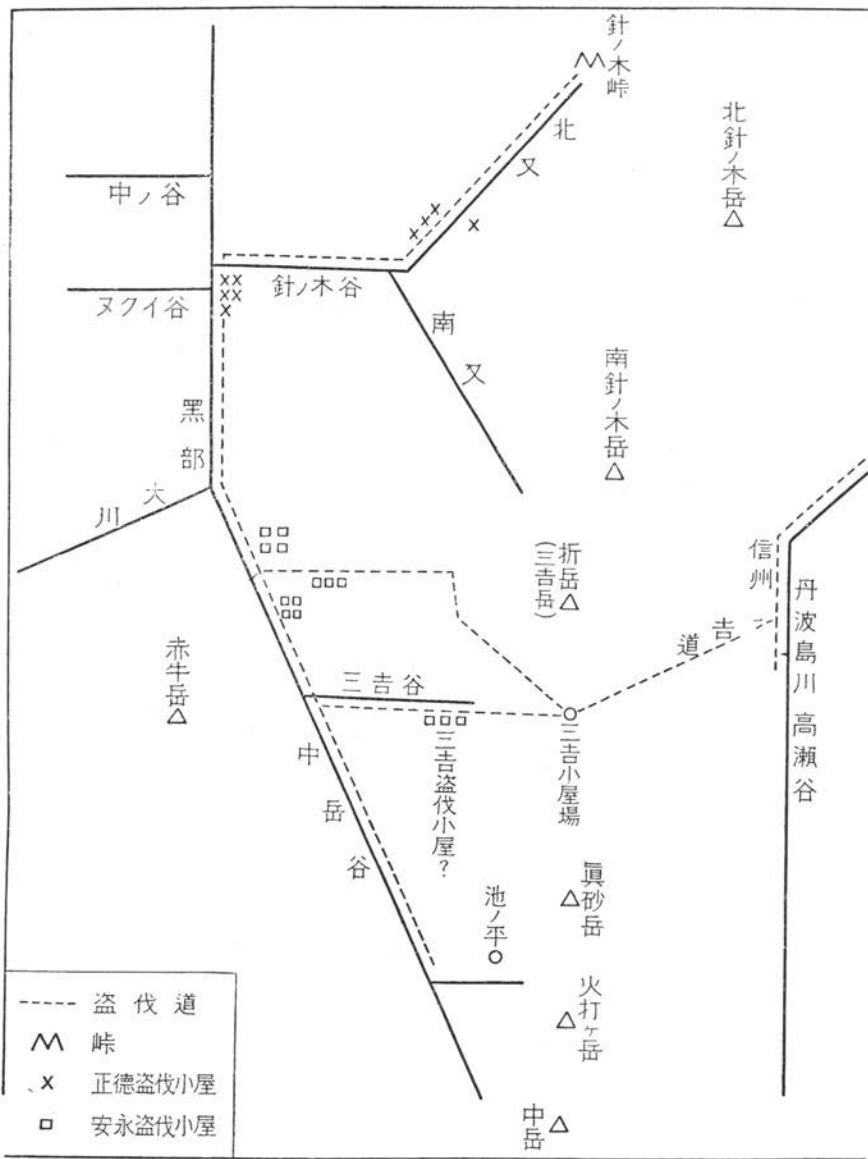
十三郎の子五左衛門も父を繼いで奥山廻り役から十村へと榮進して行つた。この子孫は立山祠官としては代々大隅守を稱し今も村人は彼の家を敬稱して佐伯從五位と呼び馴らして居るのである。

齊木村佐伯家は立山開山佐伯有頼卿の子有直の直系で世に新川郡布施郷に住んだ名家であつた。

延文年間松倉城主権名氏と姻戚關係たる事に依つて其所領を交換し布施より吉野に移住した。其後慶安年中桃井直常の兵火に災され又百餘年を経て應仁の頃にも頻りに戦禍に遭遇したのであつた。然るに戦國末葉に到つて上杉謙信の越中侵入に抗し頼み切つたる権名氏を失ひ剩へ所領の過半は喪失すると云ふ困苦に際會し、爾後僅かに山間の一隅に屏息するのやむなきに到つた。次いで佐々成政入國に依り佐伯家の名門たるを憫んで即ち齊木村を所領として與へられたのであつた。元來齊木村は元と佐伯村と唱へたのであつたが、佐伯氏の氏姓と混同する爲めに何時しか齊木村と改めてしまつたのである。

佐伯家三十八世は新左衛門有義と云ひ慶長年中前田利家侯より鷹野勝手次第と云ふ書札を下附されて居た。之れから代々當主を新左衛門と稱することゝなつた。

享保元年十一月第四十二世新左衛門有時山廻役を命ぜられ、次いで九年には十村役へと榮進した。四十三世新左衛門も十村役を勤めたのである。四十四世新左衛門も安永七年月奥山廻役を命ぜられたと記録されてある。四



上奥山盗伐小屋位置概念圖

十五世は新之丞と稱し寛政十二年父新左衛門の跡役として山廻役を命ぜられ天保五年奥山廻加人と進み同十二年に退老して山廻列となつた。此の間實に職に在ること五十年稀有の精勵家として令名噴々たるものが有つた。殊に性行恪勤朴直であつて公益を想ふの念深く、人々の憐愍する山詰番も奥山廻りも進んで勉めると云ふ底の人物で、同僚上下の信賴の厚かつた事は舊記古文書中にも隨所に其片鱗が見出されるのである。

佐伯記録 天保十二年

一、金五百匹

齊木村新之丞

右其方儀五十ヶ年全實躰に相勤候ニ付今般爲御賞美右金高被下之候段御用番年寄衆より被仰渡候旨御算用場申來候ニ付遺之候事

天保十二年八月

四十六世有次郎は天保十一年七月奥山廻當分加人を命ぜられ十二月奥山廻役兼山廻役を命ぜられたのであつた。次いで彼は嘉永五年八月には新川郡新田才許並に蔭聞役を命ぜられ萬延元年に病歿したと傳へて居る。四十七世新左衛門は嘉永二年父の山廻役の名代役を命ぜられ文久元年三月には山廻役同二年には奥山廻り役兼帶を命ぜられた。彼は明治三年の山廻役の廢止を眺めて翌明治四年壯齡の四十歳で病歿した。

今日殘る佐伯文書や記録は多くこの四十六世有次郎、四十七世新左衛門のものしたものである。之等の記録から眺めて彼等は奥山に興味を持ち奥山廻りを樂んでよく氣力を傾けて精進したことが認識せられて愉快である。

脇坂家は越中舟見町に在る名門である。

舟見町は黒部川愛本橋の東方半里程の所に在る一小村落に過ぎないのであるが、往昔は愛本橋を通ずる本街道此の地を通じて居ることに依つて宿驛として頗る繁盛して居たものである。此處には藩侯の御旅屋があつて今も雄大な空濠を持つた廣い境域の遺跡が存在するのである。

脇坂家は元來は諸侯であつた脇坂安治の一族である。越中脇坂家の祖先は慶元兩度の役に大坂方として奮戦した爲め遂に武士として世に立つことを許されず、有縁の加賀藩に亡命するの止むなきに至つたと傳へられて居る。加賀藩に於ては三代利常侯の手厚い被護を受け、初めは礪波郡内嶋に松杉を植えたのであつたが、其處は故あつて長く安住を許されず子孫は新川郡明日<sup>アズキ</sup>日の徳光に轉じたのである。此處に暫く世を忍ぶ内に舟見の御本陣御旅屋守四郎次郎が故あつて除かるゝや拔擢せられて其後任に就任したのであつた。即ち内嶋屋御本陣と云はるゝものがこれであつて、爾來數世御旅屋守兼帶の奥山廻り役をも勤めて明治御維新に至つたのであつた。

この脇坂家で一番の達者は脇坂太郎右衛門である。寛政十年奥山廻り役を拜命してからざつと四十ヶ年近く天保十二年頃まで奥山廻りを勤めたのであつた。故に奥山の一木一草に至る迄太郎右衛門は知悉して居たと稱さるゝも故なき事ではないのである。

文政五年八月には加越能三劔測量に邁進して居た石黒信由翁を迎へて、奥山各所地點での測定方位を報告し其製圖に協力したのも彼れ太郎右衛門であつた。三劔測量圖籍に載つて居る大連花にて見る方位、後立山にて見る方位、猫又峠にて見る方位、薬師ヶ嶽にて見る方位、鷲羽ヶ嶽にて見る方位等は總て彼の實測に依つたものであることは信由翁の手記でも明らかなのである。

道程志らべ方日數之覺 文政九年十二月石黒信由

文政五年

- 一、四十二日。午三月十一日が 五月廿日迄ノ内 新川郡婦負郡等志らべ方
- 一、十二日。九月十八日が 同廿九日迄

立山御縮山下繪圖等志らべ方

舟見村太郎右衛門方

諸郡道程調理方繪圖帳面等當用覺帳 文政五年七月 石黒信由

- 一、立山後御縮山舟見村太郎右衛門と相談いたし下繪圖相調可申事

新川郡立山之後御縮山分間繪圖 文政五年九月 石黒信由

但舟見村太郎右衛門方ニ於テ圖之

且又御縮山所々において太郎右衛門等視申方角野帳面は道程志らべオ野帳之内へ入第十六と名付け別に有之候。

即ち石黒信由翁の有名な三務郡分繪圖等に於ける新川郡奥山の部分は、この太郎右衛門との合作と稱すべきものであらう。之れより推斷して行けば信由翁の依囑を受けた彼は後立山即ち鹿島槍も現今の五龍、唐松、さては爺子、赤澤、針ノ木等の諸峯をも文政初年に於て殆んど餘す所なく登高踏破したと云つて差支へない様である。かくては後立山連峯の初登攀の年代も其氏名も多少筆を改むべきではないかと思ふ。太郎右衛門の後系子孫に奥山廻りたりし者に長右衛門、長藏、義平等の氏名が見え何れも累代の奥山廻り役として活動してゐる。この中でも長藏は俳句に興味を持ちかつて大蓮花山を越えて「三ノ國をひとこえにしてほととぎす」と云ふ佳吟をものし

て奥山廻りの壯快を誇つたと傳へて居る。

この脇坂家は長く奥山廻り役として活躍した家柄丈けに其舊記や記録も頗る注目すべきものが傳承されたが特に吾人をして興味深く眺めさせられるものは、奥山に於て盜伐者や岩魚釣の密行者から沒收した鍋や釜の類が戦利品然として收藏されて居り、或は奥山の各所で採取された奇石鑽石水晶の類が祕藏されて居ることである。これは同家の活動を今日に物語つて居るもので頗る愉快に堪えないものである。

浮田家は備前浮田家の末流を汲むものであると傳承されて居るが、同家の由緒記録は筆者に被見を許されて居ない爲めに其正確な内容は筆にすることを得ないのが残念である。只古文書等に現はれて居る二三の氏名を掲げて御參考に供して見たい。

太田本江村宗兵衛とは元禄初年からの各舊記に散見する所である。同人の氏名は寶永五年の文書に迄至つて居る。其以後は子孫であらう所の善左衛門が繼ぎ寶曆明和の間には覺右衛門の名が見える。文政二年太田本江村善左衛門奥山廻兼帯を命ぜられた記録があり、弘化安政の間には奥山廻役太田本江村覺右衛門の名が見える所からしてこの浮田家は累代奥山廻りに精進し相當の貢獻を爲した名門といふことが判る。

この中でも元禄時代の浮田家に取つて奥山廻役の初代とも云ふべき宗兵衛の功績が最も大であると云へやう。宗兵衛は在職二十七年に近く元禄末年には繪圖方御用の御褒美の御代官役迄賜つた練達名譽の士である。今日殘つて居る岩城記録も佐伯記録も皆な總てこの宗兵衛留書と其子孫たる宗兵衛の留書を轉寫したものに自分達の見開した多少の事項を附加して出來て居るに過ぎないものである。吾人奥山を研究する者に取つては實にこの宗兵

術留書が根幹を爲すものであり、之れが無かつたならば此の一篇を成すに殆んど不可能の想ひをせねばならぬであらう。累代の奥山廻り役の家柄と云ひ然して又後世に立派な記録を残して居てくれたと云ひ、本書に於ては實に逸すべからざるの家柄である故に由緒舊記被見の機會を得ないが特に家名を掲げて敬意を表すものである。

伊藤家は越中魚津町の東一里餘を距つ鳥尻村の名家である。其の代々は、刑部又は刑部左衛門と名乗り鳥尻の刑部と云へば新川郡でも第一の名門中の名門として聞えた家柄である。

慶安初年三代利常侯が藩内の武士に領地を興へず、農民の貢納を直接藩倉に入れしめ武士には此の藩倉より扶持米を交附すると云ふことにして、武士と農民との紛争を防止し、且又三國の各所田地の良否に依つて貢納の等差を定め、農民の勞力を平均すると云ふ御改作法の施行と云ふ大業を農家として參畫を命ぜられ、親しく加賀國小松城に伺候し朝夕侯の諮問に應じた名譽の士であつた。

如此き行政上の功勞者であつた刑部丈々に藩の待遇も極めて厚く慶安四年には御扶持人十村となり明暦元年には百姓御代官では最高位たる加越能三ヶ國十村頭を仰付けらると云ふ榮進ぶりである。

加能越等御扶持人由來記 鳥尻村刑部由緒

微妙院様御代慶安元年私親嶋尻村刑部十村役仰付御收納米御代官被仰付御用相動申候所ニ慶安三年ニ新川郡十村之内御郡之様子委細存候者御用之旨山本清三郎殿江被仰出候所親刑部義ハ親代々も年久敷十村相動御郡之様子委細ニ存旨被仰上候所親刑部小松江致爲乎御尋儀委細申上候慶安四年ハ御郡段々御開作地ニ被仰付候砌圖リ等被仰付候所ニ仕樣官旨被仰出同年四月伊藤内膳殿山本清三郎殿御取次ニ而親刑部御納米之内現米拾俵拜領仕御扶持人十村ニ仰付難有奉存候



(中略) 明暦元年於小松品川左門殿御取次ニ而御次之間御目通り江被爲召出難有被仰出候て金小判拾兩さあ御單物壹ツ拜領仕申候中村其節處悅老御取次ニ而刑部義三ヶ國十村頭被爲仰付渡旨伊藤内膳殿山本清三郎殿江被仰出其旨親刑部ニ被仰渡候則年頭之御禮式三ヶ國座頭被仰付候 (下略)

この後刑部家は代々十村役を勤めたのであるが藩末には奥山廻り役も數世勤め明治に際會したのである。

現時地籍紛争の中心點たる黒部川岸鐘釣温泉は藩末この刑部が拜領所有して居り、彼の居村たる島尻村よりは三ナビキ山を越して温泉迄道路が開設されて居た。この爲め此の温泉が片具谷平澤村領か島尻村飛地なりと主張する論據が出来上つたのである。筆者の持つ古い繪圖にも鐘釣温泉の湧泉岩壁上に慶應三年奥山奉行辻安兵衛、奥山廻伊藤刑部と書記してあるものがある。辻安兵衛は奥山廻足輕で奥山奉行などではないが、これは刑部達が山廻りの際頻ばこの湧泉に遊んだ事を物語つて居る譯である。

この刑部家には奥山廻り役の家柄を示す有名な傳説がある。其概略を記して見やう。

刑部家の祖先に龍右衛門と名乗る人が有つた。この龍右衛門は有名な奥山廻役として後立山、大蓮花を踏破しよく國境を守衛した人であつた。この龍右衛門の妻はお新と云つて非常な嫉妬の強い女で流石の龍右衛門も之れにはほと／＼手こずつてしまつた。彼は何か適當の機會にお新の手を脱れて他國へ走り愉快な生活をして見たいと何時しか考へる様になつた。或る年の夜猛烈な大風が新川郡を襲つた。屋根の石は飛び草木は唸りを立て、裂け倒れた。龍右衛門はお新を呼んで「お新、あの音を聞いたか、俺はお山の山廻り役として何としてもお山の御林を守らねばならぬ。これから出掛けて行つて見廻る。」と云つて彼は用意もそこ／＼烈風を物ともせず出掛け行つた。お新もこれには一杯喰はされたが程經て龍右衛門の部屋に行つて見れば手廻りの何一つない藻抜けの

殺なので大いに怒つて「おのれ我夫の偽り者奴」と棲端し折つて夫を追ひ慕つたのであつた。彼等は追ひつ追はれつ祖母谷を溯つたが丁度祖母と祖父の谷の岐れに來た時、龍右衛門は右手の方祖父谷へ這入りお新は左手の方祖母谷へ這入りおのく精根つきて谷底へ落ちて死んでしまつた。龍右衛門の這入つた谷を祖父谷と云ひお新の這入つた谷は祖母谷と云はれ、お新の死んだ場所からは嫉妬の青い焰が吹き出して所謂祖母谷の地獄が出現した。以來この祖母谷の水は永劫に混濁した水を流し出して居ると云ふことである。

この祖母谷の傳説は又刑部家の傳説でもある。この故を以つてしても奥山廻り役の家柄として刑部家が如何に有名であつたかよく理解せられやう。

石黒信由翁の事蹟は實に偉大なものが有つて記述すれば此の一冊を盡くしても尙ほ能くしめたるはぬ所である。本章に於ては只概略の事蹟と繪圖作製上の一二の事項のみ記述したいと思ふ。

信由翁は寶曆十年十二月越中國射水郡高木村に生れた。通稱を藤右衛門と呼び高樹又は松香軒と號した。翁は幼時より算學を好み天明二年富山の關流の算士中田高寛の門に入り爾來十五ヶ年研究倦まず終に關流算學の蘊奥を極はめた。又測遠術を宮井安泰に天文學を西村太沖に學び當時算數學者として三國に比なしと稱されたのであつた。

如是き信由翁の才幹は永く野に埋まるを許さず、寛政七年射水郡繩張役に任ぜられ次いで新田才許役に榮進したのであつた。於是多年蘊蓄した學殖は發揮せられ加越能三國の荊棘不毛の地を開拓し又永年境界不明の地に解決を與ふる等其功績實に偉大なるものが有つた。文政二年正月遠藤高環等の督督の下に加越能三務繪圖作製の内

命を受け、六十歳の老齡に鞭つて着手爾來勉勵慘ます七ヶ年を経て三務郡分繪圖や三務大繪圖を成就し、其後又十ヶ年を費やして天保六年には野帳を清記したる圖籍十二冊をも提出したのである。

この繪圖作製は信由翁の晩年最も苦心せられた所であつて、其修學せられた學問を實際に應用せられた繪圖作製は實に正確綿密であつて周到なるは驚歎に堪えぬ所である。之等の手記野帳下圖等は今も高樹堂文庫の四箇の大算笥に滿ち溢ふれて居るのである。信由翁のこの努力に依つて文政時代早くも三務繪圖は略々今日に努らない正確なる繪圖を成就し得たのである。

翁の測量に拂つた努力は如何、其手記々録に就いて其勞苦を尋ねて見れば、文政二年には百三十五日、文政三年には百七十日、文政四年には百三十六日、文政五年には五十四日の實地踏査を試みて居らるのである。又金澤の繪圖方への出仕の日數も文政二年より七年迄百十一日に渡り其上製圖に要せられたる日數の如きも文政二年四月から文政七年二月二十七日迄千餘日も費して居らるのである。然らば翁の費された日數の合計は實に千六百餘日に達するのである。然かも文政七年四月から八年六月六日迄三務壹國壹枚宛の組分繪圖、村名帳、郷庄分御繪圖等作製に又々二百廿日を費して居らるのであるが、實に此の間の苦心辛勞は筆紙によくし得ない所である。

三務測量圖籍十二冊を奉つたのは天保四年即ち翁の七十四歳の時であり、七十七歳の歿年の年には渡海標的一卷を出版し増補加越能三務大路經六卷の脱稿を見ると云ふ精力振りであつた。

翁は算學を以て一世に鳴りたる士であるが、大正六年十一月贈從五位の御沙汰あらせられたのは實に翁の殖産興業測量製圖等實際に社會に貢獻したる點を嘉せられた結果と聞こえ甚だ吾人を感激せしめたのである。

翁の奥山に對する功績も相當に大きい。今日翁の製作せられた文政五年の立山之後御縮山之圖並に三刃測量圖籍中新川郡黒部奥山中郡等は以つて奥山研究の基準となすべきものであらう。又翁は新川郡測量に際し各地に於て削立遠望せらるゝ後立山連峯の諸標點の正確なる方位を測定せられ且名稱をも聞き正されて繪圖上に決定記入せられた事は實に吾人奥山研究者に至大の光明を與ふるものである。翁の登山せられなかつた後立山連峯の高山深谷の地形名稱は、文政五年九月十八日から二十九日迄十二日間奥山廻り役の老練者舟見村の太郎右衛門方に逗留して同人に諮問して製圖の正確を期された事などは敬服せられることである。只太郎右衛門が測遠術等に疎く爲めに些少の誤差が繪圖上に現はれて居ることは致し方も無い事である。

信由翁の子孫信易、信之、信基等皆著名の算學者たると同時に測量家であつて其作製した繪圖も數多く記述すべき事も多いが只今は省略して置きたい。尙又信由翁の事蹟今少しく詳細に述べべきであるが、本項に於ては總て省略したが他日機會を得て今少しく述べて見たいと考へて居る。

## 五、奥山廻り役の記録と繪圖

黒部奥山に關する記録繪圖の現存するものは實に稀れである。もう少し残つて居る筈と思はるゝ前田侯爵家にさへ案外一二より見當らぬ様である。是等は長い年月の中に紙魚の被害や棄却散佚の災害を受けて次ぎ／＼と湮滅してしまつたものであらう。尤も奥山の繪圖などは輕々し敷く人目の付く所へは出せず秘藏して居た結果忘れられたと云ふ點も多いことだらう。今日吾人の耳目に觸れて残つて居るものは僅かに舊記を書寫したものや二三の奥山日記や五六枚の奥山廻り役等の作製したと認めらるゝ繪圖類に過ぎない。之等の小さい窓から漸く覗き込む

昔の奥山の諸相は齒がゆい位い見落し勝ちのものだ。然し多少でも奥山が我れ〜に窺ふことを許されて居るのは之等の遺存した小冊子のお蔭で實以つて有難いものである。この小冊子は奥山廻り役等が事務上の必要から描寫したもので、累代業を繼ぐ兒孫に授くる秘書として秘藏のもの故勉めて誇大を避けて眞實を書いて居るので其價値も特に大きいと云ふべきである。繪圖の如きも眞實を盡くに並々ならぬ苦心の跡が見られるのである。鯨岳の如きも享和二年の奥山繪圖に於ては實際の形狀を寫生的に畫いて居て、彼の南畫式の御幣の様な峰の描寫を避けた點など實に敬服すべき態度である。日記々録にしても着實な書き振りであることは前章等に種々掲出せられた所に依つて見ても承知せられる所であるが、夫よりも彼等が奥山廻りの困苦さに對し一言の弱音も吐かず愉快に一意専心奥山の保護に未到地の探求に向つて努力を傾倒して居る點が、歴々紙背に溢れて居るのを感知せられて愉快に堪えない。只當時の智識として科學的なものを缺いて居る結果彼等に自然の地形が多少誤り認識されて居るのは致し方も無い次第であるが、實地の智識に至つては現代の山岳諸家よりもつと進んで居たと思はるゝ節々も仲々多いのである。後立山連峯黒部溪谷のあの長大な峯々谷々は藩末に至つて總てこれ等奥山廻り役等に依つて名命濟の點を見ても彼等の足跡の汎く廣く業績の大を稱へねばなるまいと思ふ。

彼等がよく全力を盡してものした古記録文書が總て全部今日に残つて居れば申し分も無い事であるが、今二三辛ふじて殘存して居る古文書繪圖の名稱を掲げ多少の解説を試みて些か彼等の努力に感謝を捧げたいと思ふ。

奥山廻り役吉野村喜左衛門記録。横本一冊。

延寶元年に新川郡山廻り役を仰付けられた吉野村喜左衛門の手記である。

この手記は主として慶安元年六月、芦崎村十三郎が本藩特派の三奉行を案内してさら／＼越針ノ木峠を越えて測量した當時の成果記録である。芦崎村御姥堂垣外の本一のきから信務馬留迄の間を二十間繩を引いて一步歩綿密な測量をした當時の状況が本記録に依つてよく説明せられて居る。又この成果と同時に立派な繪圖も出来上つた事を知るのである。この記録は奥山記録として最も古く且最初のものとして特に貴重である。

奥山廻り役宗兵衛留書。横本一冊。

元祿六年八月の黒部上下奥山廻りの報告書に始り元祿十五年迄の奥山諸事の留書である。

元祿十三年の奥山道筋等書上申覺書や奥山御境目山成川成名稱里程等書上申覺等の控さては堺川上派大平村領の山境に付いては越後側と取交はせる覺書等を記載して居る。この外元祿の奥山御境目見通繪圖の下圖を載せて居ることは珍とするに足るだろう。之れは前記の覺書を上申するに添へたと覺ぼしきもので當時の奥山の全智識を現すものとして最も注目すべきものである。尙二代三代の宗兵衛の奥山廻り記録も添付せられて居るのはこの記録をして益々貴重ならしめて居る。奥山廻り役宗兵衛は長く役儀に精勵し奥山を縦横に踏破した功者にて其覺書の重厚なる點最も信賴し得るものである。故に奥山研究の根幹をなす重要稀觀の記録として吾人は本書を第一に推すものである。

佐伯記録。横本一冊。

享保二十年佐伯有変が喜左衛門記録、宗兵衛留書等を寫しそれに當時の現存せる奥山廻り役宗兵衛の留書を加へ

たるものに自身経験した事項を書き加へ、尙更に有度の子孫たる奥山廻り役たる人々が題次加筆して出来上つた記録で、多少斷續的のもの乍ら慶安以後安永天明に至る諸記録を包含して居る量的にも重要なものである。

佐伯氏加筆の分は最初は芦峠寺村より筆を起し針ノ木峠迄に至る名所地名を掲げて註を入れ引き返してざら越より温泉道を通り其山道の荒廢の有様等記して居る。次に新川郡の水流水域等を詳しく記して備志とし又黒部中ノ瀬平から國境各地點への里程を掲げて居る等は注目すべき處であらう。

寶曆安永の伐木に關する諸事件の始末さては有名な正徳二年、安永三年の大盜伐事件の詳細は本書に依つて明らかになる。之等の事件の結果改定された奥山廻りの日程や人夫數人夫賃の變更も本書に依つて窺ひ得られるので、黒部奥山記録として内容の豊富な事は他の何れの記録にも立ち優れて居るので質量二方面から吾人の最も重寶とする一本なのである。

奥山廻り役岩城記録。半紙本一冊。

元祿十年以降十四年迄の奥山廻りの書上申案文と御繪圖御用に關する諸文書の寫しを記載して居る。又元祿十四年の越後市振村と越中境村との國境線裁定に關し双方へ取交した證文の控をも記載して居る。之等の記録は大體に於て前記奥山廻り宗兵衛留書と重複する點が少くない。然し文字正確几帳面であつて上司の意見の附札まで添書してあるので研究上の利便が多い。筆者岩城氏は新川郡の十村役であつて心得の爲め弘化五年奥山廻り役宗兵衛の子孫浮田氏より借寫した由卷末に記入してある。

芦峯村十三郎由緒書上申控。大本一冊。

延寶五年佐伯十三郎が差し出した由緒書である。

慶安元年三奉行を案内して針ノ木越えをした前後の事情から奥山廻り役並に十村御代官役を仰付けられた事情、三代利常侯から御扶持恩賜品を頂戴した事情を書き、宗貞、特高、家内一門の人別等を附記したものである。右と同じ様なる貞享三年のものと二通本書に収録されて居る。奥山廻り役初期の氏名人員が確認される文書である。

山廻り役御用勤方覺帳。半紙本一冊。

加賀藩に山廻り役の設置された寛文五年（越中礪波地方では寛文八年）以降の御用勤方の覺書の聚成である。

山廻り役の誓詞起證文、寶永二年御條數書山廻り御用勤方事、各地山林竹木帳其他勤向に關する舊例先規を丁寧に書いて收めてある。卷末には子孫懈怠なき様に故實舊例を記し置くものと、筆者山廻り役宮永十左衛門が附記して居る。天明三年六月二十六日の日附あり筆者は天明寛政年間礪波郡山廻り役たりし篤農にして贈從五位。

御用見聞之記。半紙本一冊。

元和以降山林保護に關する藩侯の教書を始め舊慣故例を集録し自己の傳聞せる事項並に参考書類等を添付したものである。安永十年宮永十左衛門の筆記である。



御用留帳。半紙本一冊。

天明元年以降寛政末年迄に至る間藩廳及び御改作所から下達された諸事法例を詳しく收め、其間の事情をも簡記附加したものであつて山廻役以外の百姓御代官に關する記録をも包含されて居る。筆者は宮永十左衛門である。

寛文中以來山廻役勤方之内申來覺書。小横本一冊。

寛文三年に下達された山林竹木保護に關する制令を始め十村役山廻役等の濫觴を記録し其他心得べき品々並に各地宿驛の人馬數、役人名等を記録してある。筆者宮永十左衛門の座右志備の小冊子と見るべきであらう。

七木御定濫觴極印入方書上申帳。半紙本一冊。

新川郡に於て七木取締りの制令ありたる初期の規定を述べ藩林の所在、黒部奥山等御林山の歴史を詳述し伐木の次第極印の打入方等現行規定を御郡奉行へ上申したものである。本記録は寛政四年二月新川郡山廻足輕並に山廻役等の連署のものにて、後年新川郡十村役杉木氏が参考の爲めにと寫し置いたものである。

新川郡御林山并七木御縮方之儀書上申帳。半紙本一冊。

新川郡に於ける藩林の所在來歴を記し又准藩林となつた百姓持山の來歴をも合せ記して居る。往還の竝松其他藩有地の七木等に關する事項をも記し伐木取締り等の古實をも述べて山廻りの常時心得べき定法にも筆を進めて居る。本記録も寛政六年六月新川郡の山廻役等連署して上申したものを杉木氏が寫し置いたものである。本

書には十村の伐木極印打入關與する權限限界を示せる文書並に山廻役使用の極印文字を示せる文書が添附されて居る。

黒部奥山祖母谷の明礬堀出方願一卷。大本二冊。

享和元年九月金澤魚津の者共より藩廳へ黒部奥山祖母谷に湧出する明礬堀出願ひを差出した一件に付いて筆者新川郡沼保村十村役伊東彦四郎に意見具申を命ぜられたので答申した控である。彦四郎は奥山の秘境なることと明礬湧出其ものが不分明なることを理由として認可は不賛成なることを上申して居る。次いで文化十年三月金澤町中屋彌兵衛の同様の願書に對する同様認可不可の答申との二つを收録して居る。何れも黒部奥山の特殊郷たる所以を力説して堂々の論説を吐露して認可は絶対不可なる旨を答申して居ることは注目に價する。

御國境沼保元組御用勤方等書上中帳。大本二冊。

信濃越後と境域を接する新川郡沼保元組の十村役伊東彦四郎が自己の責務の重大なるに鑑み勤方心得について先規舊例を案じ其職務上の取捌きを箇條書にして列擧し郡奉行所に差出し御郡奉行の承認を経た所謂沼保元組十村役心得書である。黒部奥山のことに付ては下奥山は當組に屬せるもの故其取締り方も充分心得べき事を強調し奥山廻り役創始以來の諸事を述べて居る。勤方舊例の部には上下奥山の區域を明示し國境並に奥山谷々道筋等に關する取締りの範圍を區分し所謂越境者打捨御免の意を明示して居ることは注目される。其他境關所のこと越後領玉木村市振村と越中境村との交際のこと國境線のこと藩侯參觀の節親不知方面警備のこと等實に詳細を極はめ

て居る。この記録は黒部奥山の一部を管下に持ち信越と境を接する十村役の心得書として實に立派なものであつて奥山の特殊事情も或る程度迄記述されて居り實に貴重なる資料である。文化四年二月伊東彦四郎の筆である。

立山御林ニ而山詰番等相勤御縮方御用一卷。半紙本一冊。

文政十一年三月立山檀ヶ原に於て金山十次郎等の願出に依る材木拂下げを實行せる際監視に登山した奥山廻り役等の山詰番の覺書である。山詰の日割り伐木の員數並に登山前後の往復文書が收められてある。山詰番の記録としては珍らしいものである。筆者は奥山廻り加人佐伯新之丞である。

奥山廻御用一卷留。横大本一冊

天保十一年七月佐伯新之丞の伴有次郎が即急に父の跡役奥山廻り加人を命ぜられ金澤へ出府、誓詞見届もそこそにして歸宅直に奥山廻りに出發して行つた前後の様子を記して居る。

黒部下奥山御境目廻御用等控寫手帳。小横本一冊。

天保十四年奥山廻りの佐伯有次郎が下奥山を見した際の山内日記帳である。上下奥山へ派遣せられた本藩の横目足輕の來着から登山準備に關する往復書簡公文書等を掲げ次いで山廻りの日記に筆を進めて居る。六月二十六日三日市郡役所にて公用を整へ二十七日大平村へ着し、これから三十日迄寺山下駒ヶ嶽と國境見分に費し、引き返して七月三日下奥山口小川温泉を發足して黒部奥山見分に登山する次第を日記體に簡記されて居る。詳細は前項

にも一部掲載して置いた事故参照せられたい。この日記に依つて初めて奥山廻り等が此頃すでに後立山に登高を實行して居たことを知るのである。

黒部上奥山御境目廻御用方控寫留帳。小横本一冊。

嘉永二年奥山廻り役佐伯有次郎が上奥山見分を行つた際の山内日記である。此の行程等詳細は山岳二十四年第一號に行を共にせる伊藤刑部の手記の全文が掲げてある故其方を参照されたい。この手記で注目せられる所は黒部川水源龍池ヶ岳とあることだ。刑部の手記にも同様に見えて居る。さすればこの名稱は火口湖の有る現在の鷲羽岳のことを指すと思ふが、鷲羽には文政時代の測量圖籍以來東鷲羽と稱する山名が有ること、故此の龍池と云ふ別名について其使用範圍と年代が特に研究注目に價する次第だ。

下奥山日記。小横本一冊。

安政三年六月奥山廻足輕武内常右衛門が下奥山見分を行つた際の山内日記である。發足に際し取交せる公文や郡役所より下げ渡しの路銀手錠等の請書などあり興味ある記録である。日記は六月二十八日小川温泉を發して七月四日蓮花山頂の見分を無事終り七日小川温泉に歸着した所で終つて居る。この竹内氏は仲々の趣味家と見えて山中至る所和歌俳句狂歌等を試みて雅懷を洩らして居るのである。

小川温泉薬師堂の坊主からいんどうの煮たのを進められて

御僧の無理にすゝむるいんどうは死ぬとか皮のこはき振舞

北又打合ニ而夕立小屋に至つて晴る

日南に更て流れもつゝらおり黒部の山に北又の小屋

深層の小屋へ未上刻に着す

雪に降る夕立の谷や花紅葉

蓮花山頂にて

雪踏て幾岨登る暑さかな

横山峠の間ノ谷川にて

谷川もこや名にし負ふ横山の峯にそむける流れなりけり

黒部上奥山意境目廻御用方控寫留。小横本一冊。

文久三年六月奥山廻役佐伯新左衛門が下奥山を見分した際の山内日記である。此の行七月二日立山へ參詣し一ノ越より中ノ瀬平へ出で針ノ木峠へ登り見分し、轉じて折岳へ登り眞砂火打を過ぎ中岳の鞍部から黒部水源へ降り夕ガ谷へ入り有峯へ七月十四日到着したのであつた。

黒部下奥山御境目廻御用控手帳。小横本一冊。

幕末の物騒がしき世相も他所に加賀藩の奥山廻りは依然として続けられた。慶應四年六月加賀藩は上下奥山へ各三十餘名宛の登山隊を繰り出した。上奥山へは上市の五平太、島尻の刑部、下奥山へは齊木村の新左衛門、石割村の彌左衛門の各奥山廻り役がこれに當つた。本手帳は齊木村新左衛門の手記である。六月十八日小川温泉を出

發して二十一日蓮華山頂に登り加州塚見分の標札を建て廿五日小川温泉に歸着した。本書には杣人足から差出す他言無用の誓書や御算用場に達すべき御横目足輕の達し書の案文や新川郡役所に差し出すべき奥山廻り役の達書の案文など掲げられ彼此對照して研究上利便が多い。尙末尾に蓮花山頂からと目すべき信州の見取圖が添付せられて居る。天際に富士を畫き煙を吐く淺間や戸隱黒姫の山々も記入しており、松本池田大町細野等も見え遠く丹波島邊の記入迄もあるは注目すべき所である。

新川郡御用留拔書。大本一冊。

享保以來新川郡寄合所に於て裁決した諸事件や公用の要件等を記した新川郡御用留帳より奥山に關するものを抜き出したものが本書である。かね山一件、辨柄一件、山番一件等奥山に關する事件や奥山廻りの準備示達等細大洩らさず收録されて居て文獻として仲々重要なものである。

御扶持人等勤向大綱書上帳。大本一冊。

明治二年下新川郡の十村役以下各百姓役人の勤向の例格を詳記し郡治局へ差し出したものである。山廻り役、山廻り列については本文に記して置いた。本書の末尾に當時の下新川郡の百姓役人の姓名が列記されて居るのでよき參考となる。

奥山御境目見通繪圖。小一卷。

元祿十年頃藩廳から命ぜられて奥山廻り役等は繪圖方兼帶となり奥山境界の調査に努力を拂ひ其記録も繪圖も相當に出來たのであるが、其上にも修正を重ねて漸く十三年に出來たのが本圖である。本圖は文書と共に御算用場へ呈出せられたのである。元祿十四年には各藩領國繪圖を幕府へ呈出することを命ぜられた筈だから、本圖の如きは加賀藩御繪圖作製上のよき参考となつたろうと思ふ。本圖は實に幼稚極まるもので鏈ヶ嶽から鷲羽嶽までの間に僅かに七箇の山名を見るに過ぎないが、然し奥山繪圖としては最も早期のもの故當時の奥山の智識を推知し得て特に貴重である。

#### 新川郡地理圖。中一舗。

天明時代に於て宮永十左衛門が自ら製作したと見るべき繪圖である。篤學の十左衛門は新川郡の地理迄も研究して居たのであるが、流石に祕郷奥山の詳細は判らず僅かに信越の國境に不歸、餓鬼、後立山、眞砂子、針ノ木、鷲羽の名稱を見るに過ぎない。鏈や火打や錫杖や中嶽の諸峯を失念して居ることはやむを得まい。只我々として注目することは後立山の存在である。何れの越中の繪圖を擴げても奥山の至高至奥の所として後立山を畫き其所在も越中人には確認せられて居たと云ふことである。由來後立山の山名所在等について種々の議論を聞くのであるが、之が確定には必らず越中の記録繪圖に依らねばならぬことを之等繪圖を眺めて痛感せらるゝものである。

#### 奥山御境目見通山成川成繪圖。大々本一冊。

享和二年の製作である。前記元祿の繪圖に比べて見て多少の進歩を示して居るのであるが幼稚至極である。只黒

部川の流域源流の状態が明確に記された點は注目してよい。本圖に於ては元祿圖に比べて錫杖針ノ木の諸峯の名が新に現出して居るに過ぎない。元祿より百年にして奥山繪圖が依然として進歩せぬのに驚かざるゝのである。

奥山御境目並谷口川筋等略繪圖。大々一舖。

文化初頭の作であることは此の繪圖が奥山廻り役等共同して作製した由文化三年の杉本文書中に見えて居る事故左様斷定すべきであろう。本圖は奥山廻り役等の實用に供せられたと見るべき丈けに、御境目は申すに及ばず山々谷々の記入は詳細を極はめて居る。僅かに十字峽附近の下廊下を除いては殆んど奥山廻り役の見分足跡の届いて居ることを示すが如き繪圖である。本圖は黒部奥山のみならず片具早月常願寺の奥山等を包含し越後信濃飛騨等新川郡の全奥山御境目をも畫いてある實に立派な繪圖である。奥山繪圖も本圖に至つて飛躍的進歩を遂げて居る。注目すべきはこの文化時代には未だ大蓮花、梅山、コスバリ、中嶽劔等の山名が現れて居ないことである。

奥山御境目文化御繪圖。大一卷。

此の繪圖も前記同様文化年中の製作と推定せられる。其谷々川筋山名等兩者全く等しいと云つてもよい。只一二の點に新地名が現出して居るがそれもほんの些細の點である。本圖は奥山の全境目筋のみ繪卷式に書いたもの丈け前者よりも餘程丁寧に書いて居り、奥山廻りの道筋の記入などはより詳細を極めて居る。本圖は奥山廻り役か又は郡所の役人の祕藏し實用に供して居たと見るべきものである。



奥山御境目筋等略繪圖。大本一冊。

この繪圖は冊子となつて居るが前記文化御繪圖を改めたものと推定せられるのである。山名川筋谷口等は略々同一である。が然し描法は全く違つて居て幾分稚拙である。この略繪圖は内容的に富田景周が越登賀三州志の附圖として製作した大繪圖の奥山方面と全然酷似して居る點は特に注意研究すべきものでないかと思ふ。

新川郡御縮山之圖。中一鋪。

繪圖の右端に文化十一年上ると朱書してある點から見て本圖の製作年代を確認することが出来るのである。本圖は奥山の略繪圖で信州側の岳下の村々の名まで記入せられて居て便利である。越中側中岳方面、針ノ木方面に註記が入つて居て昨年頃まで盜伐が非常に盛で奥山の美林が多く彼等の手に依つて盜伐せられたことが記されて居る。高瀬入りの林道に三吉道と云ふ記入があり、盜伐者の多くが此の道を利用して來ると註記に見ゆるのは面白いことである。又信州野口村九郎七、千國村五右衛門、越後國大所村七兵衛は近在に聞こえた豪家であり手廣く材木等を取扱ふと註記してあるのは注目せられる。思ふに之等信州側の材木業者は黒郎奥山の材木拂下や盜伐に關し多少の關係を持つ家々であるからである。この圖は三國の山々を色別けにして畫いて居り略圖乍らよく奥山の概念を掴み得る。この圖でも末だ蓮花や中岳劍は出現して居ない。

新川郡立山之後御縮山分間繪圖。大々一鋪。

文政五年九月石黒信由翁が一町一分の縮尺で持つて製圖せられたものである。翁は當時奥山廻り役中の權威者舟

見村脇坂太郎右衛門に依頼して、奥山所々の見取繪圖を作らせ且高山上に於て磁石を立て各峯々谷々々の方位を測定せしめられた。其成果書を以つて精密作製せられたのが本繪圖である。本圖の註記に「舟見村太郎右衛門方に於て圖之。且又御縮山所々におゐて太郎右衛門等見申方角野帳面は道程しらべ方野帳へ内へ入第十六と名付け別に有之候」とある。又信由翁の手記にも「安政五年九月十八日及廿九日迄。立山御縮山等しらべ方舟見村太郎右衛門方」と書いてあるを見ると一代の奥山權威者と一世の大數學者とが膝を交へて蘊蓄を傾倒して出來たのが本圖であると云ふことが出来る。本圖に依つて今後の奥山の嶺々谷々の諸名稱は確定したと云ふべきである。本圖に於て始めて兩越信濃の三國境は上駒ヶ嶽となり大蓮花小蓮花の名も出現して來た。南北針ノ木嶽、コスバリ、母山、中嶽、東鷲羽嶽も見えて來て居るのは注目しやう。後立山の其特殊な双頭の山容が寫實的に畫かれてあるのも驚異すべきものだ。信由翁は脇坂氏の測定した方位の外に自身立山や有峯等新川郡各所に於て後立山諸峯を測定せられた方位をも基礎に用ひられて居らるゝ事故圖上の方向等は現實と一致して正しい譯けである。山名も當時の權威者に諮問せられ尙又各所で確められて居らるゝのでこの點も仲々正確と云ひ得るのである。予がこの繪圖と測量圖籍等を以つて後立山連峯の古名を考察するのは實に其處に存する至大な價値を認めるからである。

加越能三州測量圖籍。大本十二冊。

文政二年命を受けて三州の測量に着手せられた石黒信由翁は辛苦五ヶ年文政七年三月其偉業を完成し三州郡分繪圖拾枚、道程帳十冊、村名帳十冊を差し出された。三州の地圖この時を以つて完備したと云ふべきであろう。其

後天保六年往年の加越能三ヶ國の測量の成果野帳を清記して差し出されたのが本圖籍である。黒部奥山は新川郡の一部に含まれて居り描寫も前記立山之後御縮山分間繪圖と少しの變りも無い。只各所で測定した方位が記入されて居るのは研究上至大の便益を興ひて居るのである。信由翁は文政四年早月谷方面有峯方面立山方面を測量して居らるゝが後立山方面へは登山せられず主として脇坂氏の所説を採用して居らるゝのである。故に下廊下方面の依然として不明や三ツ又岳の存在や現在の針ノ木岳と目せられる地藏岳双嶺山が國內の山の様に畫かれて居る缺點を有するのである。さはあれ文政初年の作圖として正確なること全國に稀なる立派さであつて後世三國の地圖は明治大正に至る迄地名作圖は本圖を以つて宗として居る點等以つて其權威の程が窺はれるのである。

#### 新川郡奥山繪圖。小一舗。

天保七年奥山廻役舟見村脇坂長右衛門の作製である。後に沼保村の十村役伊東氏が所藏したと云ふことを裏面に記して居る。故に脇坂氏伊東氏共に實用に供して居たと見るべきであらう。本圖は頗る略畫であるが注目すべきことは鷲羽嶽の東方に龍池岳と云ふ山名が見えることである。これは天保十四年上奥山廻りの佐伯氏も其手記に記入して居る山名で現在の鷲羽嶽のことを指すものと思ふが、天保時代に限つてこの名が見え他は總て文政以降の東鷲羽を使つて居るのは何うした事か考察すべき問題であらう。

#### 新川郡奥山大綱之圖。中一舗。

天保時代の作製であつて山名等總て前記繪圖と同一である。この繪圖の特長は奥山を大躰に於て有峯嶺、立山嶺、

下奥山領と三色に染め分けられて居る點であろう。この三分して居る點は現下矢かましい黒部奥山無籍地問題の一考察に些少の資料を與ふるものと云ひやう。この繪圖にも龍池ヶ岳の名稱が立派に見えて居る。

有峯村地内字限一筆限一覽圖。小一舗。

明治中期富山の入新谷氏の作と明記してある。西は東笠山、東は折岳、南は三ツ又岳、北は立山温泉を包む廣大な有峯村領を一筆く一字くの名稱等詳細に分割記入してある繪圖である。現在の鷲羽岳が鷲岳となり三國境が三ツ又岳となりこれと鍋岳の間に西又岳なる山名も見えると云ふ些か珍奇な繪圖であるが、地番等記入の關係で谷々や山名等の記入が特にこまかい點は注目するに足る。殊に岩苔谷の小池や温泉迄立派に記入せられて居るのには一寸驚かされる。

新川郡海岸繪圖。

大一卷

神通河口から越後堺の境村迄の海岸繪圖である。村々戸數藩倉の有無、里程等並に海岸の深淺迄詳しく記し隨時各地點から望見せらるゝ山々の山名方位等を記入して居る。之に依つて後立山、餓鬼岳等諸連峯の山名が推定出来るのである。本圖は藩の船舶用として實際に用ひられたものゝ如く其方位等の記入正確なる以つて山名確認にも利用し得貴重なるものである。

古記録、繪圖の解説は大體奥山廻り役の手記又は實用に供せられたと目せらるゝもののみを掲げ其れも本文と重複すること多きを以つて略述に止めた次第である。諒せられんことを。(終)

# 木曾駒縦走に關する報告

谷 本 光 典

は し が き

言ふまでもなく積雪期の木曾駒より南駒に到る中央

アルプス連脈は、織田明、田中太郎の兩氏に依つて一

九三五年、初登攀の足跡が印せられてゐる。その後明

大の人々もこの長々しい稜線を通過してゐられると聞

く。従つて私達の縦走記録そのものは事新らしく報告

する程の價値あるものとは思へぬ。然し、私達の行動は

直接の目標が中央アルプス縦走にあつたのではなく、

積雪期に於ける「大部隊の行動」にあつたのである。

中央アルプス連脈は、比較的人に知られてゐない點

と、地理的に手近かである點によつて私達のゲレンデ

として選ばれたに過ぎない。従つてこの報告は、積雪

期の長旅に於て、部隊の行動、食糧、裝備が如何に處理されて行つたかと云ふ報告である。何かの参考となり得たならば幸である。

参照地圖

五萬分の一、木曾福島、上松、伊那、赤穂、山岳三

十年二號附圖、木曾駒山脈略圖

木曾駒に於ける登山記録は山岳第三十年二號、織田

明、田中太郎兩氏による初縦走記録中に集録されて

ゐるからそれを参照せられたい。

隊 の 編 成

第一パーティー

牛島 宥(リーダー)、戸谷和夫、(上條親人)

第二パーティー

藤本 武(リーダー)、山田正忠、原田美道、(平林次男)

第三パーティー

中尾佐助(リーダー)、篠田正武、(村上 守)

第四パーティー

永田和生(リーダー)、若山繁男、(上條孫人)

第五パーティー

谷本光典(リーダー)、辻岡宏男、島津嘉男  
括弧内は島々の人夫。

以上メンバーは THEY 會員、八高山岳部の一部より成る。

行動、宿營、食事等はすべてパーティー單位とした。五パーティー中四パーティーは三名から成り、輸送能力、支持能力に於て不足するかと危ぶまれたが、實際に當つては大した支障もなかつた。ザイルを結んだ場合は三名のパーティーの方が能率的なことは勿論であつた。南駒頂上まではボーラートレーデに依つた

が、その際移動隊二隊に對し、支持隊一隊で足りた。移動隊は支持隊の支持により、五、六日分の食糧、宿營すべき天幕、その他パーティー所屬の裝備一切と共に移動したのである。

ベースキャンプ設立までに須原近在の獵師五名を使つた。

ベースキャンプまでは、島々の人夫の病氣、食糧バキングの都合等により各パーティーのメンバーは前記の通りではなかつた。又、偵察隊を出す場合は適宜パーティーを崩して編成した。これは行程表に明記してある。

行動記録

三月十六日 晴

篠田、牛島、辻岡須原櫻屋に来る。相ノ澤發電所に荷物運搬の交渉。

三月十七日 晴

櫻屋に到着してゐた荷物を軌道にて相ノ澤發電所小

合まで運ぶ。午後三時鳥々の  
人夫四名到着。四時王滝スキ  
ー合宿の一行到着。十一時永  
田到着。

三月十八日 晴

先發隊（1、2、3、4パ  
ーティ。但し中尾は未着。守  
は風邪の爲休養）出發。

須原發（前九、〇五）——相  
ノ澤發電小舎（前一、三〇）  
食事及び發電所小舎宿泊の交  
渉に二時間を要す。牛島單獨  
にて軌道を利用して須原に下  
る。午後十時半谷本須原着。  
同十一時中尾着。

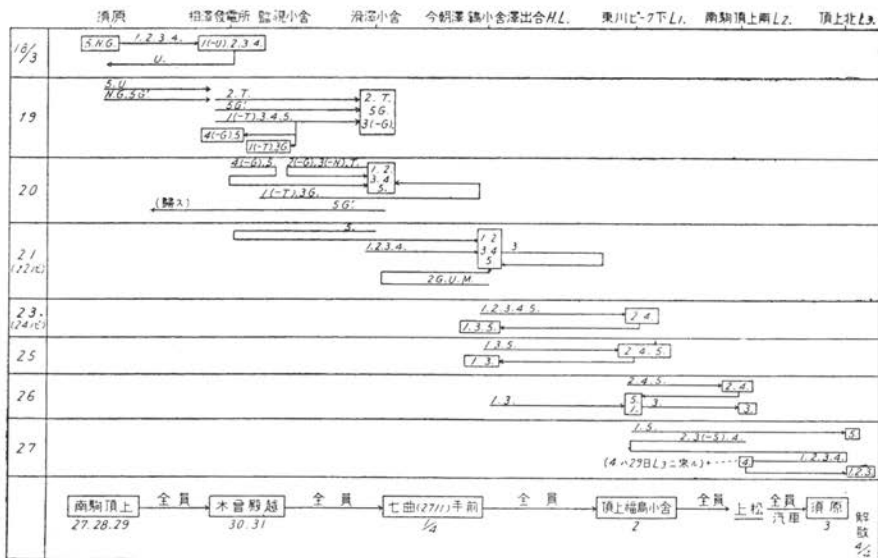
三月十九日 晴

5パーティ（牛島を加ふ）  
須原發（前〇、三〇）——相ノ

木曾駒縦走に關する報告（谷本）

木曾駒縦走行行程表

昭和十三年三月十四日



説明

§ 1. 隊名 メンバー

1. 牛島—戸谷—G
2. 藤本—山田—原田—G
3. 篠田—中尾—G
4. 永田—若山—G
5. 谷本—辻岡—島津

§ 2. z. B. 1. 5. → ハ第 1. 5. 隊ノ移動ヲ示ス

§ 3. □ = 入レラレタ数字ハツノ根據地ニ宿營セ  
ル隊名

§ 4. U: 牛島, T: 戸谷, S: 篠田, G': 須原口人夫  
N: 中尾, M: 永田, G: 鳥々案内人組合人夫  
z. B. 3 G ハ鳥々人夫ノ名ヲ表ス

澤發電所着(前二、三〇) ベースキャンプ建設隊2  
パーティー

運搬品、C<sub>1</sub>, B, C, ワカン5、シャベル1、

發電所發(前九、〇〇)——滑澤小舎着(後、三、三〇)

午前九、一〇、中尾、守、須原の夫五名發電所着。

須原夫五名。

運搬品、ガソリン三〇罐、ザイル全部、C<sub>2</sub>、W、シ

ヤベル四、豫備食料十二包、青竹全部鍋六つ。

發電所發(前九、五〇)——滑澤小舎着(後、三、三〇)

1、3、4、5パーティー

運搬品、食料1<sub>2</sub>

途中に荷を置き4、5パーティーは發電所小舎に引返す。中尾、篠田は、夜を徹して滑澤小舎に向ふ。

牛島、守、金正屋、親人は越百御料林監視小舎に宿

泊。

三月二十日 朝曇、後晴

4、5パーティー

發電所小舎發(前八、四五)——滑澤小舎より下り來

る六名に逢ふ(前九、〇五)——上の六名を現地に殘

し4、5パーティー直ちに發電所小舎に歸り1<sub>4</sub>食

料を運搬す(前一〇、五〇)——晝食(前一、〇〇)

滑澤小舎着(後五、〇〇)

牛島、守、金正屋、親人

監視人小舎發(前六、〇〇)——滑澤小舎(二、三〇)

今朝澤、鶏小舎澤出合(後、一、三〇)——滑澤小舎

(後三、三〇)

三月二十一日 晴午後八時頃より雨。

氣温、於H・L、午後三時四十分、一〇度

5パーティー

滑澤小舎發(前八、一〇)——相澤發電所着(前一、

一五)——同所發(後二、〇〇)食料1<sub>4</sub>を運搬—

滑澤小舎(後五、一五)——H.L.着後八、〇〇)

1、2、3、4パーティー

運搬品 C<sub>1</sub>、C<sub>2</sub>、W、食料1<sub>2</sub>

滑澤小舎發(前九、〇〇)——H.L.着(前一、三〇)

金正屋、親人再度滑澤小舎より食料1<sub>4</sub>を運搬





空木岳を下る本隊

谷本光典



木曾殿越の朝

谷本光典



5 パーティー、前途偵察、東川ビーク下に至つて  
H.I.に引返す。

須原人夫5五名を歸す。

三月二十二日 雨、後晴

氣温、午前十時、八度、午後六時、三度

終日、全員のび

三月二十三日 曇

氣温、午前十時 四度

全パーティー

運搬品、C<sub>2</sub>、W、食料3<sup>10</sup>

出發(七、四〇)——東川ビーク下着(後一、三〇〇)

こゝをL<sub>1</sub>と定め、W、C<sub>2</sub>を張り、2、4パーティー

を止め他はH.I.に歸る(後四、〇〇着)

三月二十四日 雨、のび

三月二十五日 雪

氣温、於H.I. 午前八時 三度

1、3、5パーティー

運搬品、C<sub>1</sub>、食料4<sup>10</sup>

H.I.發(前九、五〇)——晝食(後一二、〇〇)氣温  
零下五度——L<sub>1</sub>着(後一、三〇〇)

本日2、4パーティーはL<sub>2</sub>に向つての豫定の前進を  
中止せる爲 5パーティーは混亂のL<sub>1</sub>C<sub>2</sub>に泊ること  
となる。キャンプ連絡通信方法の必要を痛感する。

1、3パーティーはH.I.へ歸る。

三月二十六日 晴

L<sub>1</sub>下よりL<sub>2</sub>へ到る途次、雪はクラストしてゐる場所

あれど、概ね軟質、ワカン使用

2、4、5パーティー

運搬品、W、C<sub>1</sub>、食料2<sup>10</sup>

前日の雨交りの雪に濡れた荷物を乾し、

L<sub>1</sub>發(前一、五〇)——東川ビーク(後一、〇〇)

L<sub>2</sub>(南駒頂上直下の南鞍部)着(後三、五〇)

此處にW、C<sub>1</sub>を張り5パーティーのみL<sub>1</sub>に引返す、

L<sub>1</sub>着(後五、三〇)

1、3パーティー

運搬品、食料3<sup>10</sup>

III. L<sub>1</sub>發(前九、三〇〇)——L<sub>1</sub>着(後一、〇〇〇) L<sub>1</sub>に1  
パーティーを止め、3パーティーは後二、三〇、2  
4、5パーティーに追付く。

三月二十七日 曇、午後一時頃より雪

西風、後、東南の風。

1、5パーティー

運搬品 C<sub>2</sub>、食料 2 $\frac{10}{10}$

L<sub>1</sub>發(前八、三〇〇)——L<sub>2</sub>より下れる2、3、4パ  
ティーに逢ふ(前九、三〇〇)——L<sub>2</sub>着(前一、〇〇〇)

——南駒頂上(後一、三〇〇)——L<sub>3</sub>(南駒頂上を二〇  
〇米北に越した地點)着(後一、四〇〇)

直にクラストを切つて天幕を張る。この頃より風強  
く雪を交へる。

2、3、4、パーティー

L<sub>2</sub>發(前、九〇〇)——L<sub>1</sub>着(前一〇、三〇〇)——L<sub>1</sub>發  
(後二、〇〇〇) 食料 6 $\frac{10}{10}$ を運搬——L<sub>2</sub>着(後二、  
三〇〇)——L<sub>3</sub>着(三、三〇〇)

5パーティーを除くすべてのパーティーはL<sub>2</sub>にもど

り荷物運搬、5パーティーは天幕場工事、4パーテ  
ィーはL<sub>2</sub>のWに寝る。

三月二十八日 吹雪、午前中風速約23米のび

三月二十九日 晴 時々雪

午前九時 4パーティーL<sub>3</sub>に到着

2、5パーティー

偵察、前途のステツプ切り

L<sub>3</sub>着(前二、〇〇〇)——空木岳手前の鞍部(後一、一  
〇〇) L<sub>3</sub>着(後、五、〇〇〇)

中尾、戸谷、若山

仙崖嶺へ散歩。

L<sub>3</sub>發(前一〇、〇〇〇)——仙崖嶺(二二、〇〇〇)——L<sub>3</sub>  
着(後、三三〇〇)

三月三十日 晴

全員そろつてL<sub>3</sub>發(前九、一五〇)——田切北越鞍部着  
(前一〇、〇〇〇)——空木岳手前の鞍部(二二、二二〇)  
空木岳頂上(後一、〇〇〇)——岩場(後一、三三〇)——

木曾殿越え着(後五、〇〇〇)

殿越えに下る手前の岩場は意外に急で、その上腐つた雪とブロックの大きい岩とで、通過は極めて困難であつた。止むなく約百五十米ザイルをかけて、之を傳つて下りた。

三月三十一日 吹雪

のび。

若山、原田、島津、辻岡、前途の偵察

四月一日 晴、夕刻より雪

殿越え發(前八、三〇〇)——大瀧山(後二二、四〇〇)——

梯子樽岳(後二一、一〇〇)——七曲岳手前(四、一〇〇)

四月二日 晴、風強し

七曲岳發(九、三〇〇)——寶劔南岳着(二一、〇〇〇)パ

ーティー各々アブザイルンする。——木曾駒頂上福

島小舎に全員集結(後五、三〇〇)

寶劔岳を全パーティーの通過するには約五時間かゝつた。寶劔南側のギャップの一つには約十米のアブザイルンを必要とし、平均七貫の荷物は雪と岩とに可成りのブレイキとなつた。

木曾駒縦走に關する報告 (谷本)

南側のやせ尾根に出來た雪のエッジは、天候の状態により通過の難易に可成りの相違を示すものと思はれた。

この夜は久しぶりに山小舎に泊れたが、ガラシとして戸じまりの悪いこの小舎は風が吹き込んで寒く中へ天幕を蚊帳の様につるし、その中で寝た。

四月三日 頂上は猛然たる吹雪

1、3、5パーティー

福島小舎發(前八、三〇〇)上松道を下る徳原社務所

(後三、〇〇〇)

2、5パーティー

發(前二一、〇〇〇)——社務所着(後三、三〇〇)

五合目の小舎でアイゼンが不要になつた。

午後八時までに全員須原榎屋に歸着。

さゝやかに縦走隊解散の宴を張る。

註

Wはウインパー型五人用天幕

C<sub>1</sub>、C<sub>2</sub>は八人用冬期天幕の略

「食料1・2」等は南駒頂上以後の全部の食料の約2/1の分量を表す。

食糧

行動豫定日数は十二日であつたが、私達は二十日分の食糧を準備した。食料品別準備總量、殘餘量を掲げれば左の通りである。

| 品名                       | 準備量          | 殘餘量             |
|--------------------------|--------------|-----------------|
| 米                        | 六合入、五十五包     | 十包              |
| クエツカーオート                 | 五四罐          | 八罐              |
| 森永軍用乾パン                  | 二八〇箱         | 五十箱             |
| コツペー                     | 七五本          |                 |
| 煮込うどん                    | 七〇包(一包一人二食分) | 十包              |
| 乾燥野菜                     |              |                 |
| ホーレン草                    | 五〇〇匁         | 一〇〇匁            |
| 人参                       | 三〇〇匁         | 五〇匁             |
| ジャガイモ                    | 三〇〇匁         | 五〇匁             |
| 白菜                       | 五〇匁          |                 |
| 乾燥壓縮アゲ                   |              | 一〇〇匁            |
| サージ                      |              | 九五罐             |
| コンビーフ                    |              | 十五罐             |
| 鮭罐(小)                    |              | 二十五罐            |
| 混合の素 <small>まぜもの</small> |              | 三十袋(一袋一パーティー一食) |
| レーズン(大箱)                 |              | 十五箱             |
| 雪印バター半ポンド箱               | 六十本          | 十本              |
| ペーコン                     |              | 五〇〇匁            |
| 雪丹                       |              | 五本              |
| ブルンズ                     |              | 五封度             |
| 角鈔糖                      |              | 七五箱             |
| 鹽                        |              | 二匁              |
| ペパー                      |              | 五本              |
| ナイスカレー(小)                |              | 十五本             |
| これはうまい                   |              | 五本              |
| 森永クリーム(豆罐)               |              | 三〇罐             |
| 苺ジャム                     |              | 二〇罐             |
| マーマレード                   |              | 一〇罐             |
|                          |              | 八箱              |

ドロップス 二貫

氷砂糖 一貫

ココア 二封度半

紅茶 二封度半 一封度

タイガーヘツトラム 五本

醤油 二升五合

つくだ煮 五〇〇匁

ブツカキチョコレート 一匁

附

ガソリン 十五ガロン 四ガロン

キャンプローツク 一〇〇本 二十本

燃料アルコール 一升五合 五合

その他、須原人夫用食糧として相ノ澤發電所飯場にて、米一斗七升、イワシ乾物、ミソ、生野菜の若干を購入した。

十二日間の豫定行動を順次第一日の行動、第二日の行動……と呼び、食糧の方も之と對應して第一日の獻立、第二日の獻立……を作つた。行動した日は幾分御

馳走を食べ、のびの日は一律に餘裕食と名づけた食事を攝つた。行動日は朝はオーツ、晝はパン、夕は米を主食とした。餘裕食は朝はオーツ、晝はパン、夕はうどんとした。詳しい獻立は省略する。

朝食のオーツは割合好かれ、平均食器二杯(米飯と同量)食べた。オーツにはレーズン、ミルク、砂糖の外に少量のバターを入れると味がよくなる。一罐で六人乃至七人の朝食になる。

晝食のパン、又は乾パンの副食物は、バター、ジャム、マーマレード、サージン、ソーセージ等と變化を與へて飽きるのを防いだ。森永軍用乾パン一箱と少量の副食物とは一人分の晝食として全く充分であつた。

但し紅茶は多い目に用意する必要があつた。この乾パンは厚紙の箱に入り、その上からパラフィンを浸ました紙で一重、その上を薄い紙で包んであつて、街の賣販品としては割合良心的である。E.C.やJ.では雨で外側を濡らしたり、水浸けにした爲幾分しめつた。乾燥しさへすれば可成り亂暴な扱ひ方をして中味はさ

ほどこわれない。これを二十箱づつうすいブリキ罐にでも詰めたら、相當長期にわたつて使ふことが出来ると思ふ。

乾燥野菜は長野縣産業聯合組合の製造する陸軍糧秣廠の規格品を分けてもらつた。出来れば醤油、肉類も乾燥品で持ちたかつたがこれ丈しか手に入らなかつた。

雪の稜線で大部隊が籠城を餘儀なくさせられた場合食糧と全く同様、或ひはそれ以上命の糧であるガソリンは、必要量よりは可成り餘分に全部で十五ガロン持つた。しかしロッドで焚火が能率的に使へた爲、縦走の行程が順調であつた爲澤山餘つた。ガソリンは半ガロンづゝ罐に入れ、口をハンダ付けにした。バーナーの容量が四分の一ガロン強であつたから、二つのバーナーが殆ど空になつた時一罐を開ければよかつた。從來ガソリンの携帯は可成り私達の頭を悩ました問題であつたが、任意の大きさの罐を作り、ガソリンを入れてハンダ付を手輕に引受けてくれる工場が見付かつたの

で非常に助かつた。

#### 食糧のパッキング

パーティーが單位となつて動く計畫であつたから、食糧はすべてパーティー單位で分けた。毎日移動する故一日分を一包とした。調味料も各パーティー三個づつの調味料の袋を持つことになつた。この包みには分けて包むのが繁雜な、つくぢ煮、ベーコン等、又紅茶、ココア等の嗜好品も一緒に入れた。

行動日の食糧は、夕食から晝食迄を一包みにして、夕食の時包みを開けて、その翌日朝食を食べ、残りの晝食を各自分けて持ては一袋が空になる様にした。オートツの一罐はパーティー二回の朝食になり分けるのが出来ぬ故一日置きにパツクに入れた。

袋は防水布のオーバッシューを使った、これに赤鉛筆で記號を付けた。

パッキングの仕事は名古屋でやる積りで、幾分手を着けて見たが、早くからはパッキング出来ないものが



あり、又、貨物便として箱に入れる際甚だかさ張り、こわれ易くなるので中止した。餘裕食だけは名古屋でパッキングを終へて送つた。餘裕食は一パーティー二

日分を一包みとした。食糧の種類別のまゝで須原に送り、須原の宿でパッキングをする筈であつたが、發電所の軌道の氣がきゝすぎて、宿の庭に積んだ箱を隊員の居ない内に相の澤まで運び上げてしまつてくれた。

縦つて相の澤の工事場でパッキングの仕事をする事になつたが野外のことなのでうまく運ばなかつた。オーバーシューの口をしめる仕掛がうまく行かず持ち運びするうちに中味がこぼれ出し、それがどの袋から出たかをしらべるには一々獻立表を出して見ねばならず、出鱈目に放り込んで置くと、カレー粉のないカレーライスを造らねばならぬ。パーティーが出来たりして混亂した。又防水布へこすり付けた赤鉛筆の跡は消え勝であつた。そんなことの爲、E<sub>1</sub>やL<sub>1</sub>の天幕では全部口を開けて整理のしなほしといつた手数を生んだ。これらの袋は、各人が個人用品を入れたリュックに

六、七個は樂に入り、その上にザイル一本位を入れて口を閉めることが出来た。

南駒頂上までは、一パーティー第五日までの食糧と、餘裕食一袋(二日分)を移動パーティーの荷物としてパーティー自身で持つた。南駒頂上以後の食糧及び殘餘の餘裕食は共同荷物としてトランスポート隊で運んだ。南駒頂上以後は各パーティーは自パーティーの以後の食糧全部を持つた。

## 装 備

大して變つた點もなかつたから、品名を擧げて説明するのは省略する。只、八人用冬期天幕とカボック入りマツトとは若干の考案が加へられてあつたから以下に説明する。

### 八人用冬期天幕(附圖照參)

大體の寸法、及び入口の部分は何で見ると通りである。入口の張出へ玄關の様に内幕で仕切られた部分を作り、こゝはグラッドシートも無しにした。こゝは吹

二本支柱尾根型八人用冬期天幕設計圖大略 單位：尺

Fig. 1

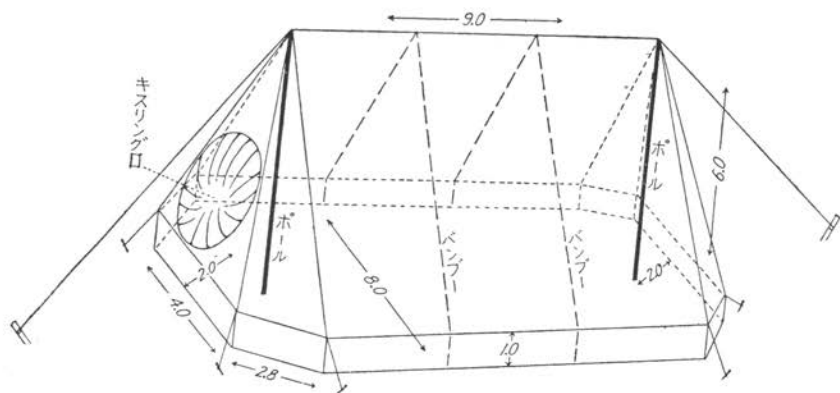
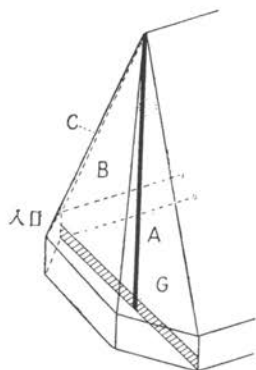


Fig. 2



§ B面へキスリング口

§ A. C. 面上部へ小型キスリング口通風孔  
(後方張出へモ2個)

§ 入口張出へハ内幕ヲ付ケズ ポールノ面内ニ垂直  
ニ下ゲ真中デ互ニボタンデ閉ジ下ハグラッドシ  
ーツト同ジクボタンデ閉ジル。

§ 入口張出ノ部分ハグラッドシーツナシ。  
Gノ部分ハグラッドシーツ上へ五寸程折り曲ゲ  
ル。

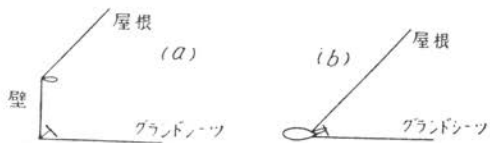


Fig. 3

木曾駒縦走に關する報告 (谷本)

雪かかれて入つて靴を脱いだり、飲料用雪塊を置いたり、寝る時ガソリンバーナーを出したりするに便利であつた。ポールは径八分の樫材を用ひた。雪にもぐのを防ぐ爲、下へ径三寸程の圓盤をはめるようにした。バンブーは圖の如く兩ポール間へ二本入れた。二張りの内試験的に片方へ藤を入れて見たが弾力が乏しく強風で逆に彎曲して駄目であつた。バンブーはボディーと内幕との中間に入れた爲、張る時若干の繁雜さはまぬがれなかつた。バンブーが棟とウォールの裾とに當る部分は稍厚い防水布の袋が縫ひ付けられてある。内幕とボディーとは短い棒と輪になつた紐でとじ付ける式である。入口のキスリング口は直径三尺の圓形である。通風孔のキスリング口は考へもので、厚い布で稍下向きに五寸程外へ向つて出した同筒形のものの方がよかつた。張綱は前後二本だけで側面への必要は無かつた。而し屋根の四隅へは可成り太い網を入れた。

周圍ぐるりと高さ一尺の壁が付いてゐるが、之は3

圖に見る通り折り疊んでも張れる様になつてゐる。ポールもバンブーも一尺だけ短くなる様にしてある。風當りの強い所でウォールから下を雪の中へ埋めることが出来ぬ處で張る場合を考慮に入れたのである。3圖(a)(b)に見る通りである。

ポール、バンブー等附屬品一切と共に重量は一張り六貫目弱である。兩側から足を交互に向けて八人は藥に寝れた。

ベースキャンプともなり移動キャンプともなる様にとの私達の要求に基いて作つた天幕であつて、この點満足に近いものであつた。八人かゝれば可成り悪い場所でも雪を切りはじめてから建て終るまで三十分で充分だつた。この旅で初めて使つたのであるから確かな性能は判らないが、南駒の頂上では何の遮る物もない稜線秒速二十米以上の風に一日一晚吹かれたがポールは微動だもしなかつた。バンブーの代りにした藤は風にあふられ片側だけが内側へ曲つてしまひ、その癖が後まで残つて困つた。この種のものでは竹が一番い

いらしいが、バンブー社のバンブーは天幕の内側の濕氣で糊着した所が離れる缺點がある。これは豫めゴムテープか針金で巻いて置くといふと思ふ。

雪に埋められた場合の強さは、この旅ではそれ程の降雪がなかつた爲試験にならなかつた。尙、この天幕以外にウインバー型のも使つたが、それは普通にある式であるから説明するまでもない。

#### カボック入マット

マットは一人當り一枚の割で持つた、幅一尺五寸、長さ五尺二寸。カボックが入る部分は幅一寸二分、それらの間隔は六分として軽量化を謀つたが、その爲に下の寒さが上ると云ふことは無かつた。カボックの缺點として非常に吸濕性で一旦濡らしたら容易に乾かないのであるが、軽い點に引きずられて使用した。同手法のコルク入りのものに較べて半分の目方で濟んだ。長期滞在のベースキャンプ等ではコルク入が優れてゐるのと言ふまでもない。

#### 結 び

私達にとつてこの縦走は多くの問題の解決點であり、同時に多くの問題の發生點であつた。即ち前者と目されるものには次の諸點がある。

一、冬期の食糧システムに一つの規準を得しこと  
二、連日の移動に適應する裝備の實地試験及びその結果に満足と自信とを得しこと。

三、冬山に於ける荷物負擔量の標準と自信とを得しこと。これは木曾駒程度の雪と岩の稜線でなら、平均八貫の荷物を持つてピッケルもザイルも使用し得ると云ふ自信である。この點で島々の人夫は物足らぬものがあつた。

その他私達の間だけで評價さるべき諸點は多々あるがこゝに書き連ねる種類のものではない。只、この縦走到に於て初めて冬の山に接する一年部員を五名加へたが、彼等が何の遜色もなく働き得たことを附記する。

これはパーティー單位制に依て始めて成し得たこと

であるが、將來の部員養成方法の見地よりして參考になることと思ふ。

問題の發生點としての縦走は次の諸點の適當なる解決の必要を以て私達に迫つてゐる。

一、パーティー單位制の價値。

パーティー單位制では一人の故障隊員が出た場合そのパーティー全體が動けなくなつてしまふ。それは延いては全パーティーによる協力活動に支障を來す。最初から確固たるパーティー制を採つてゐると

食糧、裝備の關係で、適宜なパーティーへの組換へは實際として不可能に近い。

二、前進天幕とベースキャンプ間に適當な通信方法の必要を痛感せしこと。

三、食糧システムの改良。

報告中食糧の項に見る通り、食糧システムはまだまだ改良の餘地が多分にある。以上が私達の「一の試み」の報告である。



# 一九三八年度米國隊のK2遠征報告

“ALPINE JOURNAL” “HIMALAYAN JOURNAL”

VOL. LI, No. 238 MAY, 1939

VOL. XI, 1939

C. S. ハウストン  
吉澤 一郎 譯

ヒマラヤ主脈の西北端に沿ひ凡そ百哩程の間、之と略々平行に走つてゐる小山脉、それがカラコラムである。主分水山脉に附屬する此の小従者は地球上に於て最も美しい、而も之を知るもの少なき幾つかの高峯を聳たしめてゐるのである。此の山群中の最高峯はゴド

ウィン・オースティン即ちK2(二八、六一米)であつて現在ではエヴェレスト(二九、〇〇二呎)に次ぐ世界第二の高峯とされてゐる。此の他にはプロウド・ピーク(二八、〇四七米)、ガッシャールム(二六、四〇〇呎)、マッシャールム(二五、六六〇呎)、ブライド・ピーク

(二七、六五四米)、ムズターク・タワー(二七、二八〇米)、ペンダーに據る)等の未登の巨峯が存在して居り、此の點よりしてカラコラムは、登攀者にとつてのこよなき樂園となつてゐるのである。

最初にK2の高度を測定した人は印度測量局のモン・トゴメリイ大佐であつた。一八六一年に、印度測量局のゴドウィン・オースティン大佐はカラコラムに入り、バルトロ氷河を探索した。彼こそは恐らく間近か(南方の基部)よりK2を仰ぎ見た最初の人であつたらう。ヤングハズバンドは一八八七年北京よりの大旅行

に際し印度への途上K2を距る三十哩以内の地點を通過した。マルティン・コンウエイ及びバロック・ワークマン夫妻もカラコラムの氷河並びに諸峯を踏査した。一九〇二年にはウエスリイ、ギイヤルモ、エツケンシュタイン及バンル等の一行が北東山稜より最初の攻撃を敢行したが、その果敢な努力も隊員の病氣と天候の爲めに約二〇、〇〇〇で退却してしまつた。

一九〇九年、不世出の、大遠征隊長の一人アブルツチ侯は大部隊を率ひてバルトロ氷河に入りK2の下に幕營した（山岳第三十二年第二號所  
「藏」カラコルム紀行「參照」）。四十日に亘る奮闘の間に彼はサヴォイヤ・パスの上、二二、八〇〇呎の地點に達した。急峻な岩の西山稜は此處から始まるのである。次に彼は二十哩東のウインディ・ギヤップに向ひ其處に於て東及び北東面を偵察した。最後に闘ひを挑んだのは今日アブルツチ稜と呼ばれてゐる南稜であつて、彼は二一、〇〇〇呎の高度（此の高さには疑問があるらしい—譯者註）に迄達したが時間並びに悪場の連続に逢着して退却せしめられたのである。彼の意見

に従へば西稜が最良のものとされてゐる。バルトロ氷河の地圖並びにヴィトリオ・セラの撮影にかゝる多數の寫眞は未だ之を凌駕せるものなく探檢記録の上に偉大なる貢獻をなしてゐるものである。

二十年の後、スボレット侯は他の大遠征隊と共に同地域の地理學的並びに地質學的踏査を行つたが、K2には觸れる事がなかつた。以來六隊程の探檢隊が各方面から此の巨峯に觀察の眼を集中したが、山頂攻撃を行つたものは一つもなかつた。斯くしてK2は登山家にとつては最高の問題となり探檢家にとつては一つの挑戦者と認められる様になつたのである。二年間の努力の結果、米國山岳會は遂にカシニミヤ政府よりバルティスタン地方への入國許可證を得（之にはカルカッタ駐在の米國領事エドモンド・グロウス、當時の米國山岳會長ジョエル・フィッシャー並びに一九三二年の最初のナンガ攻撃に參加し、今年度米國K2遠征隊長となつたフリッツ・ウィスナーの三氏に負ふ所多し）いよ／＼此の挑戦に立向ふ事となつた。一九三七年の十月となり、米國山岳會と





しての最初の遠征に對する諸計畫がはじめられた。山自身の侮り難き性質、光輝ある先驅者等の經驗した障礙並びに吾々自身の確信に従ひ、最初の遠征は原則として偵察の程度に止むべきものであるといふ事に確定したのである。三大ルートの研究並びに最良登攀路の精査、而して其の研究結果の完成後、選ばれたルートに従つて能ふ限りの高度に達する、といふのが吾々の計畫ではあつたが、吾々はこの綿密なる豫備研究以上のものを心の裡深く描いてゐたのであつた。

遠征隊の核心が纏ると次いで他の登攀者も集められた。多くの候補者の中から選ばれ、最後に隊を組織したものは私の他に左記の如き類振れとなつた。

Robert H. Bates (Philadelphia) アラスカに度々の登攀を行へるヴェテラン。

Richard I. Birdsall (Port Chester, New York)

ミニヤ・コンカ登頂者の一人。

William P. House (Concord, New Hampshire)

マウント・ワディントン登頂者の一人。

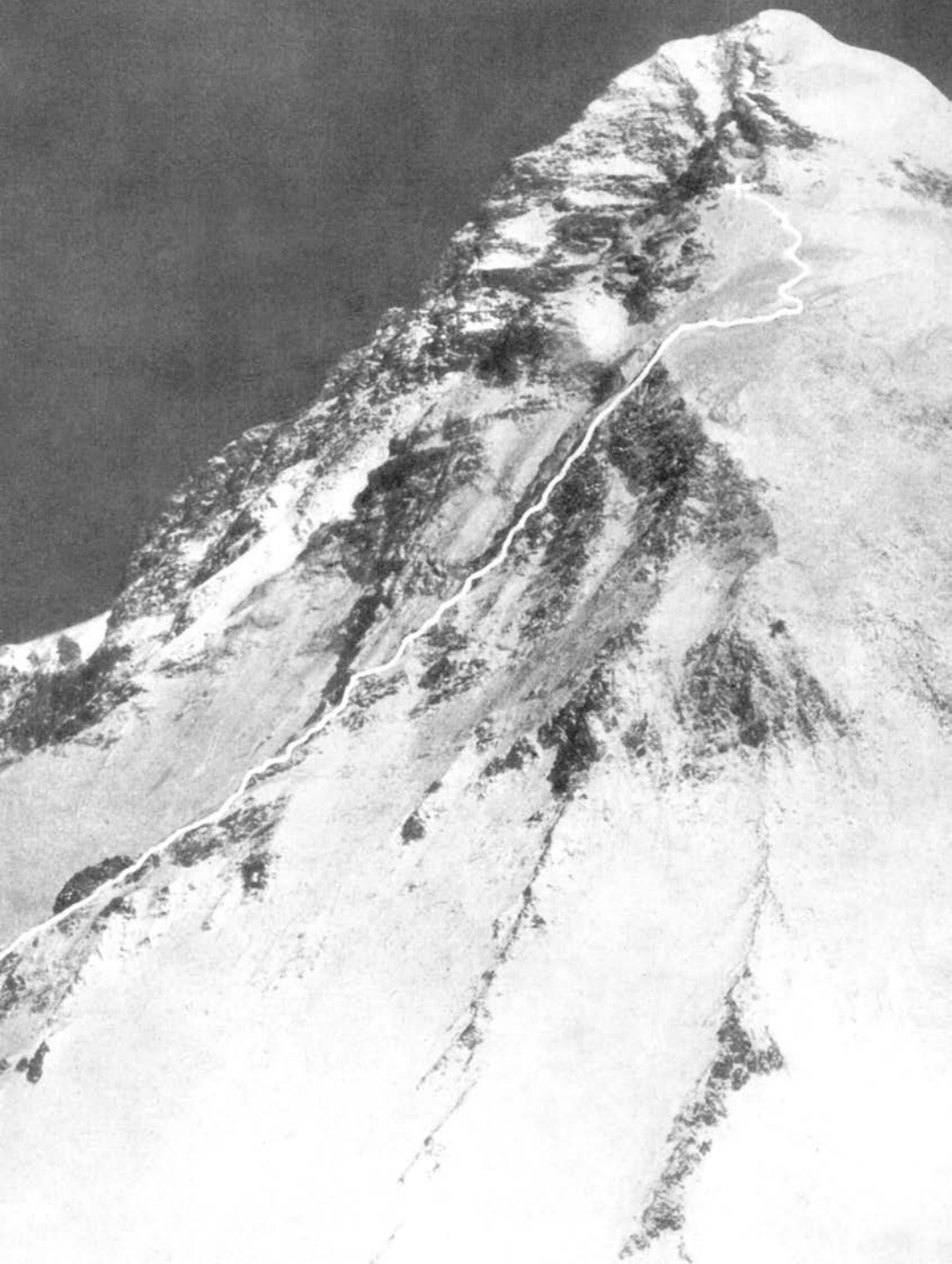
Paul K. Petzolt (Jackson Hole, Wyoming)

テトン山群に多くの優れたる登攀をなす。

印度政府がベンガル山岳砲兵隊付N・R・ストリートフィールド大尉に對し連絡將校としての同行許可を與へられたのは吾々にとつて最も倅せな事であつた。

カラコラムの天候に關しては種々の文獻、その他權威者について研究問合せを行つて見たが同一意見のもの一つもなかつた。モンスーンのはじまりを或る人は六月とし他の人は七月と云ひ、又K2へはモンスーンは來ないといふ人さへもあつた。カラコラムに於ける登山期は五、六月、六、七月、九、十月が最もいと云はれ全くどれが正しいのか取捨に迷つたが、吾々は都合のいゝ六、七月説を採用する事となつた。

冬の間食糧と裝備の購入を行つた。隊員の總てが小部隊の賛成者であつた爲め大部隊に必要なあの大量の荷物は整へなくともよかつた。六百人もの苦力を雇備してゐる遠征隊が今までにも澤山あつたが吾々は止



K<sub>2</sub>の南面, 1938年ルート, ×は最高到達地点

VITTORIO SELLA

サヴォイア・バス

西稜

K<sub>2</sub>

ネグロット・バス 22490

ブライド・ピーク 20974



Vittorio Sella

サヴォイア氷河源頭の一氷丘より望める K<sub>2</sub> の西側  
アブルッチ稜（南稜）は見えす

A

7  
6  
5  
4  
3  
2  
1

アブルツチ稜のルート（1938年）及びキャンプの位置

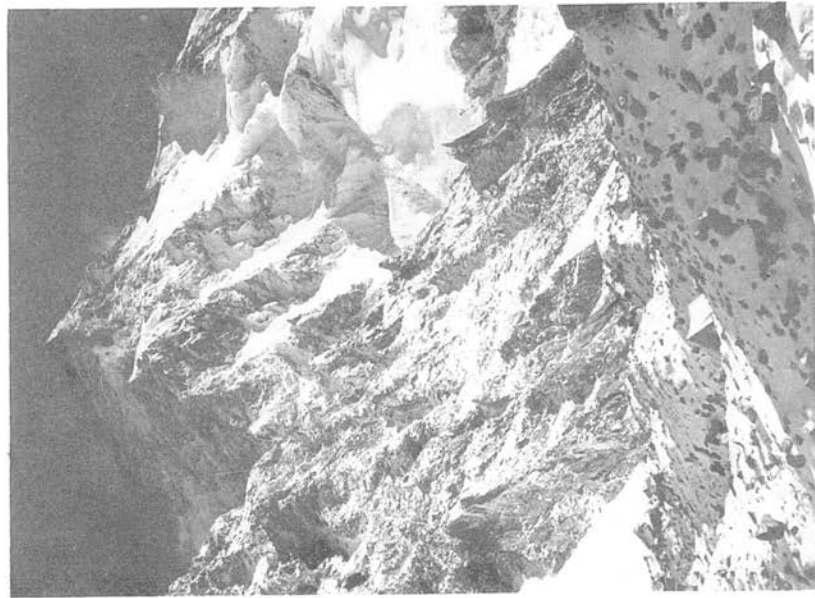
C. S. ハウストン

B

最高到達点（26,000呎）より仰げる K<sup>2</sup> の絶頂

P. ベツォルト

本誌発刊際にハウストン氏より直接譯者に寫眞を送つて來た。ABCD は其の内の四葉である。目次には載せられなかつたが間に合つてよかつたと思つてゐる。ハウストン氏の御好意を感謝する。



K<sup>2</sup>の南及びベイス・キャンブ

C. S, ハウストン



スキヤン・カンリ基部より K<sup>2</sup>の東面

C. S, ハウストン

むを得ぬものは別として他は極力節約をなし人夫は百人以下に限る事とした。數ヶ月に亘つて食糧裝備の準備を行ひ最後にリストを作つた。所がそれを見ると、羊毛製品はシッタランドから、寢袋と靴は英國から、チコレイトは佛蘭西から、ペミカンはデンマーク製のものとなつた調子で色々の國の代表者からなり、米國製のもののは残りの食糧と衣服であつた。

一九三八年四月十四日、吾々は遂にニュー・ヨークを後にした。食糧裝備品も同じP & Oラインで周到な計畫の許に運搬せられる事になつた。ボンベイでは印度政府から種々の援助をうけ、間もなく隊員、荷物の總てがカシユミヤに向つて出發する事が出来た。私は本隊とは別に尙二週間ニュー・ヨークに残つたがロンドンでロングスタッフ氏に會見してからカラチまで飛行機を利用する事によつて一行と同じ日にカシユミヤに著く事が出来た。シエルバ人夫六名がダーズリンから汽車で来る事になつてゐた。それはテイルマン氏に選擇を依頼したものである。その中にゐる人夫頭のパー

サン・キクリは一九三六年に私と一緒にナンダ・デヴィへ行つたものであるからその氣持ちなどもよくわかつて居り、私は彼の参加に期待するものが多くあつた。その他にはペムバ・キタール、ツェ・テンドラツプ、アング・ペムバ、ソナム・シエルバ及びピンスー・シエルパで、その殆んど全部がヒマラヤ遠征には經驗のあるヴェテラン許りであつた。パサンは此の内でも最も優れた經驗を持ち、私の知れる範圍ではカンチェンジュンガに四回、エヴェレストに一回、ナンダ・デヴィ、チヨモラリに一回、そして一九三四年のナンガ・パールバットでは最高キャンプから九死に一生を得て生還する事の出来た體験を持つてゐる。こういつたサーダーを頭にした六人の高所用ポーターの存在は吾々にとつて最も力強いものである事は瞭らかであつた。

ラワルピンディに於て五月十日、吾々の全隊員(ストリートフィールド、パサン及びその一隊、そして吾々の五人)がはじめて一ヶ所に集合した。吾々は荷物

の全部を二臺の貨物自動車に積込み一日がかりでジェラム溪谷をスリナガー（リにアクセントあり。スリは光、ナガーは都、即ち光の都の意）へと向ふ。其處で再整理の氣狂ひじみた三日間が続いた。荷物は一度全部ほどき分類し厄介なリストをつくり、ニュー・ヨークから持参した二重箱に糧食を詰込んだ。ガラクタ道具はスリナガーで買入れたがネドゥ・ホテルの前庭は之がため忽ちの内に熊の遊び場と化してしまつた。無茶苦茶の働きによつて兎に角五月十三日の朝には出發する事が出来る様になつた。自動車道を三十五哩行きそこにあるウォイル橋に著いた時、ストリートフィールドが豫め用意して置いた薄積ない馬夫と百匹許りの奇妙な山馬がゴチャ／＼と一塊りとなつてゐるのに出遭ふ。吾々は數時間かゝつて此の中から體裁のいゝ二十五匹の小馬を選び出し——全く向つ腹の立つ様な仕事だつた——シンンド溪谷に沿つた立派な道を通つて行つた。

五月十五日、吾々はカシユミヤとバルティスタンの分水嶺を爲すゾージ・ラ（三、五二七米）を踏える事と

なつた。時期は早かつたが幸な事に雪はさして深くなかつたので小馬の行進にも大した困難は覺えず無事之を踏える事が出来た。二日の後、ドラスへ下る途上、吾々は道傍にある岩の上に HUGA 1861-2-3 （ゴドウィステインの頭文字）と刻んだ有名な先驅者の記念物を眼に非非常な感激を覺えた。バルティスタンはカシユミヤに比して駭くべき對象を爲してゐる。一方は、水量多き肥沃な緑の牧場を、澤山にもつ溪谷を展開してゐるにも拘らず、バルティスタンの方は無味乾燥な剥き出しの岩許りの土地である。最初は此の風景にも可なり興味を唆られたが、その暑熱と口渴には忽ちの内參つてしまつた。然し幸ひな事に道路がよかつたので日々十二から二十哩の行程を拂らせる事が出来た。ドラス河を下つてシンゴにと辿り、五月二十一日その昔アレキサンダー大王が越したといふインダス河との合流點に到着した。此の邊のインダス河は米國のゴロラド位の大きさで軟質の岩を削つた深峽を爲し、その岸に沿つて所々に緑の耕地が點在し無味な山景に一沫



の潤ひをつけてゐる。此の可憐な緑地は干乾びた吾々の喉や咽喉に盡きぬ喜びのオアシスを提供して呉れたのである。先祖代々此處の住民は峡谷の壁に狭い階段を造り、麥、米、杏等の貧しい收穫を得、羊や山羊は村の上の丘に登つて僅かに自分達の秣を求めて生きてゐる。

最も美しい村の一つ、トルティの領主（小大名に當る）は吾々の到着を歓迎して二つの地方ティームによるポロゲームを見せて呉れた。食事の後でラージャと正式に會見し夕刻親切な言葉に送られて別れた。五月二十五日吾々には行程の第一段階たる一八五哩を完了し、バルティスタンの首都スカルヅーに著いた。此處は夥しい土造の家と堂々たる木造家屋が數軒とよりなる部落で、廣い砂原の上であり、毎日午後二時になると突然熱風が溪の下方から吹上げて來て村一體の地域を細かい褐色の砂の地獄と化してしまふ。吾々は此處に一日滞在し人夫の爲めの麥粉と砂糖を仕入れ道具の手入れを行つた。此處を離れると吾々はもう三ヶ月と

いふもの如何な小さな都會をも見る事は出来なくなる。夕方、立派な英語を話す快活なヒンヅー人たるバルティスタンの小領主が彼の新式な歐風家屋に吾々を招待した。完全なヒンヅー食で飽くなき吾々の食欲には持つて來いのものであつた。食後主人は自分の賞讃し且つ深く愛する住民達の習慣について色々興味ある話をして呉れた。翌朝吾々は文明世界から遙かに隔絶した此の部落での手厚い歓迎を後に出発しなければならぬ事を深く遺憾に思つた次第である。

此處で幅約一哩を有するインダス河を、アレキサンダー時代からあるといふ古い舢（舟）に乗つて對岸に渡つた。小馬どもも同じ舢に乗せられ、對岸を十二哩北上し緑野、ポブラ、杏の樹等に取圍まれた中にある可憐な部落シガアに進んだ。其處でもシガアの若い村長の保佐役をしてゐる英國の退職官吏の歡待をうけた。餘りの御馳走の爲め吾々は村のポロ遊戯場の眞中に張つた天幕に歸へるのもやつとの事であつた。シガアには三つの特産品がある。一つは糖分の多い杏、二は品質

は悪いが美しい硬玉、之は各種の調理道具の材料となる。最後は、女には餘りないが大部分の男の持つてゐる偉大な甲狀腺腫である。

翌日の夕方小馬道の終點たるユノに著いた。此處からはいよいよ荷物を土地の人夫に擔がせねばならぬ。然し此處の人夫は非常に頑固で、以前に支拂つたものより餘程高い賃金を出すといふ條件にも拘らず吾々の荷物の運搬を拒んだのであつた。長い争論とコーランによる夥しい宣誓の後に、ストリートフィールドとベイツの二人が皮の筏にのつて川を下りワジールに此の問題の解決を依頼する事となつた。二人の留守中吾々は村の上にある岩壁に登り連れて來たシェルパ達に難しい岩の上の綱捌きを教へてやつた。彼等は此の技術に非常な興味を覺え夜になつて天幕に連れ戻すのに骨が折れる位であつた。ベイツとストリートフィールドは三十日の夕方戻つて來た。強行の爲に随分疲れてゐた様だがワジールの副官一人を伴ひ且つ感銘的な紙片とそれにも増して印象的な棍棒とを持參して來た。數

分の後、彼は此の苦力問題を忽ちに解決して呉れた。吾々にも満足な解決であつたが苦力達にとつても満足らしく思はれた。

次の三日間吾々はブラルド峽谷の急な側壁に沿つて進んだ。或る時は川からずつと高い所を、又ある時は岸に下る爲めに急な崖を下りなどした。苦力の數は七十五人となり、従つて進行速度は鈍つたが彼等の足どりは驚く程確りしてゐて荷物はたゞの一つも失ふ事はなかつた。恐ろしい花崗岩の岩塔が急峻な峽谷の上に聳り立つてゐるこうした場所に於てさへ、土地の住民達はその支流に沿つて小さな綠地をつくつて居り、此の様な垂直の荒地に放浪ふ吾々にとつてこよなき喜びを提供して呉れた。

六月三日、吾々はヒマラヤの此の部分に特有な、植物の根と蔓とを熱ぢ足の支へには二十本熱りの大綱を引張つた巧妙な然し不安定な最初の綱橋を渡つた。手摺りには兩側に一本づゝの細い綱が渡してある。長さ六十碼以上もあり洵に危げではあるが案内夫で、

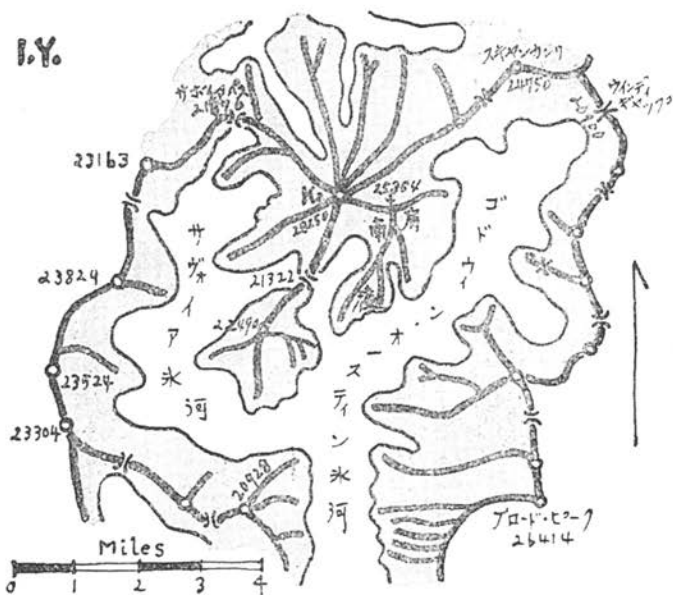
たゞ兩側の綱が一緒になり萬力で締めつけられる様になる缺點はあるが、まづ渡るには事かゝない橋である。此處で見た事件についてストリートフィールドの話聞いた後では向ふ岸につけたのが寧ろ不思議な位で全く以てホツとした。そして最後の數哩を歩いてアスコレーへ著いた。

吾々が數ヶ月の間待ち望んでゐたアスコレーは、大麥や小麥の段々畑が幾百とある中に數軒の土造小屋がある小さな村落である。ランバーダール即ち村長さんは非常に氣のいゝ男で吾々は直ぐ數百封度の麥粉を手に入れる事が出来た。前の七十五人の苦力はユノに歸へし、こゝでその代りに九十人の人夫を新に僱ひ入れる事になつた。アスコレーで吾々は遠征最初の挫折にあつた。ペツオルトが高い熱病とひどい背痛に仆れてしまひ、一日中天幕に残つてゐなければならなくなつたのである。夕方になつても良くなる氣配が見えなかつたので、彼が癒るまで私が附添つてそこに滞在し他大部隊はB・Cにその儘行進を続ける事に決定し

た。本隊は六月五日の朝、彼が數日中に全快して直ぐB・Cで一緒になる事が出来る様念じつゝ深い不安の裡に出發する事になつた。

斯くして次の三日間、本隊は山羊道の上を進み、第二の小さな苦力ストライキもどうにか片がつき、遂にバルトロ氷河の突端に辿り著く事が出来た。そこから本隊は下方バルトロ氷河の全表面を被ふ厄介な礫のモレイン上を進み六月九日の夕方、昔の山羊の牧場であつたウルドカスに著いた。其の間ペツオルトは忽ちの内全快して私と二人は二日行程を一日で飛ばしウルドカスで本隊に合する事が出来た。後で考へた事ではあるが彼の病氣は同地方に極めて普通にある Dengue 熱といふものであつた。然し其の時は何が悪くてそうなたかかさつぱりわからず吾々の間の不安は可なり深刻なものがあつた。

ウルドカスから再び氷河の上に出てコンコルディヤに進んだ。其處はゴドウィン・オースティン氷河が北から流れて來、バルトロと直角に交はる所で一大アム



フィシアターを形成してゐる。吾々は有名なムズタ  
イク・タワーやマツシャーブルム等の雄姿を見たい  
と思つたが雲が低くて目的を達し得なかつた。

或る朝の事、吾々は堆石の低い積を横切つた時ア  
ブルチ侯によつていみじくも述べられてゐる「萬船  
の谷」(Valley of ten thousand ships)の方へ眼をや  
つた。眞白な此等の氷の塔は平な、礫に蔽はれた氷  
河から引き出てゐて——中には二百呎程のものもあ  
る——宛で單檣帆船の一大艦隊を見る様である。之  
れの發生原因は今尙未解決の儘になつてゐるがバル  
トロ特有なものであらうと信ぜられてゐる。

同じ日に吾々はガツンシャーブルムの諸峯及び南方  
に當つてミーター(一六、〇一〇米)及びブライド・ピ  
ークを望み見る事が出来た。然しコンコルディアで  
は厚い雲のため長い間期待してゐたわれ等がK2の  
姿は見られなかつた。六月十二日の午後遅く小雪の  
降りはじめた頃K2の基部に達し、堆石の上の平地  
にB・Cを設置した。

長い行進の間にすっかり熟してゐた吾々の計畫もいよく實行に移されるのである。最初の目標は山頂から一直線にサヴォイヤ・パスまで落ちてゐる西稜にあつた。アブルツチ侯は此の乗越まで登つたが山稜の上

方を見る事が出来なかつた。然し侯は此の稜をK2山頂への最良のルートとしてゐる。吾々は乗越と山稜下部の完全調査に一週間を要する見込みであつた。それが濟んだら次は、反対側に廻つて北東稜を踏査する。之は上部ゴドウィン・オースティン氷河からせり上つてゐる長い氷と雪の山稜で、二二、〇〇〇呎の點で一度平となり、それから四分の三哩の、所々に氷塔が立ちはだかつてゐるナイフ・アレートが続き、最後に主峯の下に當る二五、〇〇〇呎の大きな肩に結合してゐる。此の北東稜で一番問題になるのはナイフ・アレートの部分であると思つたが、假令之を登り得たとしても全山稜の克服は長い困難な仕事とならう。最後に、兩者ともに失敗した場合にはB・Cから直接二五、〇〇〇呎の肩に登る急峻な南稜に注意を向ける事に

した。此の稜でアブルツチ侯は二一、〇〇〇呎の地點にまで達してゐるが、その長い厄介な登攀を最後まで続け得る望みはなかつた爲め引返して了つた。

B・Cの建設に降雪の二日を費してから小パーティがサヴォイヤ乗越に向け出發した。サヴォイヤ氷河の中頃にある雪をかぶつたクレヴァスの中に道をつけつゝ非常な困難を冒した後、吾々は天幕を張り、ポータ1とベイツ及びストリートフィールドをB・Cへ歸へした。K2の西面をなす巨大な急壁の下で尙二日の努力を拂ひ、二人の天幕を二〇、三〇〇呎の地點に張つた。バードソルとベツオルトは下のキャンプへ戻る。

ハウスと私は六月十七日の朝、急ではあるが硬い雪の斜面を乗越下の最後の斜面の根元へと登つた。そこへ著いて見ると上は傾斜五十度以上の蒼氷となりその上にゆるい雪の薄層がかぶさつてゐるのにはがっかりした。簡単な偵察ではあつたが、たとへ吾々が乗越まで登れたとしても——それさへも困難であり且つ危険であつた——荷を負つたポータ1には決して安全な場

所ではないといふ確信を得た。そこで吾々は戻つて天幕を撤收し急いでB・Cに引返した。吾々の留守の間にベイツとストリートフィールドは糧食の一部を氷河に登つた東北の方へ移してゐたので、六月二十日全員がそこへ集つた。此のキャンプから二つの隊が出發した、一つは北東山稜を總ゆる角度から調べ、他は谷の南側の岩壁を登つてK<sub>2</sub>の上部を遠方から偵察するのである。此間二隊の偵察の結果は二つともに香しいものではなかつた。最初の隊はウィンディ・ギャップの近くまで行つて北東山稜の全體を調べたのであるがナイフ・アレートの部分の困難さが此のルートの上への可能性を決定するものであるといふ結論に達してゐる。尙其の上、最後の峯頂は北東面からは直登不可能で二五、〇〇呎の肩からの凄いオーヴァーハングの氷壁を横切つて南面に出なければならぬ、此の威嚇には逆も堪えられ相もないとの事であつた。第二隊は特に南稜の上部を偵察したが、之は最初の五千呎は大した困難もなしに登り得るかも知れぬが二五、〇〇〇

呎の肩に達する最後の一千呎は登れたとしても非常な困難を豫想しなければならぬとの報告である。

六月二十三日、吾々はキャンプを其の儘にしてB・Cに戻り隊員の二人は殆ど一日中南稜の最初の一千呎の試登に従事した。其の夜B・Cでの食事の時に二人の報告を聞いたが之又氣乗りのするものではなかつた。假令相當の困難が続いてゐるとしても登攀の對象としてはさう酷しいといふ程の事もないが、そこには吾々の小天幕でさへも張る様な場所が一ヶ所もないといふ。濕つた重い雪が降つて來て吾々の落膽を一層大きなものにしその晩の吾々の意氣は全く沮喪してしまつてゐた。

然し種々と議論の結果、一番望みの懸けられるのはアブルツチ稜と呼んだ南稜にあるのではないかといふ感じがして來た。吾々は、サヴォイヤ・パスへ二度行つて西稜にとりつく色々のルートを試みて來たベツォルト、ベイツ及びハウスの報告に依つて、いよ／＼此の意見に一致する事になつた譯である。如何に無理な

考へを以てしても苦力達に適したルートは絶対に發見する事が出来なかつた。それに餘す日數も段々少なくなつてゐる。苦力達が戻るまでも三十日しか残つて居らぬ、而も天候はよくなる所か、七月に入れば益々悪化するに違ひないのである。

第二隊は北東稜の麓にあるキャンプに戻り何等の困難にも遭はず氷河の上一千呎許りを登りはしたが積雪状態の危険の爲めにキャンプを纏めて引返して來てしまつた。そこで吾々は全裝備品をアブルツ稜の根元へ移したがこゝで飛んだ目にあつた。といふのは大きな氷河卓グレイシャーテーブルが貴重な燃料罐の上に滑り落ちて來て唯さへ貧弱な残りの燃料の四分の一を失つてしまつたのである。ストリートフィールドは自ら進んで親切にも、一九三六年に佛蘭西遠征隊が残して行つた食糧と燃料をガツシャールムの下まで取りに行つて呉れる事になつた。それが旨く見つかるかどうかは甚だ心細かつたが、失敗した時にはシェルバ二人をアスコレーへ遣つて十人か十二人の苦力に薪を持つて來させる計畫を

樹てた。

六月の最後の幾日か、吹雪を衝き吾々はひどい氷河を二哩も越えて荷物を搬びC1を一七、七〇〇呎の地點に設置した。ベツオルトとハウスはアブルツ稜に長い偵察を行ひ約一九、三〇〇呎の所にうつてつけのキャンプ・サイトがあり、そこまでは何でもなく登れるといふ報告を齎し、吾々を喜ばして呉れた。今こそ吾々の問題は固まつたのである。六月の天氣は非常に不安定であつて、三日も晴天が続くと必ず二、三日の吹雪の日が之に伴つたが、今はどうやら落着いて呉れた様であつた。

吾々は攻撃の爲めの時間を空費しなかつた。荷物は毎日C1に搬ばれ、その間二人はヨリ高所へのルートを調査した。C2へ行くまでにシェルバ達は六つ或は七つの石の平地を發見した、之は瞭らかにアブルツ侯等のキャンプの跡である。偵察隊はその上で又風雨に晒された澤山の棒切を發見した。先人の努力の上に吾々の試みは基礎を置く、その先人の遺物こそは吾々

の志氣をいやが上にも振ひたゞしめるものであつたのである。七月五日になつてC2がすつかり出来上り、ルートも完全に固められ、C3も危げな場所に設置せられた。ストリートフィールドはガツシャブルムから空手で戻つて来た。それは佛蘭西隊が歸つたあとでアスコレーの苦力共が引返して貯藏物を一つ残らず掠めてしまつたからである。それから氷、風、雪の二日間が続いた。前進は不可能になつたが七月八日には全員C2に集まり澤山の荷物がC3に揚げられた。

七月十日、ベツオルトと私は他の者の力を借りてC3を二〇、七〇〇呎の地點まで引あげた。こゝで段々とルートは困難を加へて来た。吾々はC2に行く愉快な大して難しくもないガラガラな岩稜を離れて、二五、〇〇〇呎の肩から、下の氷河に一足飛びに落ちてゐる素晴らしい蒼氷斜面の西側をなす、氷と雪に蔽はれた急峻で滑めらかな一枚岩の方へ追ひ込まれてしまつた。荷を背負つたポーターの爲めに多くのピトンを打ち、澤山の綱を固定してやつた。C3は滑らかな面

から張り出した小さな稜の上の岩の平地に非常な骨折りをしてうち立てた。その上のルートは急な岩のガラ場を一直線に二、一五〇〇呎のC4まで續いてゐた。

之はC2とC3の間を登つてゐるパーティが、上方の隊によつて落される石の襲撃に對し全く曝しものとなつてしまふといふ事を意味してゐるのである。幸ひに何事もなかつたが、一度此の危険を経験したので安全のため吾々は一緒に行動する事となつた。そして又、輸送力が加はるといふ事は非常に必要ではあつたが、吾々の現人員では少し大き過ぎるといふ確信を得たのでバードソルとストリートフィールドはシェルバ三人を連れてB・Cに戻り、二人がやり始めてゐた寫眞及び平板測量を完成する事となつた。彼等を下へやる事は非常に淋しくかつた。然しこゝいふ高所では大部隊はどうにも扱ひ悪くかつたのである。

七月十三日、ベイツとハウスは、ベツオルトが物の見事にやつてのけた六十呎のジャンダルの直ぐ上にあるC4へ這入つた。次の日、ベツオルトと私及び三人



のシェルパがC4を固めてゐる間に、右の二人は恐しい岩の胸壁を攀ち、ひどく骨の折れる難かしい勞働の後にやつとの事でC5の場所を見つけ出す事が出来た。此の部分のルートには百五十呎の垂直のチムニーがあつて、兩方の壁はグズグズな岩、第三は氷の壁となつて居り、吾々の直面した最も恐るべき登攀であつた。之はハウスのチムニーと呼ぶ事になつた。

天氣は再び安定して來た模様であつた。ペツオルトと私は忠實なシェルパ達の力を得て五十封度の荷を脊負ひC3を撤收し、午後早くC4に達し、その儘直ちに突進する事に意を決した。七月十四日の夜C5に居たのは吾々だけで、他は皆下へ降つてゐた。

今や吾々の戦闘態勢は確立した。C2には五日間の糧食が貯へてある。C3は上からの落石を慮つて完全に撤收してしまつた。そしてC4には殆ど三週間分の食糧が保存してある。

困難はC5の上で直ちに始まつた、然し幾度かの失敗の後やつとの事で上方一千呎の直線ルートを發見す

る事に成功、C6を二三、〇〇呎の地點に設ける事になつた。C5に戻つたその夜、不安定な天氣は又變つてしまつた。翌朝、風と、吹き荒ぶ雲の中で吾々は荷を上へ搬ぼうとしたが三十分程で早や凍傷に罹りさうになつた爲め其の日は天幕に待機する事となつた。十八日は思ひがけない上天氣だつた。ペツオルトと私は荷を軽くして早朝に出發、間もなくC6に達してそこに荷を卸ろし上方の惡場に突撃を開始した。最初は矢張り難しかつたが、二時間後には恐ろしく手強いジャンダルムを乗切つて普通のガラ／＼の岩稜に出た。その間他の隊員は吾々のために別のキャンプを設けC5に歸つた。偵察の第二日は一層の好結果を齎した。晝前に吾々は昨日達した最高點を越え、アブルツチ稜の最後の一千呎の眞中に居たのである。

此處が全登攀中のヤマであつた。若し吾々が下からするとひどく手強さうに見える難所を乗切つて二五、〇〇〇呎の肩に出る事さへ出来れば二六、〇〇〇呎まで達する事にはかなりの確信が持てた。然し若しこの

最後の一千呎が吾々を撃退するならばアブルツチ稜は登攀不可能なりといふ事がきつぱり云へる事になるのである。今や輻合した雪の斜面とオーヴァハングの水壁とが、吾々を急峻なフェイスの狭い一點に追込んでしまつたからである。

然し天氣は吾々に新しい力を與へて呉れた。引續く困難も愉快に之を克服する事が出来、午後三時、二五、三四七呎と測定された地點の下五百呎、即ちアブルツチ稜の頂上に於て吾々は互ひに手を握り合ふ事が出来た。

尙前進を續けた、と直ぐ吾々は傾斜約四十五度、幅二百碼の硬い蒼氷の上を東へ横斷しなければならぬ事になつた。此のトラヴァースの爲めに一時間の足場切り、二本の水ピトンと固定綱を必要とした。そして錯綜した氷塊を切り抜け、深雪を踏み越えて出た所が二五、三四七呎の地點となつてゐた。数えきれぬ峯又峯、その中に吾々よりもまだ高く巍然として聳立してゐるのはつい一、二哩しか隔つてゐないブロード・ピ

ークの巨峯である。離れてはゐるがガシャールムも吾々よりは尙高い。遙か西南百五十哩の方に當つて見える此の世ならぬ姿のものはかのナンガ・パールバツトであつた。

吾々は周囲の大觀に夢中になつてゐる時間がなかつたので急ぎC6へ下つた。そこには既に吾々の留守の間に他の隊員が來てキャンプを固めてゐたので吾々は此等の人々の温い歡待をうける事が出来た。アブルツチ稜は完登された、そして山嶺と吾々との間には障礙物がない様に見へたのであつた。然しその夜吾々は最も重大な決意の必要に迫られた。

當時C2、4、5には可なりの糧食が貯へられてゐたが此のC6には十日以上のものは無かつた。吾々の克服して來た困難は増大してゐる、従つて下降にはどうしても上天氣を利用する以外に道のない事がいよいよ瞭らかとなつて來た。高所キャンプで吹雪にでも襲はれやうものならそれこそ絶對絶命である。如何な事情に於ても下降には上天氣でなければならぬ。吹雪

を衝いて困難な岩場を下降するのは重大な結果を意味するものである。C2以上で、吾々はビレイなしで動いた所は一つもない。従つて下降の際に於ける速度は一層に遅れる事とならう。ハウスのチムニーやペツオルトのジャンダルムで吹雪の中をお互ひが立停つたり集つたりするのは凍傷以外の何ものをも意味してゐないのだ。その上積雪でも深くなれば不可能ではないにしても危険は非常に増して来る。下降には絶対に上天氣が必要である。吹雪がどの位續くのか、それは尙疑問であつた。今までの所、吾々が経験して來た吹雪の大部分は五、六日で終つてゐる。然し七月中旬にはじまる長い悪天候、之は確かにやつて來るのだ、而もそれは何等の豫告もなしに襲ひ來るものであらう事もよく吾々はわかつてゐた。

今や安全な前進の最後の段階にある事は吾々の誰にも瞭らかであつた。前進してキャンプを持つ、それが果して正しいものであるかどうか、之が議論の焦點であつた。長い論争の結果、人員は二人日数は二日、一

日はC7を出て能ふ限り高い所まで登り、他の一日は引返す、といふ事に意見の一致を見た。若し吾々が遠征のはじめより遵奉してゐた訓戒に基き、安全な登山の範圍内にとゞまるべきであつたなら、之以上の方法はとれなかつたのである。ペイツとハウスの二人は犠牲的に、ペツオルトと私の爲めにC7を建設して呉れる事になつた。

七月二十日の朝、吾々は二人用の軽い天幕を用意した。登攀の技術的困難の大なるを豫想して吾々是不本意乍らもシュエルバ達をキャンプに残して行く事となつたが、パスンはどうしても残る事を肯じなかつた。それをしも拒む事は吾々には出来なかつた。遂に彼の同行を許し荷を與へ綱の一端に結んでやる事となつた。

他の二人は之がため悄然としてしまつたがパスンを連れて行く以外にはなかつたのである。他の二人は共に立派なポーターであつた。何事によらず喜んでやりしかもそれが出来た。が然し、かゝる高所に於ける第一流の悪場に對しては充分な資格は持つものとは云へな

かつた様である。下方の困難な場所にあつては吾々も全く彼等を信頼してゐた、ピトンヤカラビーナーに對する仕事は全く吾々の信頼を裏付けするやうなものであつた。然し増大した困難に搗てゝ加へた此の高度では如何にしても無理なものがある様に感じられたのである。

二十五封度の荷を負つた吾々の前進は遅々たるもので、正午になつてアルブツチ稜の頂上、即ち氷壁横斷地點に達する事が出来た。ベイツ、ハウス及びパサンの二人は暗くなる前にC6に戻らねばならぬので、こゝに荷を置き急ぎ引返した。ペツオルトと私は此の荷をトラヴァースで繼送し、約二四、七〇〇呎の地點に工合のいゝ野營地をつくり、それをC7とした。靜かな落着いた夜、吾々は明日への希望に胸躍らせつゝ寢に就いた。

午前八時出發。クランボンに冷くなつた爪先をひどく締めつけるのであるが、之はどうしても必要であつた。吾々は數時間に亘つて、或る所では歌かくて腿ま

でもある、又ある所では岩の様に硬い雪の上を攀じ登つて行つた。オーヴァーハングの壁のある大きなクレヴァスの所で止むなく急峻な軟い深雪の危い橋を渡つた。之を過ぎて登攀はいよゝ遅々として來たが晝頃にはどうにか二五、三四七呎の地點に達した。

吾々と絶頂との間には長さ約三百碼程の緩傾斜の雪面があつた。その内側の半分は小さな氷塊や、頂上の斷崖から毎日落ちて來る大きなセラックの斷片で埋まつてゐる。吾々は此の剥き出しの場所から急いで山頂下の岩蔭に行くより手がなかつた。山頂へのルートは確かにある。而も仔細に觀察して見るとどうも今まで以上の困難はないらしい。ペツオルトはほど二六、〇〇〇呎の地點或はもう少し高い所まで登つて引返して來た。

見得る限りの峯々は皆すつきりと蒼穹を切つてゐた。東方、トルキスタンの方角に當つて遙かに遠く恐らく二四、〇〇〇呎以上のものであらう、一體の水準を越えた峻峯の數々を持つ一連の山脈を認めた。西南

にはナンガ・パールバットの鮮やかな姿も望み見る事が出来た。プロウド・ピークも今は吾々よりもさう高くはなくピッケルを出せば届くやうな身近かに聳えてゐた。雲の一塊りがスツと下から吹上げて来て数秒の間吾々を隠した。深い静寂は最も印象的であつた。悲痛な諦めを以て二人は山巔に脊を向け下りにかゝる。

その夜ベミカンを攝り乍らベツオルトと私はもつと高く登つて見たらどうだらうといふ事を語り合つた。

山頂への見透しは實に誘惑的であつた、然し最後の結論は天氣への不常なギャンプリングをやめて退却する事こそが瞭らかに最も賢明なる方策であるといふ事になつたのである。吾々の失敗は、若しそれがあつたとなれば、B・Cを出る時にヨリ以上の糧食を持つて来なかつた事にある。然しヨリ以上の糧食を搬ぶといふ事は吾々が高所登攀に使用した時間を食ふ結果となり、いづれがいづれといふ事は云へないのである。悲んでも仕方がない、事情は切迫してしまつた、斯くして吾々の最後の決意は固められたのであつた。

翌朝C6へ下る時、クランボンとストーヴをアプルツ稜の一番高い岩の上に確りと残して来た。C6に於て吾々は他の隊員達と晝食を共にし殆ど全部の荷を持つて急ぎC5に下降、午後遅くそこへ到着した。然しそこで又、吾々はたとへ吹雪が突發しても、ハウスのチムニー以下の安全な場所に居るため、C4への直行を繼續する事に決した。數時間に互る劇しい勞苦の後吾々は懐しい二一、五〇〇呎のキャンプに這入る事が出来た。登りには途徼もない高い寂しい場所に見えてゐたC4も、今となつてはB・Cの隣り家の様な感じがしたのである。

朝、太陽の周囲には暈があつた、そして高い所には薄い雲が出てゐた。恐ろしい豫報である。一日吾々は重い荷を脊負つてC2への下降に奮闘した。ルートはひどく變つてしまつた、氷や雪の大部分が岩から落ちて川となつて流れてゐたからである。或る所は樂になつて居た、然し登りよりも餘程難しくなつてゐる所も多かつた。全隊員が午後遅くC2へ著いた時には全く

疲れ切つてゐた。張り詰めてゐた氣の緩むとともに疲労の感じが一度に襲ひ、退却を餘儀なくされた自分等の無力と無益な心配がドツと心を打つて來るのであつた。

翌朝バードソルが應接の爲め登つて來て、吾々はストリートフィールドの居るC1へと下つた。吾々が一所に會合した事は此の上ない喜びであつた。お互ひに他の身の上を心配してゐたからである。B・Cに於ける一同の話はそれからそれへと盡きる所を知らなかつた。バードソルとストリートフィールドは支那トルキスタンとの國境にあるウィンディ・ギョブに登り、數多くの寫眞撮影と平板測量の研究を行ひ、次いでコンコルディアに下つて同じ仕事に數日を費してゐたが、最後に二人はB・Cの周圍に幾多の測點を定め、吾々の同地域に對する知識を非常に豊富なものにして呉れた。

七月二十六日、今まで日毎に厚くなつてゐた雲が山の上方斜面を完全に隠してしまつた。然しまだB・C

には弱々しい陽光が當つてゐた。午後になつて一日早く人夫がアスコレーから到着し、吾々を驚かせたのであつたが、一同は直ちに天幕をたゞむ事とし、降雪の氣配もあつたので翌る早朝出發の手筈を整える事となつた。K2に脊を向け、幾週間の長い間を慣れ親んで來た此の地を去るのは洵に悲痛な思ひである。

五日後吾々は無事アスコレーへ著き、そのラムバダーたる舊友に迎へ入れられた。嬉しい吾々への便りも山と積まれて待つてゐた。それから吾々は長いブルツ峽谷を通らず、一六、〇〇〇呎のスコロ・ラを踏えてシガーへと出た。峠の頂上では吹雪に遭つたが午後になつてシガー溪谷の花に被はれた斜面に出るに及び心よい陽光を浴びつゝ愉快な行進を続ける事が出來た。翌日その河床で吾々は熱れた杏に舌鼓を打つた。スカルヅでも澤山の手紙が待つてゐた。そこから小馬を備ひ入れてデオサイ平原を通つてスリナガーへと向つた。此の平原は高さ約一三、〇〇〇呎、臺皿の如き形をなし、雪の爲め七月中旬までは通行不可能

であるがカシュミヤへ行くには涼しい一直線な興味あるルートとなつてゐる。吾々は数日に互る向ひ風の爲め嫌な蚊の襲來からも免れて、安らかに陽光と花の中心を進む事が出来た。尙二日間ギルギット道を愉快に行進し、思ひ出深いバルタル峠を踰えて八月の六日にいよ／＼スリナガーに歸着した。疲れた身體、ポロポロの衣服、而も吾々は吾々の冒険の終りを悲んだのであつた。

× × ×

振りかへつて見るとそこには強調するに足る数多くのものがあるやうに思ふ。小遠征隊主義に對する大遠征隊主義の問題を再びとり上げる事は今更無用であらう、然し私は前者の利點の一つをあげて見る。吾々が當面したやうな急峻なポロ／＼の岩場を多少とも直線的に登らなければならぬ様な場合に於て、先頭と殿りとの間に數百呎の距りがあるとするとその危険は實に瞭らかである。六人から十二人の人間を一緒にして而も各人が一々ビレイを行はねばならぬ場合パーティ

の登攀速度は著しく制限されてしまふ。ポロ／＼な岩場にあつて急な直線的ルートに安全を期するならば小さく固まつた隊を必要とする。

B・C及びそれ以上の四十四日間及び四十二日の往復に對する糧食はベイツと私が以前の経験によつて計畫し持参したものに依存した。今回はそれにヴィターミンを加へなかつたが隊員中にその爲めの不足疾患に罹つたものは生じなかつた。隊員中の大部分の者は兵站部の趣向に對し時に反對した事もあつたが、全體が反旗を繯へす様な事は一度もなかつた。吾々の食慾は二四、〇〇〇呎までB・Cに於けると同様旺盛なものがあつた。高度病に罹つたものもなかつた。日記をつけたり、活動寫眞をとつたり、或は高級な知的仕事を爲し得なかつたといふ失敗を除けば二六、〇〇〇呎に至るまで特に高度による影響は認められなかつたのである。

スリナガーからユノまでの運送には平均二十五匹の小馬を要し、ユノからアスコレーまでは小馬の代りに

七十五人の苦力を備入れ、最高九十人の擔夫が居たのはアスコレーとB・Cの間の數日にしか過ぎない。尙遠征中の全期間吾々と行を共にしたものはグージリンからのシュエルバ六名それにカシュミヤからの三人だけである。シュエルバに對しては只最高の賞讃を送る、彼等は眞にその名に相應しい登山家であつた。と同時に吾々にとつての立派な同僚であつた。カシュミヤからの三人のシカリ(職業的獵師)は或は贅澤であつたかも知れない。然し彼等は料理人、從者その他として仕へB・Cに於ては殊に有效な存在であつた。

K2は確かに登攀可能である。一九三八年の六月及七月に於てはサヴォイア・パスの悪雪のため西稜の登攀は全然問題外であつた。吾々は既にアブルツチ稜が二六、〇〇呎までは登攀し得る事を瞭らかにし、且つその上山頂までには下方程の困難のない事を示した。吾々は、若し容易且つ安全にサヴォイア・パスに達し得た場合、それから上の西稜を不可能なりと之を排斥する程の知識を持ち合せぬとしても、アブルツチ

稜こそは吾々が採るべき最良のルートである事を信ずるものである。吾々の目的(偵察)は完全に成就された。そして道は見出されたのである。幸運の神の微笑みさへあれば第二隊の登頂は疑ひない所であらう。北東稜は三者の内最も拔ひ悪きルートである。

斯くの如き偉大なる處女峯に對し攻撃を敢行し得た事は、吾々にとつて極めて稀な特權であつた。世界第二の巨峯に近き未知の地域を旅する事、錯綜せる偵察の問題を開明し、最後にその山頂に向つて堅固な鏡り合ひを強行する事、之が無上の機會でなくて何であらう。其處にあつての最高の努力、結成された不滅の友情、之等への追憶はこの遠征をして吾等總ての者に忘れ得ぬ思ひ出として残つて行く事であらう。

(K2西面の寫眞は舊理事飯塚篤之助氏より拜借、又ヒンツー語に對する註解は、ジョン・モリス氏に負ふ所なり。記して兩氏の御好意を謝す)



# ヒマラヤ探検史の一齣

ケニス・メイスン  
望月達夫 譯

(譯者序)ヒマラヤの探検史を何時の時代から始めるかは中々困難な問題であり、又その取扱方に依つては相當異つた見解も生じるであらうが、その近代的探検の歴史はほゞ十九世紀の初頭からとして大した誤りは無いやうに思ふ。そして十九世紀の中葉以後今世紀の初頭へかけて、ヒマラヤ探検史上忘れることの出来ない輝やかしい業績は、印度測量局に屬してゐた人々の測量、踏査、探検と、それを援け尙且實際にその手足となつて働いた多くのバンドイット(印度のサンスクリット學者)達の偉大な仕事であらう。併しこのバンドイット達の足跡は、唯古い印度測量局の報告書中に残されてゐる以外今日では手近に緋く可き書物も稀であるが、幸ひジェオグラフィカル・ジャーナル中に彼等の探検の模様を纏めた一文があるので爰に譯出した次第である。筆者メイソンは人も知るヒマラーヤン・ジャーナルの

ヒマラヤ探検史の一齣 (望月)

卓越せる編輯者であり、今日ヒマラヤの歴史、地誌に關する第一流の識者でもある。原文は "Kishen Singh and the Indian Explorers" (G. J. Vol. LXII, Dec. 1923, pp. 429—440)と云ふ題名であるが、内容がヒマラヤ探検史の重要な一節である故標題の如く替へた。尙「日本山岳會々報第八十三號」附録の「ヒマラヤ及カラコラム主要山岳圖」(吉澤一郎作)は本稿にかなり役立つことと思ふし、又スウエン・ヘディンの「トランス・ヒマラヤ」の一節(邦譯—高山洋吉譯「西藏探検記」二三七頁以下)にはバンドイットの探検に就き興味ある敘述のあることを附言する。

一九二二年二月、かの印度探検家の最後の存命者たりしバンドイット Pandit のキンシェン・シン Kishen Singh (別名はクリッシュナ Krishna 印度測量局の記録

には「A-K」と記さるる）はこの世を去つた。彼の死によつて印度測量局及其の亞細亞探検史に於る浪漫的ロマンチックな頁はとざされたのである。爰に、彼の地理學上に残した功績を抄録し、又彼及其の同時代の探検家に依つて齎あづからされた知識を概述することは意義深きことと思ふのである。

キシエン・シンは一八四〇年代の初頭クマオンのミラムに生れた。彼の生家は、他の如何なるものより亞細亞の地理的知識の開發に功獻せる、有名なる家柄であつた。かのモーアクロフト Moorcroft 及ハーゼイ Hearsey がマヤプリー Mayapuri ハルギリ Hargiri と僞名し回教徒に變装して、一八一二年フンデス Hundes ガルトツク Galtok の地方を訪れた時、此の二人を救ふに最も盡力した者こそ、彼の父デヴィ・シン Devi (又は Deb) Singh と叔父ブル・シン Bir Singh (共にダムウ Dhannu の息子なる)とであつた。此の二人の探検家は西藏で囚人として取扱はれ、マナサロワール湖 Manasarovar の北八十哩なるダバ・ゾン Daba

Dzone に抑留されてゐたが、デヴィ及ピルの二兄弟の口添へと努力とにより間もなく釋放されたのであつた。モーアクロフト等の署名せる二枚の書類は今日も尙残つてをり、それには彼等の救出者の努力を裏書するが如く、「一八一二年八月二十五日、支那韃靼タイベーター、モンゴリアのダバ近きヒマチャール Himachal 山脈の北麓にて」と記されてゐる。

次いで此の家の記録は、一八五四年から五八年に互つてなされた、かのシュラギントワイト Schlagintweit 兄弟の亞細亞高地への科學的旅行の探検記の中に殘されてゐる。即ちシュラギントワイト等は、「曾つてストレイチイ Strachey 等が西藏旅行中に伴つたことのある」デヴィ・シンの息子のマニ Mani 及びマニの親戚に當る「氣立ての良い知能ある土着人」のナイン・シン Nain Singh を通譯として伴つた。この二人こそ、後日印度測量局に於てその右に出づる者なき二人の「パンディット」となつたのである。

印度の邊境地方を踏査する場合、有能な印度人を同

伴すると云ふ觀念は、モントゴメリイ Captain T. G. Montgomerie が、そのカシミール踏査を終へんとする一八六一年の頃、彼の心中に形造られてゐた。國境山岳地帯の正規の測量はその當時としては、尋常な手段で爲し能ふ殆ど極限に迄達して居ることを彼は知つた。カシュガルに於るアドルフ・シュラギントワイトの殺害(一八五七年)、一八六三年に勃發したタンガンの Timgun の叛亂による支那トルキスタン全土を覆ふ不安な状態、西藏の恐ろしい迄の隔絶性、インダス溪谷に於ける住民の ワフ・フライシム 狂信と歐洲人に對する彼等の敵意、ブンザ Hunza やナガール Nagaur 地方の土民のもつ先天的な掠奪性、之等の事情を深く省察したモントゴメリイは、この地方の地理學上の知識を更に推し進めるには何かもつと別の方法を見出さなければならぬと思ふに至つた。

その時代には、この邊境を越へた彼方の地圖は殆ど空白であつた。その國境附近に於てすらインダスに沿ふた或る地域の測量は着手されてゐなかつた。確實な

見窮めなくしては、歐洲人はこの地域に足を入れることが出來ず、又印度政廳もかゝる企てを嚴に禁止してゐた。だが之等の禁令を冒して一つの記録的な擧がなされた。一八六五年ジョンソン Johnson は和闐に於る謀叛せる主權者を訪れると云ふ著名な旅行をなした。彼の旅行の成功は、彼に僅かの懲戒しか齎らさなかつたが、かゝる企てに對する政府の禁令は従前通り繰返へされたのであつた。

モントゴメリイは、訓練を受けた有能な印度人を使用することにより、若し必要ならば彼等を紛裝させることによつて、偉大な地理上の成果が得られるものと思ふに至つた。西部地方では、南、ブラック・マウンテン Black Mountain (譯註・カラコラム) から北、ブンジ Bumji に至る地域、及インダスの河谷は未踏査であり、ギルギット Gilgit チトラル Chitral チラス Chilas は未探檢の地域であつた。ゴドウィン・オースチン Godwin-Austen が一八六一年になした測圖には、ブンザイ川 Hunzay R. の豫測流域が東から西に流れ

るものと記されてゐるが、更に北方には一大支流が在るに違ひない。一八三八年に於る、ヴィクトリア湖へのウッド Wood の旅行は、パニール高原 Plains 研究の唯一の近代的根源となつてゐる。ロシア人の指示せるカシユガルの位置はシュラギントワイトの指適した處とは違つてゐるし、又シュラギントワイトの示せるヤルカンドの位置は、モントゴメリイの確認した處と二〇〇哩も離れてゐた。和蘭は、一六〇四年ベネデイクト・ゲッツ Benedict Gees が旅して以來、唯一人の歐洲人も訪れたことはなく、西藏内奥はボーグル Bogle ターナー Turner マニング Manning アブド・Hue の旅行以外には全く知られず、ましてや地圖も全然作られてゐなかつた。拉薩の位置は唯臆測によつて僅かに知れるのみで、全てが神祕と幻想とに包まれてゐた。そしてツァンポー河 Tsampo の極く一部分のみが臆ろげに作圖され、インダスの源流やその支流は、モーアクロフトの日記や、ストレチイ、シュラギントワイト、カンニング Major Alexander Cunningham

Cham トムスン Dr. Thomson 等の觀察に依る以外には、多くの地理學者が不問に附してゐたし、又西藏の西部も隔絶と排他主義の土地と見なされてゐた。之等の困難な問題に對しモントゴメリイは敢然と戦ふ決心をなした。そして彼の努力の結果神祕なヴェールは次第に剝がれていつた。彼の建議により三角測量部 Great Trigonometrical Survey の長官 Superintendent たりしウォーカー少佐 Major J.F. Walker (後の大將) が懇切な支援を與へて呉れた。そこで一八六二年五月八日、モントゴメリイは印度政府に對し、探検家養成費として一千里の支出を請うた。かくてその候補者は嚴密な選擇の後一ト月一六乃至二〇ルピーの給料で雇はれることとなり、又醫藥や商品を購入する爲に經費は次第に膨脹していつた。又之等雇はれた者の報酬はその成し遂げた仕事の價值によつて割前を増やされることになつてゐた。彼等は若し必要とあらば、銘々勝手の變装をなし、又その習得した知識を大膽に驅使し、その赴む可き土地の状態に従つて活用

することゝなつた。

ミラムのボーティア族 *Bhoias* から選抜したのはウォーカーであつた。「ザ・バンディット」と云はれたナイン・シン及彼の従弟マニ・シン (G-M) は、教育部 *Education Department* のスミス少佐 *Major Smyth* に推薦せられ、ウォーカーに雇はれてデラ・ダン *Daira Dun* に派遣された。この二人は始めウォーカー自身に依り、次いでモントゴメリイによつて訓練され、その才能に加へるに熱意と興味慾とは、速やかに効果を表はし、六分儀とコンパスの使用を覚え、重要な星座の知識も得たのである。一八六四年の末葉に至つていよく實踐に移されることゝなり、先づクマオンから西藏に這入ることが企圖されたが之は失敗に終つた。翌年、ネパールを經由する第二の計畫が實行された。豫想通り此の旅行は非常なる困難に満たされた。ナイン・シンは、拉薩に連行してくれると約束した或る商人にその所持金全部を托したが、途中で彼に騙され、全く無一文で取り残されて了つた。仕方なくこの二人

の探検家は別々に分れて行動をとることゝなり、結局ナイン・シンは西藏入國に成功した。彼は變装してツァンポー河畔のトラドム *Tradom* に至り、ラダーク *Ladakh* から拉薩へ至る隊商に加はつた。かくて一八六六年十二月十日拉薩に辿り着き、そこで會計の教師をして僅かの生活の資を得、遂に往路をとつてトラドムに歸り、其處からマナサロール湖の畔を通つて印度に歸還した。一方彼の従弟は西藏入國に失敗してネパールから戻つたが、歸路ナイン・シンが隊商の指導者に托した金品を取り戻さんとしてガルトツクの地方に寄り道して歸つたのであつた。

此の旅行の成果は、かゝる企ての可能性に對する政府の注意を喚起した。南方の商路はかなり詳細に地圖に記入され、「西藏の大河」の流域約六百哩が踏まれて、その貴重な報告が贏ち得られた。その大河こそブラマプトラに違ひないと云ふ強固な理由が擧げられ、後に幾度か疑問視された事實も、次第に證明されていつた。金鏹の物語は拉薩に於て、又ガルトツクに於て

語られ、之迄全く知られなかつた西藏の街や道路に關する尨大な説明は、更に將來の企圖に對して重要な役割をなした。ナイン・シンのこの旅行は、西歐地理學者の普く賞讃の的となり、彼は印度政府から多分の報酬を得た上に王立地學協會からは金時計を贈られたのである。

かくて更にモントゴメリイ及ウォーカーの提言は印度政府の容るゝ處となり、第三のパンディットなるカリアン・シン *Karian Singh* (1815) <sup>(四)</sup> 即チナイン・シンの兄弟なる者が選ばれて、一八六七年の初頭準備が進められた。この旅行の目的はサトリヂ川 *Satlej* の水源を踏査探索し、この地域の地圖と一八六四年に成就されたラダークの正規測量地域の最東部とを連結し、インダス川の東方に在るその一支流の存在に絡る疑問を究明し、ガルトツクの東部及東北部に在ると報ぜらるゝ金鑛地域を探検することであつた。

三人のパンディットは此度はバシヤリイ *Bashahri* の商人の紛裝をしたが、之は或る意味で失敗であつた。

と云ふのは、彼等は知らなかつたが、先年之等の商人によつて西藏に天然痘が輸入され、その爲に拉薩政府は嚴命を下してその入國を禁止したのであつた。その故に一行は猛烈な迫害に遭ひ、一時は計畫の挫折が不可避免なものに思はれた。が之等のパンディットは忍び得べき極度を以て辛抱し、彼等に托された仕事を遂にやり通した。トクザルン *Thoklung* と云ふ主要金鑛を訪ねられ、インダス源流に注ぐ二本の大支流がその全長に亘つて地圖にゑがられ、歩行々程八五〇哩から又その七十五ヶ所から測量された一八、〇〇〇平方哩の廣大な地域が偵察されスケッチされた。そして前の遠征により發見されたガルトツクの位置は、誤りなしと確認されるに至つた。<sup>(五)</sup>

この旅行の後ナイン・シンは暫くの休養を必要とするに至つた。彼は三年間を非常に苦勞多い状態の下に旅行し探検して來たのであつた。そこで彼はその力を新らしい探検家の養成に傾注することゝなつた。それから一、二年間に雇はれた者の中に、キシエン・シン

が居た。彼はミラムのデヴィ・シンの息子でナイン・シンの従兄(六)であり、測量局の初期の文書の中にクリッシュナと見えてゐる者である。西藏探検中には「ズ・パンディット」(六)として知られ、彼こそ遂にその師なる「ザ・パンディット」より遙かに大いなる名聲を得たのであつた。彼の能力を試すべき一八六九年の最初の探検中、カタイ・ガアト Kathai Ghat からコシヤルナート Kholjarnath を経てカルナリ Karnali に横断し、更にラカス・タル湖 Rakas Tal を経て、ミラムに歸へつた。(七)

一方ナイン・シンの初期の探検を擴張する爲に、更にパンディット達が雇はれた。第三のパンディットなるカリアン・シン Chien は一八六八年に、スピテイ Spiti から未知のチムムルテイ Chumurti 及グウゲ Gunge 西藏最西部を横断し、タシゴン Tashigong でインダスを渡り、拉薩程には隔絶してゐないルウドック Rudoik の聖都に到着した。そこで再度バシャリイ商人に變装して、金鑛を通つて拉薩に達せんとしたがシガツツェ Shigatse で捕はれ、送り歸へされた。しかし僥倖にも

トラドムで釋放されたので、ムクティナート Mukti-nath を経、ネパールを通つて印度に歸へつた。この旅行ではじめてナイン・シンの通つた地方が再度確認され、連絡づけられた。(八)

同年エヴェレスト山群の探検が始めて敢行された。

その探検家の姓名は今日では知られてゐない。がその者はこの山群の北方に潜入し、そこで西藏人に捕へられてティンリイ・メイダン Tingri Maidan に送り歸へされたことが僅かに知られてゐる。(九)一八七一―七二年にはハリ・ラム Hari Ram (M-H) がダーズリンから北進してシガツツェに達し、そこからポーティア・コシ Bhotia Kosi の峽路によつて、マウント・エヴェレストの西方六十哩の地點でこの大山脈を越え、カトマンズ Katanadu に辿りつた。そこから更にスン・コシ Sun Kosi の流れに沿ふて八十哩東進し、遂にダーズリンに歸還した。この探検は、印度、西藏の分水山脈の外貌を僅かながらでも指示し、尙それがかの大山嶺の北に位することを明らかにしたことに於て

特に價值高いものであつた。かくしてエヴェレスト山群の完全な一周がなされ、この地域に關して多くの興味ある説明が得られたが、この探検家は常に高峯に取り捲かれてゐたので、彼が確かにかの巨峯(エヴェレスト)を見たと言ふのは餘りあてにならない。<sup>(十)</sup>

この時代の印度探検家が總じて“the pandits”として知られてゐたが、その總てがヒンヅー教徒であつた譯ではない。又西藏のみがその活躍の舞臺であつたのではない。遙か北西地方に於てマホメット教徒の探検家によつて成遂げられた仕事も同様に價值大なるものがあり、しかもそれは一般に餘り知られてゐないのである。それは、之等の不穩な地方には何等神祕の覆ひがなく、又その故に一般的な興味を引き起さなかつたからであつた。にも拘はらず西藏に於けると同じ様な危険が存し、又地理學上の重要な成果が成就されたのであつた。

之等の探検家の中で先づ擧げらるべきは、一八六八年に活動を開始したミルザ・シユジャ Mirza Shuja 即

ち「ザ・ミルザ」“the Mirza”であつた。彼はベルシヤの生れで、ヘラート Herat の有名な防備の間にポッティンガー少佐 Major Eldred Pottinger の下で働いてゐた。ポッティンガーは彼をカブウル Kabul に連れてきたが、そこで彼はコリン・マッケンゼイ Colin Mackenzie に教育された。アフガン語、ペルシヤ語に對する彼の知識と彼の得た測量上の訓練は、彼を探検事業にとつて最も好適な人物になした。ウォーカ―とモントゴメリーの推薦により、政府は「喜んで彼の意見を受入れカシミール地方の地理的作業に用ひんとした。」が實際には此の時用ひられず、カブウルに歸へつてきて、暫らくアフガニスタンの君主 Amir なるシエル・アリ Sher Ali の子供達の家庭教師をしてゐた。併し一八六八年に至つて、彼の君主の一時的な廢位期間の後、彼は再び印度測量局に加入し、北部アフガニスタンを経、バミールからカシュガルに至る長大な探検旅行に出發した。<sup>(十一)</sup>そしてその第二回目の遠征(一八七二―七三年)に際しヘラートから無事にマイマ



ナ Maimana に到着し、ボクアラ Bohara へ向ふ途中で、一夜睡眠中彼とその養子は、案内者共の裏切りに遭つて殺害されて了つた。

地理上の見地から考察するに、北部地方に於るマホメット教徒の探検中最も興味深きものは、アタ・マホメド Ata Mahomed 即ち「ザ・マール」"the Mullah" の探検であらう。彼はペシヤワル Peshawar の生れで、アラビヤ語に精通し、且一八六九年スワト Swat で殺された或る印度人工兵の兄弟であつた。一八七三—七四年に敢行されたその第一回の探検旅行で、彼はジャララバド Jalalabad からディール Dir チトラル、マステュジ Mastuj を通り、バロギール峠 Baroghil からタクシユクルガン Tashkurgan ヤルカンドに達して<sup>(十二)</sup> イングスの未知なる流域の究明に力を盡した。一八七六年にはマール Mullah (譯註・マホメット教の神學者)としてインダスの荒涼たる山峽に沿ひて潮りヤンシン Yansin 地方を探索して後、ブンジに達した (General Report, Survey of India, 1876-77)。それから二年後に

はスワトの材木商に變装してこの地方に潜入踏査し、そこからバルザール峠 Balazar を越へてインダスの支流カンディヤ Kandia に沿ひ、遂にインダスの南方に大きく屈曲する近くでそれに合して、前に彼が成遂げた仕事と連絡を附けたのであつた (General Report, Survey of India, 1878-79)。かくて今日に至る迄吾々の所有するこの地方の地圖は大體彼の踏査の結果によつて作られた儘である。

更に今一人のマホメット教徒の探検家は以前の者より更に有名である。ハイダー・シャー Haider Shah 即ち「ザ・ハヴィルダー」"the Havildar" は一八七〇年八月に彼の測量を開始し、この時ペシヤワルからディール及チトラルを経てファイザバド Faizabad に到達した (General Report, Survey of India, 1870-71)。次いで一八七二年には路上測量を行ひつゝ、カプウルからボクアラに至つた。<sup>(十三)</sup> そして彼の三度目の即ち最後の遠征は、多くの探検家の場合と同様地理學上に最も重要な功績をなしたのである。一八七三年十一月

カブウルを出發して、彼は新路を採つてファイザバドに至り、そこからルスタク *Rustak* 及サムチ *Sami* を經てクラブ *Kulab* に達した。クラブからダールワアズ *Darwaz*、ローシヤン *Roshan* 間のオギユス *Ogis*、河畔ヤズグ *Yazghulam* に旅した。<sup>(十四)</sup>更にそこからカブウルに引返へし、重要な諸ルートを横斷して一八七四年十二月二十八日にカブウルに歸還したのである。<sup>(十五)</sup>

此の時代の總ての探検家の旅行を詳細に記すのは、しかし無意味であらう。或る者の旅行は、他のものよりも、より價値があり又成功し、そして興味深い地方に行はれた。之等の探検家達は屢々商人やマアラに變裝して旅し、或は數珠をもつたラマ僧に化け、彼の歩調に合はせて珠を數へつゝ旅行したのである。<sup>(十六)</sup>百歩を歩く毎にこの數珠は一回轉し、その時祈禱が即ち距離が記録されていつた。數珠が隠されてゐる間には、パండిットの觀察が手寫されてゐた。又小さなコンパスは多く頭の上にかくされてゐた。探検家達は常に醫

藥やその簡単な器具を携行し、彼等が何等醫學の經驗を有たなかつたにも拘らず、その驚く可き醫術によつて屢々地方の役人の妻君の病氣を癒し、その故に反對に打勝ち、迫害を鎮め、前進することが出来たのであつた。けれ共或る場合には遠征が失敗し又僅かな結果しか得られぬこともあり、或は探検家達は強盜に冒され、又追ひ返へされることもあつた。最悪の場合には彼等は殺害されて了つた。亞細亞の内奥がその隠された神祕を堅く抱いてゐたこの時代こそ、又最も忍耐を要求した時代でもあつた。

一八七〇年以降之等の旅行は次第に數多く行はれるやうになつていつた。その中最も著名なものを二つ三つ述べてみよう。

キシエン・シンの事業は殆ど支那トルキスタン及西藏で行はれたが、一八六九年から始められた。この年の旅行の概要は既に述べた通りである。一八七一年には測量や偵察に訓練を得た西藏の若者一人と三人の助手を連れ、商人の装ひを凝して、シガツツエに辿りつ

きそこから北進して、一八七二年一月廿一日には拉薩の北七十哩に在る大きな湖、テンリ・ノール Tangri-nor に達し、その周囲を完全に一巡りした。直後彼等は約六十人の武装し馬に乗れる盜賊の一味に襲はれ、彼等の所持品殆ど總てを掠奪された。この爲に更に北方への探検は不可能に落入り、キシエン・シンは多大の困難を忍び、辛じて拉薩に辿り着いた。そこで彼はガルトックへ歸へる爲に道具を質入れせねばならず、かくして印度に歸還したのであつた。<sup>(十七)</sup>

一八七三年印度政府は、ヤルカンドへダグラス・フォーシス卿 Sir Douglas Forsyth 指揮の一使節團を派遣した。此の時測量の方を引受けたトロッター大尉 Captain H. Trotter, R.E. はナイン・シン、カリアン・シン、キシエン・シン及測量助手のアブデュル・スバーン<sup>アブドゥル・サヤード</sup>を伴つて行つた。<sup>(十八)</sup> 経緯儀、六分儀による測量は、レー・Iah からリンチタン Lingzihang 平原を越へてヤルカンドに至り更にカシュガル迄行はれ、又種々な天文学上の観測は之等數ヶ所に於て成遂げられ

た。ナイン・シン及カリアン・シンはヤルカンドに留まり、キシエン・シンとアブデュル・スバーンはカシュガルに行つて、パミール横斷を企てたゴルドン・オーネル Gordon の一行を援助して歸へつた。マホメット教徒なる「ザ・ミュンシ」は更にカラ・パンジャ Kala Panja に向ふ一行に同行し、そこから彼はオギユスの流域に沿ふて歩みを進めた。彼はかの大河をそれがイシユカシム Ishkashim 近くで直角に曲流する地點迄約六十哩を踏査し、それから更に北方へ流れに沿ふて辿り、シグナン Shighnan ローシャンの全未知區域を探索して、ムルガブ Murghab とオギユスの合流點近きカラ・ワマール Kala Wannar に達した。<sup>(十九)</sup>

キシエン・シンの最も價值高き仕事は、この旅行の歸途に於て成就された。即ちヤルカンドを去つて、彼はカルガリック Karghalik グマ Gunna ポルル Pohru 及ケリヤ河 Keriya の源流を横斷しその正確なルートを開いてパンコン湖 Pangkong に到り、更に當

時既に測量が一應確定してゐたラダークのタンクス (Tankas) に達したのであつた。<sup>(171)</sup>この旅行の成果は、モントゴメリイの採用せる横斷方法の如何に正確なるかを如實に明示したのであつた。和蘭の位置は遂に正確に記入され、ジョンソンの示せる位置が誤りなることが明らかにされた。キシエン・シンはヤルカンドの經度を、經線儀の差異及月距 (lunar zenith distances) を参照して決定したが、トロッターはいたくこの方法を信憑したことが知られてゐる。<sup>(172)</sup>キシエン・シンが蒐集した根據に萬一これだけの信用が置かれなかつたならば、ユールンカシユ Yurlungkash の水源地域の地圖は、おそらく五十年近くも間違ひだらけのまゝ殘されてゐたであらう。

アブデュル・スバーン即ち「ザ・ミュンシ」はその後更に探検旅行の爲派遣された。が彼の消息は「カプウル<sup>Prin</sup>の君主に事へてゐたと思はれる」事實が一八四四年の簡単な記録に殘つてゐる以外、杳として明らかでない。私は種々な文書を調べてみたがそれ以上の記述

は見出し得なかつた。

一八七三年第二回目のヤルカンド使節派遣に先立ち、ナイン・シンは印度探検家の訓練に全力を傾注してゐた。當時既に彼の評判は鳴り響いてゐて、この爲に相當の嫌疑をかけられずに彼を採用することは困難になつてゐた。一八七四年この使節團の歸途、彼は自分から進んで西藏内部の新しい仕事に従事した。困難を忍びつゝ彼はラマ僧に化けて、國境を越へ、北方の要路に沿ふて拉薩に至る迄の全西藏の長さを横斷することに成功した。だがこの聖都に於て正體を見破られることを恐れ、彼は拉薩に入京することを思ひ止まつた。

彼の記録はその従者によりラダークを経て持ち歸へられたが、その身邊には既に危険が迫まつてゐるのを見とり、突然アッサムの方向に歩をむけて、ブウタンの東國境に沿ふて南進したのであつた。

此の最も偉大なペンディットのなした旅行の結果は、その觀察と測量の殆ど總てが、全く祕密の中に爲されねばならなかつた事實から考へて、非常に價値大

なるものであつた。この旅行では曾て殆ど全く未探検であつた一三一九哩の距離が注意深く横斷され、六分儀で觀測された二七六ヶ所の緯度で引合はされた。又高度に對しては四九七ヶ所の測高法による觀測がなされ、ブラマブトラの北には巨大な雪の山脈が発見された。尙「西藏の河」(譯註・ブラマブトラ河)は以前よりも更に五十哩も下流まで踏査されたのであつた。<sup>(十二)</sup>

併し乍らこの旅行はナイン・シンにとつて餘りにも勞多きものであつた。彼の健康はこの遠征の終末に際し極度に害はれて了つた。強い光線と激務とは彼の視力を非常に害した。この爲に五十歳餘りの年齢で、既に彼は探検をやめ、彼の故郷で安樂に暮し度いと切望するに至つた。トロッターはこの旅行報告の最後を次の如く結んでゐる。「かくして幸運にも、旅行中のあらゆる危険艱難を克服した彼には、その努力に相應はしい英國政府の充分な報酬を與へて、その餘生を極く氣樂におくるやうにしてやり度いものである。」

彼の雇主等の努力はその甲斐があつた。ナイン・シ

ンは巴里地學協會からは金時計を、王立地學協會からは金メダルを贈られた。そしてこの名譽ある贈物を與へらる可き理由として彼は「近世に於て何人よりも以上に亞細亞の地圖に多大の積極的知識を附け加へ得た人」と記された。そして印度國務大臣サリスバリー卿 Lord Salisbury は、ロイルカンド Rohilkand に於る歲入一、〇〇〇ルビーの一部落を彼に贈與したいと云ふ申請に同意し、副王に寄せる書中で次の如く述べてゐる——

「このパンディットの多大な旅行の成果、就中ラダークから拉薩を経てアッサムへ至つた最近の最も著名なる旅行の如きは、過去久しきに亘つて唯に英吉利に於てのみならず、全歐洲の地理學者の間に非常なる關心を引き起してゐたのであつた。余は殿下が彼の努力に對して與へられた高い名譽に衷心より賛意を表すると共に、更にその努力に報ひんとする殿下の御心に深く喜びを感じて御同意申上げる次第である。」

ナイン・シンは又後年彼の地理學に對する盡力の返

禮として C. I. E. (譯註・Companion of the (Order of the) Indian Empire) に列せられた。

ナイン・シンが勇退した頃から、西藏及その近隣地域を覆つてゐたヴェールは次第に取除かれんとしてゐた。神祕の土地に對する瞥見は既に贏ち得られてゐた。不可思議なラマ教の浸潤せる種族、その風習等は漸く世上に知られる様になつた。亞細亞の半獨立國の近世史、地誌、政情等が次第に明らかにされた。モンゴメリイヤトロッターが細心の注意を拂つて蒐集した報告は驚く可き興味を捲き起した。そして之等の初期の探検家達の中で英語を讀み書きし得た者がたつた一人しか居なかつたこと、又彼等の俸給が一月一六乃至二〇ルーピーであつたことを知るに及んでは、之等の探検を企劃した英吉利人達の盡力苦闘こそは到底充分に評價し能ふものではなからう。

併しまだ／＼解決せらる可き多くの問題は残つてをり、探検事業は師の隱退にも何等支障なく續行せられていつた。西藏東南部及その近傍地方は、ハリ・ラム

(113) Hari Ram (M-H) ララ Lala (L) ネム・シン Nem

Singh (M-M-N) スク・ダル シャン・シン Sush Dar

Islam Singh (G-S-G) サラト・チャンドラ・ダス Sar

rat Chandra Das (D-C-S) 等によつて探検が深めら

れてゆき、又北西方面に於てはムクター・シャ Mur

khur Shah (M-S) の探検が記憶されねばならない。

之等の探検家の選擇や訓練の仕事は主としてハーマン

大尉 Captain Harman, R.E. によつて爲されてゐたと

思はれる。

扱、今やアイズの最後の旅行——長大な艱難多き冒險にして且彼の努力を不滅になし、彼をして地理學界の稱讚と名譽とを贏ち得せしめた旅行を述べる時になつた。

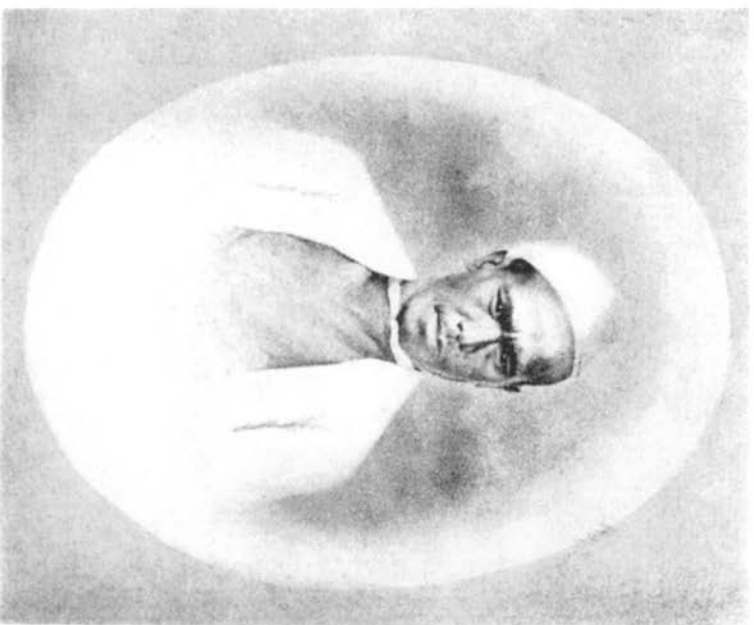
一八七八年四月二十四日、彼はダーズリンをあとに

して拉薩に旅し、更に北へ進んで蒙古へ向つた。(119) しか

し彼は絶望的な困苦に出くはした。即ちその所持品を

追剝にもつてゆかれ、加ふるに従者の一人は彼の眼を

くらまし、追剝の殘していつたあらゆる物を持つて失



ナイン・シン “PANDIT A”



キントカナン



キシエン・シン “A-K”



踪して了つた。この逆境にもめげず彼は尙前進を續け支那甘肅省の北西隅なるシャチエウ Shachow (又は Tsinhsang) に達した。(同年ブルジュエワルスキイ Pajewsky 及シエチエニ Count Szechenyi の二遠征隊の訪れし所<sup>(三十一)</sup>)。そして唯一人残れる忠實な助手チュム

ベル Chumbel と共に彼に課せられた仕事を敢行していつた。印度では彼の消息は全く斷たれ、彼が生きて歸へる望も失はれた。約四年の後彼は支那國境沿ひに歸路についたが、一八八四年印度に歸へつた時には一粒種の息子は既に死し、彼の家も壊はされて了つてゐた。加ふるに餘りにも過酷な激務の爲彼の頭丈そのものゝ肉體も遂に蝕まれ、甫めはその生命さへもが危ぶまれたのであつた。

かくして彼も亦爾後の探檢を放棄せねばならなくなつた。が一方伊太利の地學協會からは第一級のメダルが贈られた。その上一八八五年の勇退に際して、政府からは、總地代一八五〇ルピーをもつシタプウル Sitapur 地方のイタリイ Tanti の部落を興へられ、この

贈物によつて彼はその後約三十六年間を幸福に暮してゆくことが出来た。

彼が雇はれるに際しての宣言中に私は「正確、信實、勇氣、伎倆」と云ふ簡潔な記述を見出す。そして一八八四年にはこの探檢家の之等の素質に適用せられ得た實驗がなされたのであつた。私は彼がこの稱讃の中に這入つてゐたことを確言するものではないが、併し彼の判斷の正確であつたことは、其の後の年月が如實に物語つてゐる。最近の探査から得らるゝことは、六分儀による測定及横斷事業の極度に正確な點に於て、彼 A-K はかの偉大なバンディット(ナイン・シン)さへも遙かに凌駕してゐると云ふことである。<sup>(三十一)</sup> 艱難危險に直面しての彼の不撓不屈の精神は、その最後の遠征に際して遺憾なく證明せられた。

印度探檢家の歴史の中で、かゝる偉大なる忍耐に比肩せらる可き類例は唯一つしかない。それはブラマブトラを下つたキントトップ Kundup の浪曼的な旅行であつて、その概略を述べて本稿の結びにしたいと思

ふ。

西藏のツアンポー河とアッサムのブラマブトラ河とが同一なりや否やの課題は、長きに亘つて地理學上論争の中心問題であつた。一八七九年ハーマン大尉はデヒアン Dhang とブラマブトラとの合流點の水量を調査した、そして一人の支那人ラマ僧が探検家として訓練を受け西藏内部に送られた。彼の任務は出來得る限り、かの大河に沿つて下り、特に記號を附した標木を水中に投げ込むことであつた。二年間ハーマンはアッサムに於て河水を見守りつゝその標木の漂着を待つたが、不幸にも病を得て印度に戻り、その看視は放棄せられて了つた。

四年の歲月が流れた。ラマ僧として仕事を續けてゐたキントトゥップは歸へつてきて、測量當局者をさがした。彼が語つたのは、ラマ僧としての信頼に破れたこと、奴隸に賣られたこと、自由を得んとして働き、その不誠實な主人により課せられた仕事を續行する爲に彼はあく迄もツアンポー河を下つて行つたこと、等の

物語であつた。彼はその大河に沿つて下つていつた諸々の地點を詳細に説明し、印度の平原を去る約六十哩以内の地點迄、かなり正確に河のさまを述べた。そして最後には、もう之以上川に沿ふて行けないと云ふ處で、彼はこの企ての目的が立派に成就されるに違ひないと確信しつゝ河水の中にかの標木を投げこんだことを報告した。

キントトゥップがツアンポー河を下つて旅して以來、長い年月が経過した。印度測量局では彼の物語を信じたが、一般の地理學者達はそれを單なる作り話フアンネとして見棄て様としてゐた。しかし彼が死するに先立ちその報告の概して正確であることが充分に證明された。この探検家が全てをその記憶力に委ねねばならなかつた事實や、又彼が全く筆をもたず、唯その生れ乍らの言葉を以て語つたことから考へて、僅かの誤謬缺點は勿論許容さる可きものであつた。かくしてキントトゥップは測量長サウエル・インゲルホッフに探索され、シムラに招かれた。そこで彼は三十年以上も昔に彼が拂つた偉大な努力に相應はしい返

禮を受けたのであつた。

——了——

【註】

(一) 當時の支那皇帝の命令は次のことを規定した。「蒙古人 Moghul ヒンツ―教徒 Hindustani、バタン族 Pathan (譯註・印度國境に住むアフガン族の一員) 及び西歐人 Feringhi の西藏入國を禁ず。」

(二) General Report of the Survey of India, 1866-67, Records of the Survey of India, 1915, Vol. 8, part i. (再録)。又モントゴメリイの報告には、「この二人の探検家が兄弟として記されてゐる。」

(三) 之等の探検家は明瞭な理由によつて、その活動中は匿名が與へられた。それは一般にイニシヤルからなり、そのイニシヤルは名前の最初の字と最後の字とを逆に組合せたものであつた。例へば Kalian Sing (K) は G-K Krishen Singh 或は Krishna は A-K Abdul Subhan は N-A Sarat Chandra Das は D-C-S と云ふ如くである。或は極く稀れにタイトルのみで呼ばれた者も居た。例へばナイン・シンは “The Pandit”、アタ・イホメド Ata Mahomed は “The Mullah”、ミルザ・シユジヤ Mirza Shujah は “The Mirza” と云ふ様に。

(四) カリアン・シンは一八八三年の文書中で特に「ナイ

ヒマラヤ探検史の一編 (翌月)

ン・シンの兄弟でキイシェン・シンの従弟」と記されてゐる。

(五) General Report, Survey of India, 1867-68.

Records of the Survey of India, 1915, Vol. 8, part i.

(再録)

(六) ナイン・シンは屢々キシエン・シンの叔父と記されてゐるし、又印度測量局の現局員中にもそれが正しいと認めてゐる人がある。私は當時の文書を出來るだけ涉獵したが、彼等の關係について唯從兄弟同志と云ふこと、及二人の父なるデヴィ・シンとビル・シンとは兄弟でダムウの息子であると云ふ記述を發見せるのみ。又前記(註・四)を見よ。キシエン・シンがナイン・シンの甥と云ふ記録は一九〇〇年に甫めて見られる。

(七) この旅行の記録は全然公表されてゐない。この路上測量の結果は the Survey of India Transfrontier Map No. 9 (Old Series) に取り入れられた。

(八) General Report, Survey of India, 1868-69.

Records of the Survey of India, 1915, Vol. 8, part i.

(再録)

(九) 探検家ハリ・ラム Hari Ram (M-II) (又屢々 No. 9 に記さる) の活動しはじめたのは一八六八年である。この後彼が主として活躍したのはティンリ・メイダン

の地域であつたことからして、この年(1871)到着した者はおそらく彼であつたらう。この旅行にいつても何等公表されてゐなうが、その結果は the Survey of India Transfrontier Map No. 9 (Old Series) に取り入れられた。

(十) General Report, Survey of India, 1871-72.

Records of the Survey of India, 1915, Vol. 8, part i (再録)

(十一) General Report, Survey of India, 1869-70.

Journal of the Royal Geographical Society, Vol. 41, 1871.

(十二) Report on Trans-Himalayan Exploration during

1873-4-5, drawn up by Captain H. Trotter, R.E., 1876.

(十三) この旅行の記述は今日に至るも未だ公表されてゐなう。

(十四) この探検家の仕事は僅かではあるが、フォーシス・マッシュン Forsyth Mission の際のアブデュル・スバーンの仕事と連絡を缺いてゐる。(後述參看)

(十五) Report on Trans-Himalayan Exploration during

1873-4-5, drawn up by Captain H. Trotter, R.E., 1876.

(十六) 西藏人の數珠は百八の珠を有し。しかし距離測定と云ふ理由の爲にパンディット達の數珠の珠は百であ

つた。

(十七) General Report, Survey of India, 1873-74.

Records of the Survey of India, 1915, Vol. 8, part i. (再録)

(十八) アブデュル・スバーンは特に探検家として雇はれたものではなかつた。併し彼は屢々越境探検の記録中に「サ・マッシュン」"the Munshi" の名を以て記せられてゐる。

(十九) 'Report of a Mission to Yarkand in 1873 under the command of Sir T. D. Forsyth' (Calcutta, 1876), chap. vii.

(二十) 'Account of Survey Operations in Eastern Turkistan, 1873-74' by Captain H. Trotter.

Records of the Survey of India, Vol. 8, part i. (再録)

(二十一) キンセン・シンはヤルカンドの經度を七十七度一五分五と算定したが、一九一四年デ・フィリッポ Sir F. De Filippi は「進歩した方法によつてその經度を計り、七十七度一五分四六と云ふ結果を得た。トロッターが信じた通りキンセン・シンの仕事は斯く違つた。

(二十二) Report on Trans-Himalayan Explorations during 1873-4-5, drawn up by Captain H. Trotter, R.E., 1876. Records of the Survey of India, Vol. 8, part i.

(再録)。又 *Journal of the Royal Geographical Society*, 1877, Vol. 47.

- (二十三) ハリ・ラムの二つの旅行については既に述べた。彼の第三回目の旅行(一八七三年、西藏及ネパール)については「General Report, Survey of India, 1873-74」を、又一八八五年の第四回目の旅行については「Special Report (per se), 1887」を見よ。此の旅行の途次ハリ・ラムはマウント・エヴェレストの西方二十哩なるパンギューラ Pangu-la によつて大ヒマラヤを越えた。この峠はエヴェレスト遠征隊の地圖にナンビエ・ラ Nambu La と示されてゐるものである。彼の息子ガンガ・ダット Ganga Datt (T-G) と共になせるその第五回目の旅行(一八九二—九三年)については「Special Report (per se), 1895」を見よ。
- (二十四) 一八七五年から六十七年に亘つたララの探検については「General Report, Survey of India, 1878-79」を見よ。
- (二十五) 一八七七年にネム・シンの行つたギャラ・シンドン Gyala Sindong に至るツァンポー河の探検については「General Report, 1878-79」中の「ローマンの敘述を見よ。一八七九—八〇年の彼の第二回目の旅行に關しては何等記述が公表されてゐない。彼の第三回目の西藏旅行(一八八〇年)については「Geographical Explorations in Tibet, 1883」を見よ。

ations in Tibet, 1883」を見よ。

- (二十六) スク・タルシヤン・シンの探検に關しては「Report on Geographical Explorations in Tibet」 by Captain Harman, R.F., 1882」を見よ。彼の仕事は無價値を爲した。

(二十七) 同じく右に掲げたローマンの文章を見よ。ラー・ウーエン・ギャツァ Tana Uyen Gyatso (U-G) は此の旅行者に同行した。

(二十八) 一八七八—八一年の M-S の探検(バダクシャン Badakshan のヤシン Yasin カラ・パンジヤ Kala Panja を經て西部パミールに至りしもの)の報告は公刊されるに至らなかつた。

(二十九) 「Explorations in Great Tibet and Mongolia」 by J. B. N. Hennessey, 1884.

Records of the Survey of India, 1915, Vol. 8, part iii. (再録)

(三十) ツァイダム Tsaidam の高原は「Tanguts」西藏人の外に蒙古人により訪れたとは云へ、蒙古本土の一部ではない。原報告には A-K は「蒙古のサイチエウ Saichu」に到着したと述べられてゐる。

(三十一) 甘肅省最西部へのキシエン・シンの横断はかのブルジェワルスキイの仕事と正確に一致してゐる。カマ Kham 地方のバータン Bartang 近き一二〇哩の距

離に於て、現測量長なるライダー Colonel Ryder は A-N の仕事が殆ど彼の距離測定と一致せることを發見してゐる。この地域では彼はヤクの牧人として雇はれつゝ仕事をした。ヤクはのろゝ歩く動物で道から離れて彷徨し、屢々道草を喰つてゆく。ライダーの横断は測量車 measuring-wheel によつてす早く通りす

きたものである。しかもこの二つの結果が符合すると云ふことは全く驚歎に價する。  
(三十一) 'Explorations in Sikkim, Bhutan and Tibet,' by H. C. B. Tanner, 1889, Records of the Survey of India, 1915, Vol. 8, part ii. (再録)

——以上——

## 圖書紹介

### 一登山家の思ひ出

エミール・ジャヴェル著

尾崎喜八譯

山の本のクラシックスと呼ばれて居るものはかなりの数に上るに不拘、特にその中からジャヴェルやモルゲンターレルのやうな人々の書が譯出されたと云ふことは、吾國登山界の一つの面の特質を現して居るのではないかといふ氣がして興味深い。所謂山登りのメタフィジックスに關心を持つ人達にとつてはジャヴェルの本などは特に親しみ深いものであり、そういふ方面に特に強い關心を持つ人々の多いわが國では、單なる初登攀記よりも、このやうに思索に満ちた本が要求されるためなのだらうと考へられる。

ジャヴェルを我々の頭に滲み込ませて呉れたのはやはり大島さんの功績だつた。大島さんは既に大正十三年に發表した「山への想片」の中でジャヴェルを引用し、翌年には「エミール・ジャヴェルに」と云ふ一詩を捧げ、更に續いて昭和二年

には「エミール・ジャヴェル」の題下に詳細に彼の登山態度を紹介したのであつた。主としてアンリ・ボルドーの序文「エミール・ジャヴェルと山岳文學」に依つて熱情的にこの「アルプスの傳道者」を描いた一文は十年前の我々の心を捉へたのみか、その魅惑は未だに新しく迫つて来る。それ程ジャヴェルと大島さんとは我國では離れ難い因縁を持つて居る。ただ大島さんはその文中、この小傳の執筆態度について次のやうに洩して居る。

「筆者は茲では決してジャヴェルの山岳文學的方面を誌きんとする者では無い。初めから筆者は之に觸れる意圖は持つて居ない。唯だ筆者は筆者の日頃其の著書を通じて尊敬する登山者の一人なるエミール・ジャヴェル其の人の「登山者」としての小傳を些か誌さんとして筆執りしのみにて、彼の文學上の其等の點に關する研究は、無論、此の小傳記の目的でも無いし、又佛蘭西人ならぬ、瑞西人ならぬ、筆者如きが斯かる文學上の見地から彼の文章を觀味する事も出来ないのであるから其等の問題に關して正當な觀察を行ふ事は全然不可能事に屬する。併乍、唯だ、筆者が『一登山者の回想』を三、四年來時たま讀き讀んで得たる彼の風格に對する或る切實な

る感動、又一度感動を擧げて熟讀した時の忘れ難い感が筆者をして更にジャヴェル其の人に就て今少しく、假令、片鱗にもせよ、己れの觸れただけを誌さしむる事を讀者諸氏は直ちにポルドーの言葉の其れの如く『虚妄なるリリズムに墮せるもの』として強ち斥けないであらう。〔先蹤者、三九二頁〕

これは大島さんが、數多い先蹤者の小傳を記すに際して、常にそれを「登山史」上の一連鎖として取扱ふといふ一貫した態度であつて、敢てジャヴェルの場合に限つたことではないが、唯ジャヴェルの場合、

「筆者の内心には尙ほ他日相當の程度まで彼を知り、彼の文章を味讀し、彼のエスプリを心讀し得る時——其の様な時のいち早く來たらん事を筆者は切に希ふが——を俟つて別に稿を起したいと思ふ」旨を述べて居ることは大島さんのジャヴェルへの敬慕の如何に深いものであつたかを知るよすがともなり、その實現されなかつた運命をいたましく感ずるのである。

この時から既に十年を經過した今、我々は尾崎喜八氏の譯出に成る「一登山家の思ひ出」を持つことが出來た。それは佛蘭西假綴の原著よりは勿論、英譯本よりも更に美しい装ひ

をこらして現れた。この瀟洒たる一書を繕いて感ずることはまづ第一にこの翻譯が實に原著に似た風格の所有者である譯者によつて行はれたといふことだ。このことは

「しかし此の譯業のおかげで、山や自然を愛する人間のなかに、その魂（エッセンス）の状態に於て、こんなにも自分に近い者のゐたこと、そしてその人間が、三十六年といふ僅かな一生を、これほどにも充實して生き終せたことを知つて、人生に成功するとは、果してどういふ事かといふことが、こゝでも亦わかつた氣がする」と譯者自ら、そのあとがきである「アルプスのオルフォイス」の中で認め、その一文を「愛するエミール・ジャヴェル！君はその脆い葦の笛で君の歌をうたつた！それならば私もまた私の笛で……」と結んで居るのを見て更に強く感ぜられる。

この點まことにジャヴェルはわが國に於てよき紹介者を持つたとともに今やよき翻譯者を得たと云ふべきであらう。

譯書は一九二〇年新版の原著により、原著第三版に附された、師友ウージェーヌ、ランベールの詳細な註傳を稀購書として、同書の入手困難なため現在著通して居る英譯本から譯出して、ジャヴェルの人となりを知る指針として居る。この



評傳は傳記的及び文學的註釋と註される五十九頁に亘る長文で、前記アンリ・ボルドーの序文とともにジャヴェルを知る最もよき資料であるが、今回の譯書ではボルドーの方は割愛されて居る。恐らく重複を避けるためと思はれるが、我々には兩方とも欲しいものである。

翻譯はさすがに美しい、尾崎氏の文の持つ風格が、ジャヴェルの表現に非常にびつたりと適して居ることによるのであらう。

特に味讀し樂しんだ、「二夏の思ひ出」以下「ブラン・スリジェの葡萄小屋」に到るまでジャヴェルその人の文章については我々がこゝに喋々する迄もなく、既にランペールが語り、大島さんが賞揚し、現在に於てその説を聞くならば譯者尾崎氏自らが最も適任者と云ふべきであらうから、私はただ、わが國の山岳界に於て特に愛讀されて來たこの書の過去をふりかへり、この譯書の上梓を喜ばば以て満足するところである。(島田 巽)

×

×

×

×

## 『山の憶ひ出』

木暮理太郎著

### 一

その上巻を去年の暮に上梓した『山の憶ひ出』が今年六月下巻を刊行して、我々の大先輩の、しかも山に關しての處女出版は漸く完成された。この出版についていかにも私達に負ふ所多くあつたかのやうに著者は述べられてゐるが、少くとも私などこの準備の一部に多少關係したといへばいへるものの實際の仕事の上では全く關與しなかつたのである。それが殆んど木暮さんの獨力によつて、こゝにかくも膨大な二巻となつて現はれたのに對し、まづ自分として何等なすところのなかつたことを著者に深くおわびし、それと共にこの仕事に内心多大の關心をもつてゐた者の一人として私は心からこの出版を歡び、かつ著者に深く感謝しなければならぬ。しかしたとへ一寸でもこの仕事に關與したことであれば、この著述の批評はこれを他の然るべき人にゆづるとして、こ

こには半ば紹介の意味で、木暮さんがいかに、山に登られてまた山に對してどんな氣持と態度とをもつて居られるかについて、たゞ思ひついたらまゝを少しばかり書くことにする。

二

最初に著者がいかに山に登られて来たかといふことである。その輝しい諸記録は幸ひこの上巻に網羅され、これを讀めばその登山の經歷を自ら知り得るわけであるが、しかしその記録は過去四十年に亘る記録の全部の恐らく何百分の一しか當らないのであるから、その山に對する氣持を理解するためにも、簡単にでも過去の足跡を追ふことが順序であり便利であらう。

多くの登山者のうちには生れながらの山の子である人々も少くはない。木暮さんもその幸福な一人である。山とはことに縁故の深い環境に少年時代を送られた。

『東上州から見た冬の秩父連峯は常に色彩がうるはしい許りでなく、自分には更に懐しい思ひ出の湧く山である。或年の冬であつた。日は御荷鉾山の後に落ちて、其あたりの天は黄金色に輝き、夫より地平線に沿うて東するに連れ、樺色、桃色、草色と色美しく風ぎ渡つた夕暮の空に、紫と紺とを濁ら

せぬ程に混ぜて幾度か塗り上げたやうな深い色の秩父連山が、劃然と畫き出されたのをふと心付いて眺めた時には、未だ十一二歳の少年であつた自分も、紙鳶の糸を巻くことさへ忘れて磁石に吸はるゝ鐵のやうにひたと眼を引きつけられて仕舞つた。怪しくも山に魅入られた自分は其以來山を愛する外に仕方なかつた。』

『こんな環境が私を山好きにした大きな原因であることは疑ないやうであるが、其頃の遊び仲間と同じ位に山に興味を持つてゐた五六人の腕白共の中に私の外には一人の山好きも出なかつたことを考へると、其の後の境遇の變化にもよるであらうが、環境よりも寧ろ山が好きになる素質といふやうなもの、先天的に存在してゐる人とさうでない人とがあるらしく、此の素質がありさへすれば、どんな境遇にあらうとも何かの機會を見付けて、それが現はれずには居られないのであらう。其素質のない人は山に登ることはあつても、終には山好きにはなり得ない。』

と著者はその少年時代を回想されてゐる。都會に育つた者はかゝる少年時代を幸福とすらやみもするが、ともあれ、私はたとへ都會に育たれたとしても、しかも木暮さんには山が

好きになる素質は先天的にそなはつてゐたものと解する。

### 三

少年時代どこかの山に連れて行つて貰つた思ひ出の二三は誰でもある。木暮さんも六歳の時赤城に、十三歳の時富士に登られてゐる。恐らくこれらの登山は我々の場合のやうに全く偶然なものであつたにせよ、山好きの素質を益々助長させずには置かなかつたであらう。

明治二十二年には磐梯山の破裂を見物の歸途檜枝岐から尾瀬に入つて沼田に出られた。時代は判明しないが、東北の山々を片端から歩き廻られたのもこの時代か、もう少し後の事であるらしい。明治二十六年といへば、木暮さんの二十歳前後のころであらう。その一夏を妙義、淺間、蓼科、御岳、金峯と登山され、これが本當に山らしい山に、登られた最初であらう。「日本風景論」の出た年には、第一回利根川水源探検隊の後を追ふて尾瀬に入られたらしく、明治二十九年には、針ノ木越え立山、乗鞍、御岳、木曾及び甲斐駒ヶ岳、金峯と一夏の殆んど全部を登山に傾倒された。この時の兩駒ヶ岳の紀行は「木曾駒と甲斐駒」と題して、この本の最後に加へられてある。

かうして明治四十一年頃までの足跡は壯年期の登山として相當に重要視さるべきであるが、不幸にしてそれらの記録は何一つ残つて居らず、また木暮さん自身でさへ全く記憶されて居られないので、今更知るすべもない。高い山を新しく見つけては、無暗に登りたくなり、これを片端から平げて行かれたのであらう。とたゞ推測するだけである。

かゝる山の強い誘引が前に述べたやうに、生活環境と山好きになる素質とにあつたとしても、こゝに木暮さんの登山を育んだ時代の背景をも看過せなと思ふ。この年代には幕末から隆盛を極めた宗教登山もなほ相當に根強く、木暮さんの富士或は御山登山などには講中と同行された程で、或ひはこんな方面からもかなり深い影響をも受けて居られるのか。さうであるならば、この點はまた我々の他の大先輩ともやゝ異つた時代の影響下にあつたやうに考へられる。

### 四

何事によらず、よき友を得ることは大切なことで、ことに登山に於てさうである。もし木暮さんが青年の血氣に委せて、漫然と孤獨でこのまゝ登山を續けられて居たら、その後のある時期に行詰つて、眞個の山好きにはなり得ずに終られ

たであらう。『山岳會』の存在を知られたことが木暮さんの山の生涯に大きな影響を與へたことはいふまでもない。ともかくそれまではその存在も知らず、全く無關係に「山に登ることへのみ身を入れ」て居られた。當時のことを次のやうに回想されてゐる。『後になつてある日行きつけの本屋を一寸覗いてみると山岳といふ雑誌が出てゐる。これは大變なものがある。どんな人が書いてゐるのかと思つて開けて見ると、知らない名前が澤山列ねてゐる。さあ大變だ、世の中には山の好きな奴が随分あるものだと思つた。そしてそれは多分皆自分と同じ位の年配だらうとばかり思つたが、後になつて知り合ひになつてみると皆な若い人ばかりで、これにも驚いた。』

木暮さんが日本山岳會に入會されたのは、故辻村伊助氏と高野鷹藏氏との紹介で、大正二年のことで、かへつて同じ年配の人としては割合に遅く入られてゐる。

また如何なる關係で知合ひになられたものか分らないが、これと殆んど、或ひは先きであるかと思ふが、一人のよき山の友達を得られたことも木暮さんにとつて大きな幸福であつた。この岳友こそ、後に伴れ立つて秩父から日本アルプスへ

と歩き廻られた田部重治さんである。ともかく、かうしたことによつて、木暮さんの登山は、自我流の盲目的なものから、次第に體系づけられて來たといへやう。

## 五

田部さんと同行の登山は、大體明治四十一年以後のことである。この時代以降の記録は、幸ひにして『日本アルプスと秩父巡禮』或ひは『山と溪谷』に集められてゐる。この本によつて、この二人が未知の山々を開拓して行つた當時をさまざまと見せつけられ、この幸福な時代のことを我々はたゞ指を喰へて羨むより外仕方がない。

田部さんの『山と溪谷』やこの本に残されてゐる記録を辿つて見ると、これから大正初期までが、木暮さんとしての、(或ひは我國に於けるといつてもよい)秩父の時代である。明治四十二年の秋には、田部さんと、三峯より甲武信、三寶、金峯までを縦走、四十五年夏には同じく田部さんと雁坂峠から甲武信へ、同十一月にはそれに中村清太郎氏を加へて、更に唐松尾より牛王院、飛龍、雲取まで、大正二年五月には同じメンバーで、金峯より國司、甲武信、三寶、木賊、破風まで、それぞれ縦走された。釜澤と笛吹川の主流とはそれ以後

のことであるが、ともかく當時人々の顧みなかつた未開拓の山々を丹念に歩き廻られた。この本にある「秩父の奥山」「奥秩父の山旅日記」等、最初の四編がこの時代の記録である。

大正二年頃から木暮さんの登山の興味は、幾年前單獨で登られた日本アルプスに再び戻つて來た。そして四年、六年と隔年にひきつづいて北アルプスに大きな縦走が行はれた。槍ヶ岳より薬師、立山、劍まで文字通り「日本海まで」抜け、毛勝、猫又より赤谷、赤元、白元を経て劍に達し、立山を越えて黒部川に出で、赤牛にとりつき烏帽子まで縦走し、また朝日、雪倉、白馬を経て針ノ木まで後立山を縦走された。これらの山登りで、田部さんがいつも同行者であつたことはいふまでもない。

この本に集録された「黒部川奥の山旅」はその最後の時の記録であり、「黒部川を遡る」はその後に於ける下廊下の紀行回想記である。

この時代の木暮さんのいでたちは、茨木さんのスケッチによく描き出されてゐる、「山と溪谷」(一二六頁)。風の神様のやうな大きなルツクサツクをかつき、和服に草鞋、甲掛、太い杖をつき、蓑藁帽の下からは針の様な太いひげが覗か

れ、當時の元氣旺盛な登山の意氣組が偲ばれる。

この時代には「南」へも時には單獨で、時には武田久吉氏と共に入られ、二三の大きな縦走を企てられてゐる。これは紀行文に書かれてないので判然しないが、「山岳」の會員通信から覗はれる。

尙大正十一年には秩父宮殿下の御案内を申上げて中房より槍ヶ岳へ、大正十年には朝香宮殿下を御案内申上げて農鳥仙丈へ登山してゐられるが、木暮さんの一生の光榮であつた。

大正中期、東京近郊の山、ことに大菩薩に二三の山旅も行はれたが、其れ以後、興味は主として上越國境につながり、當時餘り知られなかつたこの地域に多くの記録が残されてゐる。大正八年の皇海、九年の利根川水源の山、鬼怒沼などから阿能川、赤谷川などの小さな山旅も行はれた。「利根川水源地の山々」以下「皇海山紀行」までの四編はこの時の紀行文である。これらの登山が、木暮さんにとつて故郷の山々への再會といふなつかしい印象を残したであらうが、古文書を抄録して、この地方の地勢、山川を丹念に調査され、それに基いて行動される時には、むしろ未踏の地に對する強いあこがれをもつて、これに飛び込んで行かれたのであらう。なほ

こゝに附け加へたいことは古文書の研究であつて、それに基く山の考證などと共に木暮さんの得意とされる所で、その造詣の深さは本書の隨所に發見される。下巻に收められる「上州の古圖」「二三の山名」「マルとムレ」などの諸篇にその一端を窺ふことができる。

あの丹念なスケッチと共に我々には忘れられない「東京から見える山々」の諸篇は「望岳都東京」と題し下巻の巻頭とをかざつてゐる。多くのスケッチは惜しくも省かれてゐるが、今日から見れば多くの不満の點を發見して、わざと載せられなかつたのであらうが、人に知れないこの苦心談はこの諸篇によく物語られてゐる。木暮さんの山岳遠望の追求は、少年時代に於ける秩父の遠望に始まり、一般の山に對する熱情と共に年々たかめられたものであらう。大きな山旅の間の短かい休息時(?)には必ず山のよく見渡せる低山を歩かれスケッチをとり、寫眞をとられてゐる。「美ヶ原」や「春の大方山」の諸篇は恐らくこの副産物であつたらう。

## 六

木暮さんが今後如何なる登山をされるであらうか、勿論私達の知る限りでない。以上述べた所によつても判かるやう

に、その足跡はそのまゝそつくり我國登山の發展史を成すといひ得る程に、巨大な歩調で大地にひびくやうな氣がする。將來我國の登山史の如きを舊くならば木暮さんの名は無視することはできないであらう。こゝに、巨大といふ意味は、その範圍が我國の主要高山の殆んど全部に及んでゐるといふこととで、ことに我國代表山岳たる日本アルプスに至つてはその殆んど全部を極めつくされてゐる。『北アルプスの中では鷲羽岳だけを未踏の山として残すのは心懸りであつた』とこの本にも述べて居られる。ともあれ、今日に於て、この位の廣さに登山することは敢えて不可能ではないけれども、今日のやうに登山の施設が便利簡易でなかつた當時に於て、この廣さに山を跋涉することは全く驚くべきことであつた。また巨大な足跡はその深さについてもいはれる。幾ら廣く山を歩く人でもかくまでに山を奥の奥まで深く味はひ、そして山の心をしつかりと握ることのできた登山者は先づ稀である。

## 七

木暮さんを山へ驅り立てたものは、少年時代に於ける山に對する特殊な思慕と愛着とであり、山といふ一つの未知世界に對する異常な憧憬であつたこと、また登山りを始められた

當時の日本の登山界の事情が木暮さんに及ぼしたであらう。僅かの影響もないではないが、しかし木暮さんには山登りが好きになり得る素質が多分にあつたことも前に述べた通りである。『私達が山へ登るのは、つまり山が好きだから登るのである。登らないでは居られないから登るのである。なぜ山に登るか、好きだから登る。答は簡單である、しかしそれで充分ではあるまいか。登山は志を大にするといふ。さうであらう。登山は剛健な氣象を養ふといふ。さうであらう。其他の曰く何、曰く何、皆さうであらう。しかし私など唯好きだから山に登るといふだけで満足する者である』よく引用される木暮さんの序文であるが、私はこの一文に木暮さんの登山に對する純粹な眞面目を見出し、木暮さんには山に登つて愉しむそれ自體が登山の目的であつたことを考へるのである。壯年時代はともかくそれ以後に於ては、向ふ見ずな態度は片鱗も見られない。『信條の命するまゝに黙つて向上の道を進る宗徒にとりては登山そのものの外他に何等の目的があるべき道理はない。こんな生一本なひたむきの登山は昔の人に限られた特權であつた。……無事に御山を濟ませて日出たいと喜んだ昔に比べると……、あの山を平げた、若くは片附けたと

いふ……これは馬上の將軍が敵國を征服して鞍に倚つて睥睨する時の態度にも考へられやう。……しかし自分は昔の人のやうに眞面目な山登りをしたいと努力する。』秩父の如き低い山を對象としてのこの態度は、日本アルプスでも、上越でも、どこでも、變らなかつた。血氣にはやる荒武者の態度、登山を單なる體操の如く見做す、山を體操場の如く、かけ出しの登山者にある輕卒な態度はない。未知世界に對する烈しい憧憬と温い熱氣とを内部に抱きながら、しかも山に對する眞摯な研究と深い理解とに基く博い知識、山に對する眞面目な態度とそれから出發する自制、特に謙讓なる氣持を木暮さんに見出すのである。それがあるがために、千山萬岳の間を駆け廻りながら、時には自ら危険に瀕しながらも裕々とこれを克服し所期の目的を完成し、時には手に應へないでアツサリと打切つて再舉を期することはあつても、かうした長い山登りの生涯に何の事故もなく少しの弛緩もなく、いつも同じ熱意と、同じ關心と、同じ態度をもつて、始終一貫登りつゞけられたのである。

要するに木暮さんを山へと驅り立てずに置かなかつた根本的なものは自然に對する愛、特に山に對する愛である。その

登山の行爲はいささかも「冒險」といふものではないにしても、ヘルマン・ヘッセが『我々漂泊者は愛の願望の實現が不可能であれば、あるだけ、それを育まふとして本来ならば女性に對するものである其の愛を村落や山に……氣輕にまきちらしてやる』といったやうな意味のアヴァンチュールであり、山岳に對する愛の追求であると解してよいであらう。『現代の登山は維新前に於ける登山の延長であるとはいへないかもしれない。兩者は出發點を異にして發達したものであるから。しかし其根柢に於て共通した思想はないであらうか。それはある、即ち自然愛の思想である。』木暮さんの登山もここから出發してゐる。

## 八

木暮さんが山をいかに深く、かつ細かく、觀賞し、感得し、理解されてゐるか。その一例として左に少し長いが、數節を引抄しよう。

『この變幻極まりなき雲の峰を背にして南正面に屹立した颯岳の豪壯なる山容を仰ぎ見た時の心地は永く忘れることのできない印象の一つである。……日一日と其麓に近づくに連れ、山の高さは加はり峻峻の度は増し、曾ては一度其嶺を窮め

た身にも自分は果してあの頂上に登ることが出来たのであらうかと疑はざるを得ない程、心の動搖するのを感じた。此時私は恐らくこれは此山の見慣れない方面に初めて接した私の神經が例へば血管内に或物質を注射すると血液は主に之と對抗すべき特殊の物質を生じて自己を防衛するのと同じやうに、山の威壓に對して反抗的に起つた神經細胞の動搖であつたのであらう。而も希臘彫刻の傑作に見るが如き貴き素朴と沈靜なる偉大とを兼ね備へた山の前には、私の神經細胞の中に生じつゝあつた少量の酸酵素は、自己を危くするまでに毒素を分泌するに至らずして、旭に消ゆる霜の如くに溶けて去るのを覺えた。此時私は山に登りたいと努力精進する人のみが——山岳宗徒のみが享有することの出来る或神來の力があつて強い心臓の鼓動と共に全身に漲り溢れるのを感じた。そして一瞬時の後には、それが渾身を傾けて山に懐しむ情と變つて行く。私は若し自分が畫家であつたならば之を描きたい。詩人であつたならば之を歌ひたいと思つた。然し畫家でも詩人でもない私は、自己の能はざる所を他人が成し遂げて呉れた彼の尊い藝術に依りてのみ、此欲求を満足させるより外に代ふべきものはないのであらうか。いやある。唯一つある。



絶えず山に登ることがそれだ』

『亂石の急階段を躡んで一歩々々絶嶺に近づく。此處まで来ると何となしに一種の親しさが胸の奥から湧いて、それがあたりの空氣と溶け合つて懐しい聲——山の嘯きが心耳に聞えるやうだ。暗い不安の影は幻のやうに消えて跡もない。山稜はいつか草と偃松とを粧ふた高原狀の緩い斜而となつて、眼の前にポーツと雪田が顯はれる。雷鳥が一羽それを横切つて向ふの岩蔭に雪白の翼をちらと覗かす。雪田はいつか又私達を狭い山脊に導いた。巨巖の上を躡つて間もなく岩を敷き詰めた些やかな平らに出る。そしてそこに見覚えのある一本の標木と三年越しの顔合せた時には何でも構はず嬉しかつた。茫漠たる霧は一度僅かに五色ヶ原あたりの雪と緑とを垣間見せたのみで、終に再び開かなかつた。それも好い、私はあたり一面に算を亂して横たはる片麻岩の大塊、其一に軀を凭せたまゝ、眼はいつしか三千里の天空に今年のこの夏の唯一日であるかの如くに今日を矜つてゐる高根の花を珍ふて、その姿なる姿にうつとり見入つた。花は何か歌つてゐるのではあるまいかさうだ。大地の偉大なる力の其一の表象である永遠不滅なる山の生命！それを歌つてゐるのだ。遠い過去の

年涯の悲しみ——それが何であつたにせよ——を忘れて現在の喜びを歌つてゐるのだ。自然の微妙なる耳を除いて、幸福なる山の囚人のみがこの歌の心を體得しうるのではあるまいか。誰れを見ても皆樂しさうな顔をしてゐる。若し人が何かの折に飾りなき自己の心を見出し得る場合がありとすれば、今が絶好の機會である。悲しみを忘れ、痛みを忘れ、純潔と慰安とを抱いて、雪に埋もれた火口の如く心は沈黙の底に燃えてゐる。私の日は涙を催した。そして油然として湧き出る「もの皆なつかし」の情を堪へなかつた。颯ヶ岳の絶嶺に三度幸福なる足跡を印する日が遠からざらむことを心に盟つた。それに何の不思議があらう。早晝食を済して其處らを歩き廻つた。岩窟へも下りて見た。そして登山した人の名刺を新しい紙に包み直して新らしい罐に入れた。』

『滿身に日光をあびて傾斜の緩い雪の上を辿つて行く。……勾配が稍や急になつて雪の下から大きな岩の頭が黒く露出してゐるのが見られるやうになる。谷はいつか扇狀に開いて途切れ勝ちの雪が暫く跡を絶つと間もなく別山裏の平に達した。即ち劍澤の頭源である。

この廣い盆狀の高原はしつとりと水を含んだこまかい砂地

に嫩草が褥を敷いたやうに生ひ茂つて、如何にも踏み心地が好い。夥しい珍車の白い花がそれへ霞模様を染め出してゐる。草に涵され草を養つてゐる水の集りが中央に二三の細流を湛へて、雑魚や水すましの群こそ見えないうが、里の小川の傍を偲ばせて静に山の影を浮べてゐる……

動くのが歴になつて草の上に寝轉んでゐると長次郎達は晝食を始めたので、早速仲間入りをする。……一仕事した後の疲れといつたやうな軽い頼さがすぐ眠りと連れ立つて、ともすればこの肉體を蟬の脱け殻かなんぞのやうに振り捨てやうと機會を窺つてゐるらしい意地悪の魂を誘ひ出さうとする。抵抗の無益なるを悟つてか、上下の臉は既に妥協を遂げたらしい。陽炎のやうなものが目前をぐるぐる廻つてゐる。快い草の香が頻りに鼻を襲ふて來るまでは覺えてゐたが……」

九

こゝに引抄した數節は、劍ヶ岳を登る前と、その絶頂に立つた時と、別山の登りにそれを回顧した時の三つの状況を敘したものである。

こゝにそれぞれの状況に於ける環境の變化と氣分の變化とが現はれ居り、私もこのことをよく領解し得るが、しかし、

かくも詳細に敘述し得るのは、木暮さんの筆致にもよることであるが、それは木暮さんの如き山を深く歩き、深く味はひそれをしつかりと把握されてゐる人にしてよくなし得る所である。ことにこゝに於て我々の注意を喚起させて置きたいことは、木暮さんがいかに山岳を微細に觀察し、敘述するにしても、山岳全體を見ることを決して怠つて居られなかつたこと、一つの石ころを見ながら、しかも山全體とを一様に觀察し、鑑賞する態度をもつて居られることである。「樹を見て森を見る態度」で山に望まれたのである。それも山をそのまゝに受容れてそれを充分に理解し、山を渾一然たる心境を得てゐられるからである。恐らく日本の山を廣く登り、深く知る限り、かうした大局的でもしかも緻密、繊細な見方は極めて自然であり、日本の山を背景として長く歩きまはつた登山者の一つの典型的風格であると私は考へる。

こゝから、また木暮さんの登山の有する滋味といふことも説明されると思ふ。しかしこゝに滋味といつても、田舎のゲテ物をひつくりかへして受ける小ぎたないかび臭いものではない。ある洗練された滋味、さびといふものさへを私は大分に感ずる。

『同じやうに長い笹を押し分けて間もなく榊の繁つた山腹に登り始める。暖かい日の光は緑の深い樹蔭に吸ひ込まれて途中で消え失せてしまふ。樹の根方には僅かながらも雪などが残つてゐた。ふつくりした青苔も堅く凍り付いて夏のやうな足觸りに乏しい。其處に安心して根を下ろした投葉草までが春待ち顔の角芽立ちを厚い葉柄で固く捲き込めてゐる。』

秩父の山旅のこの一節を讀みつゝ、ふと私は木暮さんについてある古い憶ひ出呼び起させた。もう二十年も前の夏山の前であつた。その頃は登山季節前、一つの催物をやつて、登山の宣傳をやつたものであるが、私の學校の旅行部でもそんな企てがあつて、それに講演をお願ひに千駄木町の御宅をお訪ねした。この時はしかも初對面であつたにも拘らず、私の如き新參の者を相手に、九つにきれいに折疊んだ地圖を展げながら、秩父の小倉山が當時未踏の山として残つてゐたことなど、山の話次々として下さつた。縁先にはいろいろの山草の小鉢がきれいに並んでゐて、そのうちでもこの投葉草が最も見事であつた。この名もその當時教へて下さつた二三の草の名の一つであつた。牛込に移られてから、私も會の用事やヒマラヤの話などで度々お目にかゝつたが、河田町の二階

の窓ぎはにも、この草の鉢が大切に飾つてあつた。

私は木暮さんを憶ふ度にいつもこの草のことを思ひ出し、この一節を讀み更に思ひ出を新にしたのである。何となく、この草には特獨な滋味があるやうに思はれ、それから秩父の山の味を聯想し、またこの草のさびをも木暮さんの登山の生活に聯想させずには居られない。

## 一〇

かうしてこゝまでに私は木暮さんの登山の足跡とその山に對する態度或は氣持についてのべて見た。或は第三者から見れば私の所述は楯の半面をしか見ないものかも知れないし、或は不必要な點を過當に強調したかも知れない。しかし、私としてはこの一面こそ木暮さんの全貌を最も適切に特徴づけるものとしてこれを取上げ、他の面にもつと特徴的なものがありとしても、これは全體から見て採るに足らないものゝやうに考へる。また木暮さんについて眞の姿をえがき出さうと努める餘り、讚美の言葉を用ひすぎたかも知れない。しかしそれがため私は木暮さんを國寶的に扱ひ、神棚に祭り上げ、英雄として崇拜しやうとする意圖をもたない。木暮さんは人間生活に於ても、登山に於ても、どこでもつねに一個の人間

である。木暮さんにして見ても、氣の向くまゝに山に登り、山を愉しみ、登山者として當然ふむべき道を堂々と歩いて來られたに相違ない。また生活に於ても今の仕事を自ら與へられた仕事として當然行はれて來たに相違ない。たゞ普通の人達と異なるのは、いつも普通人以上の眞摯さをもつて山に登り、仕事をして來られたといふだけにある。

劃の多い字を好んで用ひられる木暮さんはこの本のみを通じて知る人々に或は漢字で凝り固まつた頑固老爺といふ印象を與へるかも知れない。謹嚴といふ形容は當るにしても、しかもこの近づき難いものうちにも、親しみ、近づき易い所があり、深く親しめば親しむほどさう感じてくる。私などの態度は或は餘り狃れすぎてゐるかも知らないが、木暮さんに對して、木暮先生とも、木暮氏ともまた木暮翁ともかけないで、結局木暮さんといふ言葉を使つて了つた。こうしたことも、木暮さんの人なつこさから來る一印象であらう。またこのことは人に對しては他人の事でもわがことのやうに深い理解と關心とを示され、それに身を入れられる、美しい友情としても現はれる。『時には小而憎いほど羨ましいと思ふこともあれば、時には如何かしてやりたい様な氣のあることもある。

今日など無論引擔いで偃松の中へ放下し込んでやつたらどんなに好い氣持だらうと思つた。』こうした感情のほとばしりはこの本に所々に出てきて、思はずふき出したくなる。田部さんには時にこんな感じを抱かれながら、山には必ず再び二人で出かけられる。田部さんが本を出されるとなると、それに自ら註を加へ更に自ら序文をかゝれた。しかも自分では最近まで本を出す氣にならなかつた。これは木暮さんの思慮深い一面であると共に、木暮さんでなければ見出されない巨きな風格でもあらう。

人によつてはその平常書くもののみから受ける感じと、その日頃直接に接してゐる間に受ける感じとに大きな開きを見出すことがある。しかし、少くとも私には、木暮さんにさうした開きを見出すことはできない。この意味で、この著書も木暮さんらしい印象を與へるであらうし、例へば一般的に見て華やかに乏しいが、濶い一面は充分ににじみ出てゐるであらう。私がかく感じ、かく書いたやうに、この本を通じて木暮さんの眞の姿が、そのまゝ一般の人達に理解されることを、私は信ずると共に、かくあるべきを希ふのである。

## 「山岳」投稿規定

- 一、投稿は何人も自由とす。日本山岳會員たると然らざるを問はず。
- 一、原稿の採否は理事會に於て決定す。
- 一、原稿は返却せざるものとす。
- 一、別刷所要の向はその旨原稿に朱記せられたし、その費用は筆者の負擔とす。
- 一、原稿にはその梗概を附せられたし。
- 一、紀行には概念圖を添付せられたし。
- 一、寫眞は光澤印畫紙に焼付けられ度、裏面或は別紙に説明記入を乞ふ。
- 一、校正は編輯者に一任せられたし。
- 一、地名及び外國語は特に明確に書かれ度、地名には振假名を附せられ度し。

原稿蒐集所

東京市芝區琴平町一、不二屋ビル、三〇七號室

日本山岳會編輯所

原稿用紙所用の向は前記編輯所宛て申込みあり度し。

昭和十四年九月十七日印刷  
昭和十四年九月二十日發行

〔定價金參圓〕

## 發行所 日本山岳會

東京市芝區琴平町一、不二屋ビル内

電話芝一六四九番  
振替口座東京四八二九番

## 著作權所有

編輯兼發行者

東京市牛込區東五軒町三四  
藤 島 敏 男

印刷者

東京市芝區濱松町一ノ十三  
植 田 庄 助











